

---

# バカとテストと召喚獣～幼馴染は超能力者～

マック・ア・ルイン

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

バカとテストと召喚獣〜幼馴染は超能力者〜

### 【Nコード】

N2606J

### 【作者名】

マック・ア・ルイン

### 【あらすじ】

原作知識を『持っていた』主人公が、なんだかんだで転生するよ！自覚無しで性転換もあつたり。たまにシリアス、加えて中二。バカテスの二次創作です。なるべく原作に沿うつもりですが、原作レイプもあるかもです。オリ主は超能力を使いますが、とりあえずチートではありません。

**プロローグ 人間、徳を積むと転生できるんですね（前書き）**

**注意**

この小説はバカとテストと召喚獣の二次創作です。

その手のものが苦手な人は今すぐプラウザの戻るを押してください。

それでも大丈夫な方は本文へどうぞ。

この話と次の話は説明文です。興味の無い方は読み飛ばしてください。

## プロローグ 人間、徳を積むと転生できるんですね

自信を持つて言えるが、俺は結構善良な人間だったと思ってる。

落し物を拾えば交番に届ける程度の良識はあったし、目の前で下らない争いがあれば仲裁してやるくらいには他人のためにも頑張った。

某正義の味方みたいに全てを救おうって訳じゃなかったが、とりあえず自分の回りの人くらいはできる範囲で助けてやろう、とその程度にはいい奴だったと思う。

と言っても自分に対する悪意に無条件で許すような人間でもなく、嫌いな人間もいればソイツが不幸になればザマアミロと思う、ちょっとした悪意もあった。

つまり『平均的に善意も悪意もある人間』よりも少しだけ善意が勝ってた、ただそれだけの話。だから基本的に俺は、他の大多数の人間よりも幸せな人生を歩んできた。

当然と言えば当然だ。情けは人のためならず、俺が向けた善意は少なからず自分に返って来るのだから。

もちろんここであの正義の味方みたいに礼を拒んだりはしない。

他人の善意を受け入れるのも立派なことだと思ってるし、ギブアンドテイクが潤滑な人間関係の基本だというのが俺の持論だ。

とまあここまで長ったらしく何が言いたかったかと言つと。

まさか神さんまで俺に恩義を感じてるとは思っても見なくて。

ありがちな事故死 転生イベントに差し掛かってるってことだよ  
コノヤロウ！

「む、目覚めたか。始めまして、じゃな。神代君」

「え？あ、えーと・・・」

「わし、実は神様なんじゃ。日頃の行いの対価として、君を好きな

世界に転生させてやるう」

「は？」

俺、カミシロ神代 エリス襟守は今現在こういう状況だ。もちろん男。名前が女っぽいとかそういうのはとりあえず置いとこう。

みてくれはアメリカ人と日本人のハーフだけあり、背はどちらかといえは高く、部活動に従事してない割りには結構引き締まった身体をしている・・・と思う。髪は綺麗な金髪をスポーツ刈りにしており、顔もまあ、中の上くらい・・・か？とまあそんな感じの基本スベック、趣味はラノベ。剣道をやっていたりもしたが、もう昔の話だ。まあそんな俺が、目の前で轢かれそうだった少女を助けて、為す術もなく撥ねられた。

その後、ラノベとかでよくある例に漏れず、ああ、なんか温かいなあ、ここが天国なのかなあみたいなのを考えてたらここにいた、と。ハハハ、テンプレート過ぎて涙が出てくるぜ。

だがそんな俺の心情に構わず、自称神がなんか喚いてる。正直、五月蠅い。

「は？とはなんじゃは？とは」

イントネーションまで真似すんな、ウザイ。こちとら混乱してんだよ。もう決めた、お前は俺の嫌いな存在ナンバーツーだ。1位はが主意独占してるから却下な。だから、つい・・・

「おぬし、今相当失礼なこと考えてるじゃろ。わし神じゃぞ、神」  
「自称だろうがボケ。あ、嫌すいません口が滑りました」

即答してしまった。ほら見る、なんか目を見開いちゃってるよあの爺さん。多分此処に来れたって事は普段の善行だけがビックアップされてるからなんだろうな。という事は、だ。

「え、ちょっと待って、わし早くも心が折れそう。あれ、人選ミスった？君、あれだよな？いい人なん、だよな？」

ほれ見た事か、やっぱりこういう答えが返ってきた。だから違うんだって。俺そういうんじゃないんだって。行く先々で言われるし、自分でもそれなりに善い人だとは思っただけど、あくまでそれなりだから。突き抜けて善い人な訳じゃないから。っーかおまえ心弱すぎだろ。自称でも神を名乗ってるくせに情けないぞ。

「口に出てる、出てるよ！やめて、わしのライフはもうとつくに0なんじゃ！！」

「あーうんわかったわかった。解ったから俺が此処に呼ばれた理由とさっきの言葉の意味を簡潔に説明しろ」

こういう事はさっさと済ませるに限るので、要点だけを適当にまとめて質問する。正直もう面倒臭いし帰りたいんだ。死ぬなら死ぬで良いからさっさとしてくれ。失礼じゃない！？いくらなんでも初対面の神様に失礼じゃない！？とか言ってた爺さんも、そんな俺の気分が気付いたのかようやく俺の質問に答え始める。

「むう、仕方ないのう・・・」

曰く、現世で徳を積んだ人間は記憶を保ったまま『転生』する。ある程度成長した体で第二の人生が楽しめる、とか。それは創作や自分の考えた世界、抽象的なイメージでも例外ではなく、基本的にどこでもいけるらしい。

ただし、既存の創作世界などにいく場合はその世界での常識等の代わりに、その作品の未来にかかわる記憶は奪われる。転生後の『俺』は『どんな人物がいるこんな世界に転生した』という記憶だけ

残るということだ。ま、当然といえば当然か。転生後の容姿や性能<sup>スペック</sup>、立ち位置は大体決めることが出来るようなので、転生後に困ることも無いだろう。

「至れり尽くせりだな。裏があつたりはしないだろうな？」

「い、いやそんなことは無いぞ？最初に言つたであろう、これは『対価』じゃと」

こいつが言う『徳』とは、現世・・・今まで俺が生きてきた世界だな。そこでの『ヒト』が種として残る助けになる行動をとることらしい。俺は別にそんな大層な事をした覚えは無いのだが、俺が鍵になつた人間関係も多々あるらしく、そこから生まれるであろう子供の多さがそのまま徳につながる様だ。

「なあ」

「ん？なんじゃ」

「その理論でいくとさ、不倫しまくつてたくさん子供を産ませた人も『転生』するの？」

「いいや、あくまで自分の種をばら撒くのでなく、さまざまな種を残すことが『徳』なんじゃ。お前が行く先でそんな鬼畜はいないから安心せい」

「ん、了解」

ここまで聞き、俺はいつたん言葉を切る。聞いた感じじゃ、別に悪いところもなさそうだ。無さそうなんだが・・・

どうにも引つかかる。確かにそれなりに筋は通つてるが、どう考えても俺は『転生』させてもらうをどの『徳』とやらは積んでない。となると。

「おい爺さん。あんた俺が裏が無いか聞いたとき、何で言いよんだ？」

「っほ！！？べ、べべ別に言い淀んでなんか無いぞ！？き、気のせいじゃないのかう！！」

「おもつくそ動揺してんじゃねえか。オラ吐け。いつたい何を隠してやがる」

そういつて、首に模造品レプリカでは無い、本物の約束された勝利の剣を突きつける。何で持つてるのかって？壁に飾ってあったのさ。見つけた時は俺もちよつとびびった。何でこんなもん飾って有んだよ。で、突きつけられた方はめっちゃ冷や汗を流してる。神つてこの程度で怪我したりすんの？まあおもしろいから続けるけど。

「いいいい嫌、本当に何も・・・」

「三秒。その間に答える」

「あなた様を死なせたのは私のせいなのです」

「そうか。死ね」

「待って！自分から聞いたんだから言い訳ぐらいさせて！！」

「ちっ」

そういつて渋々エクスカリバー聖剣を取り下げる。こいつ、言うこと欠いて俺が死んだ原因だとか抜かしやがって。

「コホン、あー先ずはじゃな、おぬしも思ってるじゃろう？あんなところで死ぬはずでは無かったと」

「・・・まあ、そうだな」

そう、実際、為す術も無く轢かれたというのは間違いだ。本来俺ならあの状況で少女を突き飛ばした後、自分自身も方向転換して車をよけるくらい出来た。そんなスピードも出してなかったし、一応

ブレーキも掛けてたみたいだからな。

だが、あの少女を助けて足をついた瞬間、問答無用で左にすっ飛んだのだ。その後車に真正面からぶつかり、派手に吹っ飛んだ後に現在に至る。で、あれが貴様の所為と？

「うむ。ぶつちやけな、お主が助けなくてもあの少女は助かるはずだったのじゃ。あの地点に仕掛けた罠で」

「・・・今何だった？」

「あの罠は踏んだものに対し強制的に西方向にエネルギーのかかるというもので。少女の寸前で車はブレーキが効いてギリギリ急停車する・・・様に見えるはずだったんじゃ」

「・・・ほほう」

「だがお主が少女を助けた後それを踏んでしまったな。結果、西側から来た車に正面からぶつかったわけじゃ」

「・・・よし。ソコニナオレ」

「いやまあ、お主も悪かったんじゃぞ？だからまあ、今まで積んだ徳の分にお詫びの分も加算して『転生』させてあげようと思ったわけじゃ」

「・・・」

まあ、事情は大体わかった。確かに若干俺に非が有ったのも認めよう。神側から見れば俺がでしゃばった形になるんだし。だけど、ねえ・・・

「・・・『転生』って、俺が今までいた世界にはいけないのか？」

「無理じゃな。それはそう決まっておる」

「ふむ・・・」

それはそうだ。俺が知り合いのところに行って、「俺転生してきてんだよ」とか言ったら大変なことになる。まあよくわかんないけど。

むー・・・しゃあない、か・・・

「いいじゃねえか。『転生』してやんよ」

「おお、やっと決めたか。まったく、ほかの有象無象は一も二も無く飛びついてくるといいうのに、お主ときたら・・・」

「うっせ。で、行くのは何処でも、性能は自由だったよな？」

まだぶつぶつ言ってる爺さんをほつといて、行き先について考える。んー、やっぱりラノベかゲームあたりの世界に生きたいものだ。

Fate・・・だめだな。主人公と絡む役回りだとどれだけチートでも死にかねない。

リリなの・・・これもパス。男が少なすぎて精神的にキツイ。

禁書・・・無理だ。上条さんを嫉妬で殺しちまいそうだし。

一度バトルから離れてみるか？バトル系はちよつとなー

涼宮ハルヒ・・・異世界人として特攻すればいけるか？んー・・・パス。ああいう女嫌いなんだよね。

生徒会・・・む、ちよつと良いかも・・・あ、嫌だめだ。メンバーが固定だから絡む余地が無い。

あーでもない、こーでもない・・・と爺さんと一緒にぶつぶつ考える。んー比較的平和で、主人公の絡む余地のある世界・・・あ、そつだ。

「バカテスにいこう。あそこなら基本何処でも絡めるし。一部の人

間以外は平和だ」

「・・・む、決まったかいの？ほいじゃ、性能と時間軸、空間座標スペースを決めい。すぐ転移するぞい」

「お、時間軸も決められんのか。じゃあ主人公組が・・・小四位かな？そこらへんに。俺は基本このままで肉体年齢を十歳に戻してくれ。あと、そうだなあ・・・それだけじゃ面白くないから超能力みたいなものも付け足しといてくれ。これは適当で良い。住居は、つと・・・うん、吉井明久の隣とかが面白いかな。服は俺の体格に合わせたのをタンスに補充しといてくれ。金は仕送り形式で・・・月四十万くらいであれば良いや。口座も作つといて」

「うむ。委細承知した。では『転生』するぞ。いいな？」

「ああ。それじゃあな、爺さん」

そうして爺さんが指を鳴らすと、俺の体が光に包まれる。『転生』が始まるみたいだ。

そのとき、俺は確かに見た。

あの爺さんが、ニヤリとほくそ笑む姿を。

「あ、そうじゃ。言い忘れたが、嫌がらせで多少設定を弄つてある。具体的には女になつてる。詳しくは向こうの机の上に書いてある紙を見るのじゃー」

「んなつ！！バツ、貴様妙に素直だと思つたら何てことしやがる！！！」

「ハツハツハ、神様を蔑ろにした罰じゃ。精々足掻くがいいわ！」  
「てめつ、絶対呪つてやる！！呪い殺してやるからなああああああ  
あ！！！！！」

そうして、不安要素を山ほど残しながら俺は『転生』していった。

あのジジイ、いつか絶対殺してやる・・・!!

ブローグ 人間、徳を積むと転生できるんですね(後書き)

どうでしょうか。

何分初投稿なので、至らない点や感想、評価などあればお願いします。

第零話 『俺』は『私』にバトンタッチ(前書き)

二度目の投稿です。前半ほとんど説明なので、興味の無い方は読み飛ばしても概ね問題ありません。

## 第零話 『俺』は『私』にバトンタッチ

目が覚めると、俺は部屋の中にいた。俺の一人暮らしの部屋と変わらない、基本的な家具が揃ってる。タンス、机、テレビ、本棚、etc、etc・・・とりあえず、これだけ有れば生活には困らんだろう。冷蔵庫を確認した限り、食材もあるようだ。幸い本棚には生前(?)集めてたバカテス以外のラノベならあるし、脇の棚に目をやればゲームも持ってた物はある。住まいに関しては完璧だな。

ただ、部屋がかなり広い。ちよつと探してみると、使われて無い部屋もあるようだ。まあしょうがないか。明久の隣を指定したから、確か家族用のアパートだっけか。多少殺風景なのは目を瞑ろう。

机の上に目をやれば、A4のプリント用紙を四、五枚束ねた物が置いてある。転生に関する注意点だっけ?どうにも記憶があいまいだが、それはまあ後回しで良いや。

「・・・まずは、お隣さんに挨拶でも行きましようかね」

と、声を出して違和感を感じる。俺ってこんな声高かったっけ・・・とそうだ、小四に戻ってるんだから当たり前か。んー、それでもこんな高かったか・・・?

アー、ンー、と声を出して確認しながら、壁の時計と今の服装を確認する。

現在の時刻は夕方六時、一般的な小学生なら帰ってきてる時間だ。引越しの挨拶に行くなら問題ないだろう。今の服装は・・・転生前まで来てたやつと同じデザインっぽいな。黒い袖なしのタートルネックに丈の短めな薄手のパーカー、ベルトを巻いたジーンズの長ズボンだ。

何かおかしい。服装の確認のときに感じた、強い違和感。何か同じデザインなんだけど所々違うんだよなあ・・・?

それに、何か髪が長い。纏わりついてうざったいからそこらに有った髪ゴムで留めたけど。なぜそこらに髪ゴムが有ったのかも謎だ。

「ま、いいか。それよりもさっさと吉井さん家に行きますか、つ」とりあえず疑問点は後だ。ただでさえ小学四年生の身で、これ以上遅くなって怪しまれても困る。先に引越しの挨拶に行くべきだ。違和感の正体を探するのはその後も遅くはないだろう。

結論から言おう。遅かった。遅すぎた。俺は何事よりも優先して違和感の正体を追及すべきだった。それでなくても机の上の紙だけでも確認しておくべきだったのだ。

ピンポン

どこと無く間抜けなチャイム音が響く。さすがに明久だつてこの頃は一人暮らしではないはずだ。となると吉井（姉）か吉井（母）あたりが出てくるんだろうが……

「ハイ、どなたですか？」

お、この声は……吉井（姉）か？丁度いい、（母）の方は人となりが良いわからないんだよね、登場回数が少なくて。そんなことを考えながら、蕎麦片手に吉井（姉）を待つ。ちなみに蕎麦は倉庫から発掘してきた。さすが爺さん、用意の良い事だ。

「あ、隣に越してきた神代です。引越しの挨拶に来ました」

と、無難な挨拶を返しておく。しばらくすると吉井（姉）……ええい面倒臭い。玲さんでいいや。

玲さんがやってきた。まだあそこまでスタイル抜群な訳でもないな。まあこの頃まだ高二だしな、当然か。

「ハイハイ、どうもご丁寧に……。つと、あら可愛らしい。ふふ、お嬢さん、名前を教えてくださいますか？私は吉井 玲です」

「？襟守です。神代 襟守。あ、これどうぞ」

「有難う御座います。そう、エリスちゃん。それで、エリスちゃんのパパとママを呼んできてもらえますか？」

つやべ、マズった！よく考えたら小学四年生が一人暮らしなんて不自然極まりねえ！！どうかして誤魔化さないと不味い（気がする）！！

「あ、え、そのつ、両親はいないんですよ！いや勿論健在なんですけども！ここへは一人暮らしですね！？あの、自分今年四年生なんですけども！わが神代家に十歳になったら一人暮らしをするという伝統がありますて！！」

そしてテンパった結果、聞いても無いのに強引過ぎる言い訳を始める俺。ヤバイ、この小四怪しすぎる！こんなんじゃ余計怪しまれて……無い！「偉いですねえ」とか言つてめっちゃ頭撫でてる！まさかあんな言い訳を信じるなんて、さすがだよ玲さん！

「そう、小学四年生といえばうちのアキ君 私の弟も今年十歳なんですよ。同じ学校でしょうし、会っていきますか？」

「あ、弟さん・・・明久君ですか。そうですね、友達になれるかもしれないですし」

よしっ、これは好都合。我らが不動の主人公、明久とは早めに会ったときたかったからな。できれば幼馴染的な立ち位置で居たいし。で、結局お邪魔することになり、俺を居間に通した後、玲さんは奥のほうに消えていった。おそらくは明久を呼びに言ったのだろう。

「では、お邪魔します」

「はいどうぞ。『アキくん！お隣のエリスちゃんが遊びに来ましたよー！』」

『え？お隣って、隣は誰も住んでないんじゃないの？』

『今日引越してきたそうです。同い年の可愛い女の子ですよ？』

『んー、ちょっと待ってて。今から着替えるから』

ライ。女の子って言ったか？今。失礼な。確かに女っぽい名前では有るが、そこまで中性的な顔立ちをした覚え、は・・・

『嫌がらせに設定弄ってある。具体的には女になってる。』

！まさか・・・！！

俺は速攻でズボンに手をつ突っ込んだ。そこに有るべきモノがあると期待して。だが、現実には甘くなかった。

無い。

無くてはならないものが。

「いらっしやい。吉井明久、で・・・ねえ、どうしたの？」  
「いや、べつに・・・大丈夫だよ。ナニもナイ、ヨ・・・」

トレーナーに普通のスラックスという普通の姿で居間にやってきた明久は、妙にどんよりした俺を見て割と本気で心配そうだった。

「はぁ・・・」

そんなわけで午後九時過ぎ、俺は自分の部屋に戻ってきてる。明久とのファーストコンタクトは考えうる限り最悪。終始気まずい空気が流れ、会話も何もあつたもんじゃなかった。原因は勿論、俺から出てた『今俺に話しかけるな』と言わんばかりのオーラだが。と言うか俺は悪くない。悪いのはあの爺ユキさんだ。というか女に成ってるのすっかり忘れてたよ。後超能力も。

で、今の俺の状況。

女に成った以外はあまり変わらない。年相応に運動能力も低下しているし身長も縮んでるが、それはまあ良い。どうせまた伸びるだろう。

外見は・・・中々に美少女だ。前世であつたらとりあえず交際を見越して友達になりたくなるくらい美少女だ。文月学園は美少女ばかりらしいし、まあ丁度良いだろう。吊り目気味の勝気な目、整った口元、染み一つない肌。どれをとっても完膚なきまでに可愛い。自分で言うのもあれだが。

で、超能力。机の上にあつた『神様メモ』を見た限り、どうも爺おバカさんの嫌がらせのせいで果てしなく微妙になつてる。例を挙げると

『空間転移』テレポート・・・名ばかり能力一号。転移できるのは自身を基点とした半径2m範囲のみ。しかも視界内限定なので窓みたいな透過性の高いものでもない限り遮蔽物を越えられない。

『念動能力』サイコキネシス・・・名ばかり能力二号。重量制限1.5kgとかなり酷い。しかも俺から足をつけてる地面から10?までしか上げられない。視界内から消えると強制解除、使ってる間自分は動けない、と何に使えばいいのかわからない。

『意思疎通』テレパシー・・・名ばかり能力三号。有効範囲は半径5mと玩具のトランシーバー並み。しかも俺から相手への一方通行。意思『疎通』出来てねえ。正直トランシーバーの方が高性能。

『精神透過』サイコムトリー・・・名ばかり能力四号。一応ココロを観ることは出来るのだが、制度はかなり微妙。明久に試したら、『チワワ』は『犬』としか読み取れず、好きな色は三原色レベルまでだ。あんま当てに無んない。

などなど。役に立たなねえ。しかも文月の召喚フィールドの中では使えないという。なんというロースペック。

だが・・・これ等とは別に、俺の超能力に対するイメージが具現化した『奥の手』が二つと、後述の問題に対する防衛本能が生み出した『切り札』が有るらしい。特に『切り札』の方は上手く使えばこの世界では無敵だ。

ただし、その三つにも嫌がらせは及んでるらしく、副作用がかなりきつい。いやそんなにきつく無いかも知れないが、俺からすれば天敵のような副作用が設定されてやがる。あの爺・・・！  
そして最後。これが一番の問題なんだが。

今日の零時零分、つまり明日になると、『俺』の人格が消える。

つっても植物人間になるわけじゃない。なんでも、これからの生活での不自然を減らすため、今までの俺から別離した第二人格のようなものに切り替わり、『俺』は封印だそうだ。記憶を共有し、『男だった』と言う記憶だけが残る『私』になる。

そいつは完全に女人格なそうなので、確かに問題ないだろうな。さらに、『私』はバカテス知識はないらしい。勿論今日過ごした記憶から蓄積されてるので、明日また明久と「始めまして」とかはならないだろうが。いつまでも俺の記憶が消えないのはこういうわけだったのか。

だがまあ、心残りが無いわけでもない。というか、まだ男目線で秀吉を愛でてない。冗談だが。

まあ、仕方ないか。多分こうしないと俺は簡単にぼろを出す。このままじゃトイレに行くだけで一苦労だ。それを防ぐにはこれ位しかない。

だが、そんな簡単に割り切れるコトでもない。せめて一人だけでも、『俺』の存在を知ってほしい。だがあの爺さんは論外だ。でも、そんなこと誰に・・・

・・・

・・・明久しかいなくね？

思い立ったが吉日。と言うわけでPM十一時、今現在俺は明久ん家の前にいます。

つつても勿論鍵かかっているし、どうするかなあ……つと、そうだ。こんな時こそアレの出番じゃないか。覗き穴を探して、そこから中を覗く。よし、これなら……

「……『テレポート空間転移』」

よし、中に入れた。こういうとき便利だな、これ。空き巣紛いの事しか出来ないけど。

「さーって、明久の部屋は……と、ここだ」

明久の部屋にたどり着き、音を立てないようにドアを開ける。隙間が見当たらなかつたから、普通に入るしかない。まったく不便な能力だな。

「よし……おい、明久。明久くん」

小声で明久に呼びかける。玲さんに見つかっても面倒だし、『奥の手』は副作用がきつい。見つからないようにしないと。

「ふあ……？あ、エリスちゃん？」

明久が目覚める。寝惚けてるのか、俺が部屋にいるのにまったく疑問を持ってないようだ。まあ明久だからな、起きてても気付かなくても知れん。『エリスちゃん』と言う呼び名に若干悪寒が走るが今は無視。時間はあまり取れない。

「ああ、そうだ……明久、お前に話しておきたい事があるんだよ。黙って、聞いてくれるか」

なるべく優しい声色で明久に問う。明久は寝惚けながらも意味は理解したようで、目を擦りながら頷いた。

「よし、じゃあ何から話そうか。そうだな　明久。お前は、異世界って信じるか？」

そんな語り口から紡がれる物語は、傍から見ればあまりにも荒唐無稽で、夢みたいな話。それでも『俺』にとってそれは紛れもない現実で、掛け替えの無い思ひ出。きつと、明日からの『私』は絶対に語ることの無い、その御伽噺のような話を、明久は食い入るように聞いていた。

小学校の事、中学校の事、高校の事。家族の事、友達の事、親友の事、彼女の事。異世界から来た事、超能力の事、自分勝手な神様の事。そして、明日になったら『俺』は消えて、新しい『私』になること。別途の上に、明久の隣に腰掛け、朗々と語る。そして一段落着いたところで、俺は笑顔を浮かべて、明久に別れを告げた。

「だから、明久。今日の事は忘れてくれ。今の話は、『俺』俺がいた証が残したいって言う、身勝手なエゴだから。『私』を頼む。きつと情けないやつだと思う。それじゃあ、な」

あ・・・と名残惜しそうな声を漏らす明久に背を向け、窓の方に行く。幸いベランダにつながってるから、ここから帰れるだろ。来るときもこつちから繰ればよかったな。時間は十一時五十八分に差し掛かっている。時間切れだ。もう自分の部屋に帰らないと不味い。窓に手をかけ転移しようとしたとき、明久から声がかかった。

「えつと・・・またね」、襟守君」

思わず振り返り、数秒間明久の顔を凝視した後、今度は正真正銘、

満開の笑顔に向けてやった。

「・・・ああ。“またな”。明久。自分に自信を持ってよ？お前は自分で思ってる以上に、周りの人を惹き付けるやつだから」

そして世界が廻り、『俺』は『私』へとバトンを渡した。

そうして一人の青年が世界から姿を消し、一人の少女が成り代わった。

けれど少年は、青年を忘れることは無くその存在をココロに刻み付けた。

そして

「転校してきた神代 エリスです。これから短い間ですが、よろしくお願ひしますっ」

「エリスちゃんって言うんですか。私は姫路 瑞希です。よろしくね？」

月日は

「で、卵を軽く掻き混ぜたら・・・って瑞希！？あんた卵焼き作るのに何入れてんの！！？」

「え、でもこの前理科の授業でこつすると酸味が出るって・・・違うんですか？」

「違あう！！確かに酸っぱくなるけど！それは舌が焼けることで得られる酸味だから！！というか卵焼きに酸味は要らん！！」

流れていく

「・・・あなた、匍匐前進して何やってんの？」

「・・・何もしていない」

「ふーん・・・私、スパッツ穿いてるわよ？」

「・・・卑怯なっ・・・！！」

「ほら、明久！今日は初登校日なんだから、早く行かないと遅れるわよ？」

「ちよっと待って、目覚ましが電池切れで・・・よしっ、できた。それじゃあ行こうか、エリス」

バカとテストと召喚獣 幼馴染は超能力者 完

「いやいやいや！終わらないよ！？まだ本編始まってもないからね！？」

「何天に向かって叫んでんの。ほらさっさと歩く！」

第零話 『俺』は『私』にバトンタッチ（後書き）

なんだか中二ワードが登場。『奥の手』はそこまで強くもありませんが、それなりに効果的です。

感想、評価があればお願いします。

## 第一話 やっぱり人間関係は第一印象が大事（前書き）

ようやく本編に入りました。ここからは基本原作ストーリーです。主人公は超能力を結構簡単に使います。

## 第一話 やっぱり人間関係は第一印象が大事

問 以下の問いに答えなさい

『調理のために火に掛ける鍋を製作する際、重量が軽いのでマグネシウムを材料に選んだのだが、調理を始めると問題が発生した。このときの問題とマグネシウムの代わりに用いるべき合金の例を一つ挙げなさい』

姫路瑞希の答え

『問題点・・・マグネシウムは炎に掛けると激しく酸素と反応する為危険であるという点。』

合金の例・・・ジエラルミン』

教師のコメント

正解です。合金なので『鉄』では駄目という引っかけ問題なのですが、姫路さんは引っかけかりませんでしたね。

土屋康太の答え

『問題点・・・ガス代を払ってなかったこと』

教師のコメント

そこは問題じゃありません。

吉井明久の答え

『合金の例・・・未来合金（すごく強い）』

教師のコメント  
すごく強いといわれても。

神代エリスの答え

『問題点・・・イメージに綻びが合ったため投影品が霧散してしま  
った。』

合金の例・・・投影の使用者が最も理解している金属』

教師のコメント

現実の人間が魔術を使える事を前提に答えないでください。

あれから七年経ち、『私』達も高校二年生になった。うーん、初  
めて会ったときの玲さんと同い年だと思つと、何か感慨深いね。

私、神代エリスは、吉井明久と一緒に通学路を歩いていた。もう  
七年間も連れ添つてるし、多分幼馴染といつて差し支えないだろう。  
その明久と、何て事の無い雑談をしながら歩いていたとき、私はあ  
ることに気がついた。

「あ。ゴメン明久、先に行つてて。私ちよつと忘れ物とつて来る」

「え、忘れ物？別に待つてるけど」

「いーから。あんただでさえ『観察処分者』なんだから。遅刻ぐ  
らいはしないようにしなさいって」

そう。こいつは『観察処分者』だ。文月学園におけるバカの代名  
詞。まったく、変な見栄張らずに言ってくればお金くらい貸して  
あげたのに、本当にバカなんだから。

「そつ？じゃ、悪いけど先に行つてるね」

「ほいほい。私は少し遅れるけど、ちゃんとしなさいよ」

そういつて明久と別れ、今来た道を逆走する。全く、こういうとき私の能力は不便だ。空間転移は2mしか移動できないし、多少インターバルが要るから普通に走ったほうが速い。『奥の手』もこういうことには使えないし。はぁ・・・

それで忘れ物を回収し、急いで学校に行く。そしたら、学校の前である女生徒を見かけた。文月の制服、ピンク色の髪、小柄な体、そして忌々しいほどに大きな胸。あれは・・・

「おーい瑞樹ー！どつたの、こんな所で？遅刻なんて珍しいじゃない  
い」

「あれ、エリスちゃん。奇遇ですね、こんなところで」

そう、わが学園のアイドル・・・かどつかは知らないが、姫路瑞希だ。いつ見ても可愛いんだからもう。別に百合じゃないよ？

「ん、ちよつと忘れ物をね。瑞希は？」

「ちよつと昨日まで熱を出しちゃいました・・・少し寝すぎちゃったんです」

「ふーん。体が弱いと大変ねえ」

「ええ。この間の振り分け試験でも熱で途中退席してしまって・・・

「げ。それじゃ強制的にFクラスじゃないの。まったく勿体無い」

そんなことを話しながら学校まで歩く。もう遅刻は決定だから歩調はとともゆつくりだ。

さて、私は何クラスになるのかしらね？

「神代、姫路。お前らも遅刻か」

玄関前で鉄人に呼び止められる。鉄人とはこの目の前の、いかにもスポーツしてますって筋肉に覆われた浅黒い肌をした短髪の教師、西村教諭。去年の私達の担任圏生活指導の先生だ。

「おはようございます西村先生。すいません、少し体調が優れず・・・」

「あら鉄人。お前らもって事は結局明久は遅刻だったわけ？まったく、せつかく先に行かせたのにあいつときたら・・・」

「神代・・・少しは鉄人と呼ぶことを躊躇え。吉井でさえ途中で訂正しただぞ」

で、その鉄人に呼び止められてしまった。こちらら遅刻なんだから用件はさっさと済ませてほしい。

「ほれ、まずは姫路だ。今回の結果は残念だが仕方が無い」

「いえ、いいんです。悪いのは私ですから」

そんなやり取りの後に瑞希に茶封筒が渡される。さっきの話が本当ならFクラスなのだろう。本当勿体無い。

「それと神代。受け取れ」

「はいどーもー」

その後にも茶封筒が渡される。瑞希に比べて投げやりな気がするがまあ良いだろう。私はどちらかという問題児だし。さて、どうなもんかね？

「今だから言うが、神代。俺はな、『もしかしたら神代は、吉井を追っかけてわざとFクラスにいくんじゃないか』と思ってたんだ」「失礼ですね。いくら私とはいえ、公式のテストで手を抜いたりはしませんよ。それ位の分別はついてます」

む、結構頑丈に糊付けされて中々開かない。うーん、実力だけなら問題なくAクラスなんだけど。振り分け試験前日に明久と深夜まで騒いでたせいで寝不足だった。もしかしたらCクラスあたりでもおかしくは無い。

「ああ。同じようなことを吉井にも言ったがな。振り分け試験の前の答案を見て、俺はようやく気がついた」

「本当にようやくですね。そんなんじゃ生徒に舐められますよ？」

そう、その事についてはもう決めてある。本音を言えば明久と同じクラスに行きたかったが、やっぱりわざと悪い成績をとったりはできない。その気になれば他クラスでも明久と会えるし。

「ああ、そうだな。喜べ神代。もうお前の事を誤解したりはしない」

ええい面倒臭い。諦めて上の部分を破き、中の紙を開いて確認する。

『神代エリス・・・Fクラス』

「お前は頭はいいが、正真正銘のバカだ」

やっぱり、朦朧として書いた答えがいけなかったんだろうか。特に文系の答えは全部記憶にある単語を書き連ねてたからなあ。幻想殺しとかスターライトブレイカーとか。

S I D E 明久

「あの、おくれて、すいま、せん・・・」

「すいませーん遅れましたー」

『えっ？』

単調な自己紹介に飽き飽きしていた頃。不意に教室のドアが開いて、誰からとも泣く声が上がった。そりゃそうだ。普通はびっくりするだろう。

クラスがに騒がしくなる中、数少ない平然としている人物、担任の福原先生が話しかけた。

「ちょうど良かったです。今自己紹介をしているところなので君達もお願いします」

「は、はい！あの、姫路瑞希といいます。よろしくお願いします・・・」

小柄な体を縮こまらせて声を上げる姫路さんと。

「りよーかいでーす。神代エリス。アメリカのハーフだけど英語は苦手ー。その吉井明久君とはあ、勉強を教えたり料理を作りあったり一緒のベットで寝たりする間柄でえす（はあと）」

『死ねえええ！！！』

「必殺 卓袱台ガードッツ！！！」  
シユカカカカツ！！

そんなことをのたまうエリスだった。

「というか危なっ！！今の僕の反射神経じゃなきゃ死んでたよ！！  
？相変わらず、勘違いでも人の幸福を全力で邪魔する奴等だ・・・  
っ！！」

「吉井・・・？今の話、詳しく聞かせてもらおうか・・・？」

「そうですね、吉井君・・・。私も、ちょっと興味があります・・・」

「まだ危機は去って無かったあっ！というか姫路さん！？君そんなキヤラじゃないよね！！？」

「訂正してエリス！一番最後のだけでいいから！！このままじゃ僕の生命があっ！！！」

完膚なきまでに終わっちゃう！

「はははっ、冗談よ冗談。前二つはともかく、最後のはね。そんなんでも幼馴染だし、殺されるのは困るのよ。だから抑えて、瑞希、美波」

「ああっ、今だけはエリスが神に見える！」

「半殺しまでにしといてね？」

エリス貴様あああ！

「あ、あの・・・」

僕の人生が幕を引きそうな時、脇でみてた須川君がおずおずと手をあげた。ナイスだ須川君！今度僕のコレクションをあげよう！

姫路さんとエリスも、僕の処刑を中断してそっちを見る。よし、いまの内に・・・

「どうしてここにいるんですか？」

そして僕が自分の席に帰って来た時、聞き様によっては失礼な質問が浴びせられる。当然だろう。姫路さんもエリスも学年トップクラスの成績だ。誰もが彼女達はAクラスにいると思っているはずだ。

「そ、その・・・振り分け試験の最中、高熱を出してしまいました・・・」

「いやー、ちょっと前日はしゃぎ過ぎてね？寝不足で意味不明な答えばっか書いてたんだわ」

その声に、クラス中から言い訳の声が上がる。思ったよりバカばかりだ。

「で、ではっ、一年間よろしくお願いしますっ！」

「ん、私もよろしくねー」

そして、逃げるように僕達の隣の空いてる席に着く。よし、これ

で僕の処刑も有耶無耶に・・・

「吉井、後で覚悟しといてね？」

なつてなかった。

#### SIDE OUT

「あのさ、姫」  
「姫路」

明久の声にかぶせるように、雄二が声をかける。可哀相に、明久が妄想が潰えた様な顔をしている。

「は、はいっ。何ですか？えーっと・・・」

「坂本だ。坂本雄二。よろしく頼む」

「あ、姫路です。よろしくお願ひします」

「そしてご存知エリスだよーっと。隣良い？瑞希」

「はい、エリスちゃん。どうぞ」

で、瑞希の隣に座る。うーん、座布団がスカスカで正座する膝が痛いなあ。Aクラスのリクライニングシートがうらやましい。

「あれ？エリスって姫路さんと仲いいの？」

「なーに言ってるのよ。あんたも小四で同じクラスだったでしょうが。私は去年も同じクラスだったし、昔話に花が咲いたのよ」

「へー」

「へー。じゃない。まったく、ゴメンね瑞希。こんなんで」

「い、いえつ。別にそんなことは・・・」

ホントにもう、何でこんなのを気に入ったのかしら。瑞希といい、美波といい・・・何か、騙されてる気がするわね。

で、雄二が瑞希に話しかける。というかこっちが本題よね。雄二にしてみれば。

「ところで、姫路の体調はまだ悪いのか？」

「あ、それは僕も気になる」

「よ、吉井君!？」

突然横から出てきた明久の顔を見て、瑞希が驚く。あ、そんな反応したら・・・

「姫路。明久が不細工ですまん。」

ほら。明久が哀しそうな顔してる。そんな明久を見て、あわてて明久のフォローに入る瑞希。

「そ、そんな！目もパツチリしてるし、顔のラインも細くて綺麗だし、ぜんぜんブサイクなんかじゃないですよ！その、むしろ・・・」  
「ふむ。そういわれると、明久の顔がまともに見えるから不思議ね」  
「そうだな。そういえば、俺の知人にも明久に興味があるやつがいた気がする」

その声に明久と瑞希がビクツと反応する。雄二、そのネタはまさか・・・

「確か、久保」

「久保？どの久保さん!？」

「どの久保さんですか!？」  
「利光君、ね。確か」

雄二の言葉を引き継いで宣告する。勿論久保君は男だ。

「大丈夫よ。半分冗談だから」

「え?残り半分は?」

「で、雄二。さっきの話なんだけど」

「そうだったな。姫路、体は大丈夫か?」

「あ、はい、今はもう平気です」

「ねえちよつと!残りの半分は!？」

「ちよつと明久、うるさいわよ」

「これ僕が悪いの!？」

まったく、こんなことで大声出すんじゃないっての。おかげでホ  
ラ、先生が

「はいはい、その人たち。静かに・・・」

パンパン バキィツ バラバラバラ・・・

「・・・なかなかすばらしい筋力をお持ちのようで」

「いや、設備の問題でしょ?」

「明久。皮肉ぐらい自分で解りなさい」

「あ、ははは・・・」

皮肉も理解できない明久バカの隣で瑞希が苦笑してる。改めてこのク  
ラスの設備の酷さを理解したようだ。

ゴミ屑になった教卓を見た福原先生は「替えを用意してくる」と  
言い残し、気まずそうに教室を出て行った。

## 第一話 やっぱり人間関係は第一印象が大事（後書き）

どうでしょうか。女性視点に慣れませんが、追々頑張っていくこと  
思います。

感想、評価などあればお願いします。

## 第二話 戦争とは略奪だ

具体的には設備を寄越せ(前書き)

四回目、第二話です。

主人公は主要人物に超能力のことは話していますが、転生してることは明久しか知りません。

## 第二話 戦争とは略奪だ

具体的には設備を寄越せ

問 以下の英文を訳しなさい。

『 This is the bookshelf that my grandmother had used regularly. 』

姫路瑞希の答え

『 これは私の祖母が愛用していた本棚です。 』

教師のコメント

正解です。きちんと勉強していますね。

土屋康太の答え

『 これは 』

教師のコメント

訳せたのは This だけですか。

吉井明久の答え

『 「 \* X - 1 」 』

教師のコメント

出来れば地球上の言語で。

神代エリスの答え

『デイス イズ ジ ブクシエルフ ザット マイ グランドマザ  
ー ハド ユースト レギュラリィ』

教師のコメント

訳すとはカタカナ読みするという意味ではありません。

S I D E 明久

先生が出て行った後、僕は雄二を連れて廊下で話していた。内容は勿論『試召戦争』の事だ。その事を切り出すと、雄二は目を細めて尋ねてきた。

「・・・何が目的だ？お前が今更勉強の設備なんかの為に戦争を起すなんて、そんな事は有得んだろっが」

「そ、そんな事は」

「嘘はいけないわよ、明久？瑞希の為でしょ？」

「ふおおおっ！」

急に肩から声が聞こえてきたので驚いた。この声はエリスだな！？

「エリス！空間テレポート転移で背後に回らないで！」

「あら良いじゃない。このくらいにしか使えないし」

「・・・お前らは相変わらずだな」

雄二は苦笑しながら、呆れた目でこっちを見ている。ぐっつ、そんな目で僕を見るな！

「それにしても、やっぱり姫路のためか」

「べ、別にそんな理由じゃ」  
「明久。言い訳は見苦しいわよ？」

くうっ！全然取り合ってくれない！

「まあいいさ。どうせ試召戦争はやるつもりだった。作戦も思い付いたし　　っと、先生が来た。入るぞ」

雄二に促され、僕らは教室に入った。

## SIDE OUT

「　　FクラスはAクラスに『試験召喚戦争』を仕掛けようと思う」

そんな雄二の提案は、現実味の乏しい絵空事にしか思えなかった。教室中から否定的な意見が飛び交う。ま、私たちはバカの集まりだからこそそのFクラスだし、当然よね。

『何をバカなことを』

『勝てるわけが無い』

『姫路さんがいたら何も要らない』

『これ以上設備が落とされるなんて嫌だ』

『神代と結婚したい』

そんな声上がる。ちなみに最後のやつにはカッターを投げて牽制しておいた。まったく、そんな事言って良いのは明久だけなんだから。

「そんなことは無いさ。このクラスには勝てる要素が揃ってる。今からそれを説明してやる」

え、あるの？そりゃ私も負ける気は無いけど、Fクラスだよ？

「おい、康太。畳に顔を押し付けて姫路のスカートの中を覗いてないで前に来い」

「……………!!(ブンブン)」

「は、はわっ」

あ、あれは！恥も外聞も無く低姿勢から覗き込み、かつその覗きの明らか証拠を未だに隠そうとしてるその姿。あれこそまさしく

「紹介しよう。こいつがあのある有名な、ムツツリーニだ」

「……………!!(ブンブン)」

そう、あのムツツリの名に恥じない立ち振る舞い。ムツツリーニだ。その名は男子からは畏怖と畏敬を、女子からは軽蔑を持って拳げられる。

『ムツツリーニだと……………?』

『馬鹿な、ヤツがそうだというのか……………?』

畳の跡を必死に手で押さえる姿が哀愁を誘う。どんな状況でも下心を隠し続ける、その異名は伊達じゃない。

何か、隣を見ると瑞希が頭に疑問符を浮かべてた。ただのムツツリスケベだから気にしないほうがいいと思う。

「姫路のことは説明するまでも無いだろう。皆だってその力は知っ

てるはずだ」

「えっ？わ、私ですかっ？」

「ああ、うちの主戦力だ。期待してる」

『そつだ。俺達には姫路さんがいるんだつた』

『彼女ならAクラスにも引けをとらない』

『ああ。彼女がいれば何も要らない』

さつきから瑞希にラブコールを送ってる奴は誰だろう。

「木下秀吉だつている」

あら、秀吉もFクラスなんだ。まあ学力だけは残念だからね。あんなに可愛いのに。

『おお・・・！』

『あいつ確か、木下優子の・・・』

双子のお姉さんの方も有名だ。秀吉と瓜二つで、秀吉にはできないことばかりできる。まあその代わり、秀吉の得意なことは全然できないけど。

「そして、神代エリスもいる。こいつは成績がいいのは勿論・・・」

「ほいほい、呼んだ？」

呼ばれたので、テレポルト空間転移で雄二の隣まで行く。皆が驚いてるが仕方がないだろう。どうせ見せなきゃ信じてくれないし。

「この通り、超能力者だ。」

一泊置いて、

『『『えええええええええつ!!!!?』』』』

驚愕の聲が上がる。このこと知ってるのは吉井姉弟と坂本親子、木下姉妹にムツツリーニ。それと瑞希、美波くらいだし。あ、鉄人と学園長も知ってたっけ。まあ何にせよ、始めて見たら驚くだろう。

「ま、そこまで便利じゃないけどね。効果は微妙だし」

「いや、それでも頼りにしてる」

本当は召喚フィールドの中じゃ使えないから頼りにしようが無いんだけど。まあ土気も上がってるし、ここでそれをいうのも野暮かな。

「当然俺も全力を尽くす」

『坂本って、小学生の頃は神童とか呼ばれてなかったか?』

『それじゃあ、実力はAクラスレベルが三人もいるって事か!』

そう。クラスの土気は確実に上がってきてる。だけど、この流れだと明久の名前が出ないよね。あいつだって頼りになるのに。

「それに、吉井明久だっている」

・・・シン

出てきた!? ちょっと、わざわざオチ扱いで名前出さなくっても! せっかく上がった土気が下がってるし!!

「ちょっと雄二！どうしてそこで僕の名前を呼ぶのさ！まったくそんな必要は無いよね！」

『誰だよ、吉井明久って』

『聞いたこと無いぞ』

「ホラ！僕は普通の人間なんだから　　って、僕を睨むな！士気が下がったのは僕のせいじゃないでしょう！」

さすがに見てられなくなり、私は溜息を一つつくと、

「知らないなら教えてあげる。明久は『観察処分者』だから」

言っただけだ。

『・・・それってバカの代名詞じゃなかったっけ』

「ち、違っよっ！ちょっとお茶目な十六歳につけられる愛称で、」

「そっだ。バカの代名詞だ」

「肯定するな、バカ雄二！」

「まあいてもいなくても変わらないような雑魚だ。ハンデには丁度いい」

「自分から振っておいてその台詞は無いよね!？」

まあ客観的に見ればそう。『観察処分者』は疲れや痛みのフィードバックがあるからおいそれと召喚できないし。

一応利点もあるにはあるけど、それも決定的なものじゃない。確かに普段は戦力にはならないでしょうね。

「とにかくだ。俺達の力の証明として、まずはDクラスを征服したいと思う。皆、この境遇は大いに不満だろう？」

『当然だ!』

「ならば全員筆を執れ！出陣の準備だ！」

『おおーっ!!』

「俺達に必要なのは卓袱台ではない！Aクラスのシステムデスクだ！」

『うおおーっ!!』

「お、おー・・・」

雰囲気には圧され、瑞希が小さく拳を振り上げる。可愛いなあもう。思わず抱きしめたくなる。いや、重ね重ね言うけど別に百合じゃないよ？

「明久にはDクラスへの宣戦布告の使者になってもらう。無事大役を果たせ！」

と、明久にありがたいお言葉が下る。まあ、犠牲になる人は少ないほうがいいよね。

「・・・下位勢力の宣戦布告の使者ってたいてい酷い目にあうよね？」

「大丈夫よ明久。戦争って言っても学生なんだから危害は加えないって。騙されたと思っていつてみなさい」

「本当に？」

「本当よ。幼馴染を信じなさい」

断言する私。嘘だけど。明久は信じやすいからこれで大丈夫だろう。

「わかったよ。それなら使者は僕がやるよ」

「ああ、頼んだぞ」

雄二の声とクラスからの拍手に見送られ、明久は胸を張って歩い

ていった。アホね。

「騙されたあつ！」

しばらくすると、明久が教室に転がり込んできた。意外に早かったわね。

「やはりそうきたか」

「やはりって何だよ！使者への暴行は予想通りだったんじゃないか！」

「当然ね。それくらい予想できないであんたの幼馴染が務まる訳無いでしょ」

「貴様もかエリス！少しは悪びれるよ！」

まったく仕方ないんだから明久は。そんなんだから彼女ができないのよ。

「吉井君、大丈夫ですか？」

「大丈夫、吉井？」

制服までぼろぼろな明久に、瑞希と美波が駆け寄る。健気で可愛いなあ。

「あ、うん。平気だよ。心配してくれてありがとう」

「そう、良かった・・・ウチが殴る余地はまだ有るんだ・・・」

「ああっ！もう駄目！死にそう！」

さすが美波。だけど明久にその手の照れ隠しは通じないからもうちよっと素直になりなさい。割と本気にしてるわ、この男。

「そんなことはどうでもいいわ。雄二がミーティングがあるって屋上に行ったから、さっさと行くわよ」

そういつて、私は屋上に歩いて行った。

#### SIDE 明久

雲一つ無い屋上で、僕たちは各々腰を下ろした。

「明久、開戦予定は午後だな？」

「うん。だから先にお昼ご飯だね」

「そうねー。明久。今日くらいはまともなご飯を食べなさいよ」

「そう思っなら弁当でも作ってきてくれると嬉しいな」

僕は気持ち以外にもありがたくいただくのに。

「あれ、明久君ってお昼食べない人なんですか？」

「いや、一応食べてるよ」

「・・・あれは食べてるといえるのかしら？」

エリスの横槍が入る。失礼な。ちゃんと食べてるさ。

「水と塩だろ？お前の主食って」

「ちゃんと砂糖も食べてるさ！」

本当に失礼だな、二人とも。そんな哀れむ様な目で見ないでよ。

「あの、吉井君。水と塩と砂糖って、食べるとは言いませんよ・・・」

「舐める、が表現としては正解じゃろうな」

皆の目が優しいのが逆につらい。

「まあ仕送りを全部遊びに使うのが悪いわね」

「し、仕送りが少ないんだよ！」

「私より多いくせに何言ってるの」

そう。エリスは僕より仕送りの額が少ないのにしっかりと遣り繰りしてる。それでいて趣味のラノベやゲームも増えていくからびっくりだ。

「・・・あの、良かったら私がお弁当作ってきましょうか？」

『えっ?』

僕とエリスから声上がる。というかなんでエリスまで?その額をびっしりと埋め尽くす冷や汗は僕の見間違いかい?

「本当にいいの?僕、水と塩と砂糖以外のものを食べるなんて久しぶりだよ!」

「はい、明日の昼でよければ」

「よ、よよ良かったじゃない明久。て、手作り弁当ヨ?」

「うん!」

ここは素直に喜ぼう。エリスの声が震えてるのも頬を一筋の汗が

流れてるのもきつと気のせいだろう。

「・・・ふーん。瑞希ってずいぶん優しいんだね。吉井だけに作ってくるなんて」

「あ、いえ！その、皆さんにも・・・」

「」

「俺達にも？いいのか？」

「はい、嫌じゃなかったら」

おお、雄二にも作ってあげるなんて。いい子だなあ。エリスが真っ白になって硬直してるのが気になるけど。

「それは楽しみじやのう」

「・・・（じくじく）」

「・・・お手並み拝見ね」

これで姫路さんの分を含めると七人分。作るのが大変そうだ。エリスが必死に首を横に振ってるのはきつと虫でもいたんだろう。本当に楽しみだなあ。

「やばい、どうしよう・・・！」

エリスがそんなことを呟いてたけど、いったい何のことだろう？

**第二話 戦争とは略奪だ 具体的には設備を寄越せ(後書き)**

どうでしょうか。エリスの口調が安定しません。  
感想、評価などあればお願いします。

**第三話 仕事があるのも面倒だが、仕事が無いのも暇なもの(前書き)**

バカテストアニメ、非常に楽しみですねー。という訳で第三話、始まりまーす。

### 第三話 仕事があるのも面倒だが、仕事が無いのも暇なもの

問 下の文章の（ ）に正しい言葉を入れなさい。

「光りは波であって、（ ）である」

姫路瑞希の答え

『粒子』

教師のコメント

よくできました。

土屋康太の答え

『寄せては返すの』

教師のコメント

君の解答はいつも先生の度肝を抜きます。

神代エリスの答え

『指向性を持った斬撃』

吉井明久の答え

『勇者の武器』

教師のコメント

先生もファンタジーは好きです。

「ふあゝあ」

欠伸を一つする。今はDクラスとの『試召戦争』中。他の生徒は怒号を上げて血沸き肉踊るといった風体で『戦争』してるのだが・

「暇ね。私も前線に出る訳にはいかないの？」

そう。私はすぐぶる暇なのだ。今は雄二の近衛部隊として教室でゴロゴロしている。前線に出たいんだけどなあ。私の召喚獣の武器の特性上、なるべく経験を積んでおきたいんだけど。

「まあそういうな。お前と姫路はギリギリまで温存する。この作戦の肝はギリギリまで姫路を隠しておくことだし、お前は恐らくBクラス戦で重要なポジションになるからな。どっちにしる今回の戦争でお前は前線に出さん」

「えー。ひーまーなーのーよう。ねえ、瑞希もそう思わない？」

「わ、私は別にそんな事は・・・」

あまりにも暇なので瑞希に絡んでみる。ああもう本当可愛い。いやだから、しつこいようだけど別に百合とかでは決して無いからね？

「こら、姫路に絡むな。そんなに暇なら召喚フィールドの合間を縫って前線でも見に行けばいいだろう。お前、確か消えられなかったか？」

「んー」スケルトンボディ『身体透過』の事？あれ、息止めてる間しか効果ないのよねー。パーフェクトフラン。まったく、神の不在証明もびっくりの低性能よ」

まったく、同じ発動条件なのにあつちは完全な認識不能、こつちは単に『見えにくくなる』だけってどういうこと？詐欺よ詐欺。

「あーあ、何か面白いこと無いかしら」

そう言つて、再び一つ欠伸をした。

「坂本ー！吉井隊長から伝令だ！」

もう眠ろつかと机に突つ伏したとき、そんなことを言いながら須川がやってきた。

「おう、須川か。それで明久は何だつて？」

「ああ。なんでも教師を偽情報でおびき寄せてほしいそつだ。あつちが数学の木内を呼んでたから、数学教師がいいと思つ」

「ふむ、そつだな・・・じゃあ船越教諭あたりだな。内容はどうする？」

「そつだな。普通に緊急で職員会議があるとかで良いんじゃないか？」

「うーん、イマイチだな・・・」

・・・む、今の会話は聞き捨てならない。いくらなんでも船越さんをそんな用件で呼び出すのは失礼よね。私は机に突つ伏したまま首だけをそちらに向け、口を開いた。

「駄目よ須川。呼び出すなら『明久が体育館裏で待ってる』くらい

言わないと。『教師と生徒の垣根を越えた話がある』とか添えておけばなおグッドね」

「ナイスだ神代。それでいく」

そういい残して須川は駆け足で教室を去っていった。うん、やっぱり先生にも春が必要よね。明久なら何とか誤魔化せるでしょう。多分。

「・・・神代。お前、基本的に明久に容赦ないよな」

「そんなこと無いわよ？私の本気を出したら明久を社会的に抹消できるもの」

「それはさすがに・・・」

瑞希まで話に参加してきた。えー、十分遠慮してるんだけどなあ。

ピンポンパンポーン『連絡致します』

「お、始まったわね」

「明久・・・お前のことは忘れない」

『船越先生、船越先生』

須川の声で校内放送が響く。

『吉井明久君が体育館裏で待ってます』

「ご臨終、だな」

『教師と生徒の垣根を越えた、男と女の大事な話があるそうです』

「・・・ちよつと酷くなってるわね」

「吉井君、頑張つて下さい・・・」

「さて、そろそろ行くかな」

この場にいる全員で明久に黙禱を捧げ、私たちは出陣した。

「明久、あと少し持ちこたえろ！」

そんな檄が飛び、遠くにいる明久の目に活気が戻る。ちなみに私は、いかにも下校してますという雰囲気を出しながら、スケルトンボデー身体透過でちよくちよく召喚フィールドに触れないように戦場に近づいていた。

「ああっ！霧島さんのスカートが捲かれてるっ！」

いきなり明久の声が響き、雄二と瑞希、私以外は男女問わず全員がそつちを向く。どうせ作戦なんだろうけど、何か釈然としないわ。そして数回の叫び声があがり、消火器が噴射されたりスプリンクラーが誤作動したりとした後の廊下には、なぜか美波に対する殺気があふれてた。明久・・・あんた何したのよ・・・

そんなてんやわんやがあった後、Dクラスは撤退していた。

「明久、よくやった」

適当に時間をつぶして教室に戻ると、雄二がそんなことを言っていた。原因は勿論、さっきの放送によってこれから起こるであろう明久の不幸を想像した事だろう。

「校内放送、聞こえてた？」

「ああ。バッチリな」

「・・・雄二、須川君がどこにいるのか知らない？」

明久がものすごくイイ笑顔で尋ねる。アレは何かやると決意した漢オトコの目だ。

「もうすぐ戻ってくるんじゃないか？」

その声に、明久がナニカを懐に構える。大方どっかから包丁でもパクってきたんだろう。靴下も片方はいてないし、即席ブラックジャックも作ったかな？

「やれる、僕なら殺やれる・・・！」

「殺りなさんなって」

「ああ、僕の包丁っ！」

さすがに危ないので、包丁だけでもサイコキネシス念動能力で窓の外にすっ飛ばす。B Jは多分重量制限オーバーね。

「ちなみに、だけど」

「さすがにブラックジャックだけじゃキツイか・・・？いや、この際ムツツリーニスタンガンを借りて・・・」

「あの放送を指示したのは私よ」

「シヤアアアツ！」

言った途端、明久が私の右足を踏んで体制を崩しつつブラックジヤックを振り下ろしてきた。だが・・・

「あ、船越先生」

今の私にはこの魔法の一言がある。別に空間転移テレポートで逃げても良かったんだけど、こっちの方が楽しそうだし。案の定、明久は卓袱台を蹴散らして掃除用具入れに飛び込んだ。ものすごいパワーね。

「さて、馬鹿は放って置いてそろそろ決着をつけましょう。そろそろ暇死にしそうだわ」

「そうじゃな。ちらほらと下校している生徒も見え始めたし、頃合じやろう」

「……………（コクコク）」

「そうだな。っしや！Dクラス代表の首級を獲りに行くぞ！」

『おっつ！！』

そういつてぞろぞろと生徒が出て行くなか、まだ出てこない明久に声をかける。

「あ、そうそう明久。船越先生がきたっていうの、アレ嘘だから」

そう行って教室の隅で身体透過スケルトンボディを発動。明久が行くまで位なら持つでしょう。しばらくして、ガタンツという音と共に明久が出てきた。

「逃がすか、エリスウツ！」

そう叫びながら、明久が廊下を駆け抜けた。  
さてつ、雄二は私を温存したいそうだし、大人しく教室で待つて  
ましようか。

Dクラス代表 平賀源氏 討死

程なくして、そんな知らせと共にFクラスの皆が帰ってきた。そ  
こで雄二に、今回の戦争の顛末を聞く。

「ふーん。それで、結局Dクラスの設備は奪わなかったの？なんと  
もまあ、回りくどいというか・・・」

「まあそういうな。ここで満足されても困るからな。こうするしか  
あるまい」

雄二によれば、DクラスはBクラスの室外機の破壊と引き換えに  
解放したらしい。温度と湿度の上昇が目的とすれば・・・

「Bクラス戦の切り札は保健体育フエッシャーの特性を生かしてムツツリーニ、  
か。で、私は何をするのかしら。いい加減待遇の改善を要求するわ」  
「ああ。お前には姫路と共にムツツリーニが根本にたどり着くため  
の道を切り開いてもらう。さらに欲を言えばBクラスの虚をついて  
もらいたい。今、こっちの保有してるあっちに知られてない切り札カード  
はお前だけだからな」

「む、それもそうね。あわよくば近衛部隊の裏をかいて感付かれ無  
い様に根本に近づき、止めを刺すのもアリ・・・かな」

そう考えると結構おいしい役回りかな？多分乱戦の中召喚フィードを避けて身体透過スケルトンボデーを使うのは難しいけど、『奥の手』なら確実に不意を突けるし。でもなー……

「……や、そっちはパス。生憎、不意打ちみたいなのは好きじゃないのよねー。やるなら近衛部隊を蹴散らしてからやるわ」

「ああ。お前ならそう言うと思ってた。それよりも、そろそろ明久も戻ってくるぞ？」

「そういえばそうね。もう魔法まほうの一言も効果ないだろうし。うーん、『拘束能力』でも使おうかしら。でもあれ直接触れないといけないのよね……っと、噂をすれば、ね」

ちようど話に出ていた明久がすごい勢いでこっちに走ってきてる。あ、目が合った。速度が上がったわね。別に逃げないのに。

「やあエリス。こんなところに居たんだね。探したよ？」

「あらごめんなさい。それで、愛の言葉でも囁いてくれるの？」

「うん、そんなところかな」

明久が動き始めるのと同時にその額に人差し指をトン、と当てて『バインドスベル拘束能力』を発動させた。途端に明久の体がビクリと硬直し、その手に握りこまれたスタンガンを取り落とした。これは……ムツツリーニのヤツね。服の上からでも感電する特別製。ふむ、殺る気だったな。

ちなみに拘束能力バインドスベルの効果は五秒ほどなのですぐさま後ろに回り肩関節を極める。

「それで、これは何の真似かしら」

「エリス、皆で何かをやり遂げるって、素晴らしいね」

「そうね。私は何もしてないけど」

「ぐうつ、いや、でもエリスだってFクラスの仲間に違いは違いな関節が折れるように痛いっ！」

「それで、今何しようとしたのかしら」

「そ、それは勿論エリスと喜びを分かち合おうと肩が砕けるほどに痛いっ！」

「そう。誰か錠持ってきてくれるー？」

「す、ストップ！僕が悪かった！」

「最初からそういいなさい」

「まったく、こういうときだけ無駄な行動力を発揮するんだから。さて、今度こういう事した時の罰でも考えましょうか。うーん、そうだなあ……」

「……薬指……」

何か明久の顔が青ざめてるけど、ほっといて先に考えましょうか。

#### S I D E 明久

「それにしてもさ」

「ん？」

「Dクラスとの勝負って本当に必要だったの？別にエアコンくらいなら他の方法でも壊せたと思うけど」

「ああ、そのことか」

「って言うか明久、まだそんな事も解ってないの？」

帰り道。僕とエリスは隣だから良いとして、雄二も方向が同じだからこうやってよく一緒に帰ってる。

「む。そんな事言うからには、エリスは解ってるんだよね？」

「当然でしょ。はあ、この調子だとこいつ、室外機を壊す意味も解ってないわね」

「し、失礼な。ちゃんと解ってるさ！」

「じゃあ何で？」

「・・・嫌がらせ？」

「違う。若干無い訳でもないんだけど・・・ああもう、そこ等辺は明日。それよりもDクラスね。目的は大きく分けて三つよ。

一つ目、勝って自身をつけ、加えて士気も上げる事。

二つ目、下位クラスが上位クラスを妥当することで、他クラスにプレッシャーを与える。

三つ目、試召戦争　ひいては召喚獣の扱いに慣れさせ、次戦への糧にする。こんな所ね」

「へー。じゃ、設備の件は？」

「Dクラスの設備を奪わなかったのは、満足することを防ぐためだな。あくまで目標はAクラス。Dクラス設備如きで満足されたら困る。」

「ふーん。いろいろ考えてるんだね」

こうして話していると、とても馬鹿とは思えない。神童再び、つて感じた。その答えに、雄二が遠くを見る。

「当然だろう。俺は、その為にこの学校に来たといっても過言ではない」

「・・・翔子ちゃんのこと？全く。そのために翔子ちゃんを倒すんじゃ本末転倒だと思うんだけど」

「・・・知ってたのか？」

「そりゃまあ、ね。『神童』が起こした暴力沙汰、新聞の片隅に出てて興味があったから。詳しいことは解らないけど、大まかなこと

は調べたわ。」

わずかに驚いた雄二を尻目に、エリスが目を細めて語る。エリスが何を言ってるのかはわからないけど、それはきつと今の雄二の根幹なんだろう。勉強ができなくてもトップに立てることを証明するためにAクラス受当を目指す、その理由がきつとそこにある。

「ま、そんなわけだから、明久にもがんばってもらうぞ。具体的には明日のテストで」

「ぐう、一応教科書くらい見て・・・アレ？教科書忘れた!？」

「・・・あほ。さつさと取ってこ。」

「うう・・・んじゃ、先に帰っていいよ」

「もちろんだ。待ってるわけが無いだろう」

「わかっていたけど、薄情者」

せつかく家まであと少しまでなのに・・・まあ愚痴っても仕方ないか。

「私も先に帰ってるわ。今日くらいご飯作ってあげるから、早く帰ってきなさい」

「なんかもうお前ら熟年の夫婦みたいだな。勿論明久が主夫」

「ははっ、そうかもね。じゃね、明久」

「んー」

そう言って、僕はエリスたちと別れた。

## SIDE OUT

その後しばらくして帰ってきた明久は、どこと無くしょんぼりしている様だった。さて、何かあったのかしらね？

『サイコムトリー  
精神透過』

・・・は？不幸・・・好き・・・雄二・・・クロス・

・・・え、明久ってヤンデレ？しかも相手雄二？・・・まさか。いくらなんでもそれは無いわよね、多分。・・・本当に、無いわよね？

**第三話 仕事があるのも面倒だが、仕事が無いのも暇なもの(後書き)**

どうでしたでしょうか。

感想や評価などありましたらお願いします。

第四話 汎用対人究極殺戮兵器『お弁当』（前書き）

第四話。主人公は超能力を使っていると反動のような物があります。

#### 第四話 汎用対人究極殺戮兵器『お弁当』

問 以下の問いに答えなさい

『第二次性長期で男性は体格が変わり（ ）になる』

姫路瑞希の答え

『がっしりとした体格』

教師のコメント

正解です。

吉井明久の答え

『すごい事』

教師のコメント

何がどうなるんですか。

神代エリスの答え

『背中で生涯を語るよう』

教師のコメント

磨耗しきってるじゃないですか。

土屋康太の答え

『貴様には失望した』

教師のコメント

いくら女性関係で無いからといって、教師にその言い草は無いと思います。

SIDE 明久

翌朝。エリスは用事があるとかで先に学校に行ってしまったので、一人で教室に向かう。

「おはよー」

「おう明久。時間ギリギリだな」

「ん、おはよう雄二」

雄二に軽く挨拶をした後、エリスを探す。さすがにもう教室にいると思うんだけどなあ。

「雄二、エリスがどこにいるか知らない？」

「神代か？だったらホラ、そこで寝てる」

雄二の指差したほうに目を向けると、確かにエリスは壁にもたれて寝ていた。テスト直前に寝てるなんて余裕だなあ。体が小刻みに震えてるのは、きっと設備が酷いせいで振動が伝わってるからだろう。白目を剥いて泡を吹いてるのは・・・気のせいだね。

「エリス？おーいエリスー？」

「待て爺さん、いくらなんでもいきなり元の世界に戻すとか言われなくても心の準備が・・・ハッ!？」

「・・・大丈夫？何かぶつぶつ言ってたけど」  
「だ、大丈夫よ」

そう言ってエリスは自分の席に戻り、またぶつぶつ言い出した。  
なんだろう？

「さすが瑞希、味見しただけで三十分以上も気絶するなんて・・・  
どうやってらミートボールであんな・・・」

本当に何のことだろう。

「ところで明久。良いのか？」

「うん、いくらなんでも薬指を持っていかれるのはちょっとね」

「いや神代の始末ではなく」

じゃあ何だろう？雄二の言いたいことがわからない。

「いったい何が」

「吉井っ！」

「いぶあっ！」

僕の台詞は突然の裏拳で遮られた。

「し、島田さん、おはよう・・・」

「おはようじゃないわよっ！」

ずいぶんと怒ってらっしやる島田さん。いったい僕が何をしたっていうんだ。

「あんだ、昨日はウチを見捨てただけじゃ飽き足らず、消火器のい

たずらと窓を割った件の犯人に仕立て上げたわね……！」

あ。そういえばしてたなあ。

「まあ本来なら掴みかかっているんだけど、もう十分罰が下っているよ  
うだし許してあげるわ」

掴みかかる前に殴っているから十分だと思っけど……それよりも、  
罰？

「一問目、数学のテストなんだけどね。監督の先生、船越先生だっ  
て」

聞いた瞬間、僕は扉を開けて廊下を疾駆した。

S D E A U T

「うあー……づがれだー」

明久が机に突っ伏す。船越先生と一悶着あったからねー。ちなみに私は戦闘に参加してないのだが、振り分け試験の点数はゴミなので全教科受けておいた。

「うむ。疲れたのう」

「……………（コクコク）」

いつの間にか秀吉とムッツリーニも集まってきた。よし、  
今だっ！

「そ、それじゃあ学食でも行きましょつか！今日は私も学食だし！」

若干声が裏返ってるのは気にしない。

「あれ、エリスたちは学食？だったら一緒にいいかしら」

「ん、島田か。別に構わないんじゃないか？」

「それじゃ、混ぜてもらおうわね」

「……………（コクコク）」

よしっ、学食ムードっ！このまま押し切

「あ、あの。みなさん……………」

「」

「うん？あ、姫路さん。一緒に学食に行く？」

「あ、いえ。え、えっと……………お、お昼なんですけど、その、昨日の約束の……………」

「おお。もしか弁当かの？」

「は、はいっ。迷惑じゃなかったらどうぞっ！」

「」

「迷惑なもんか！ね、雄二！」

「ああ、そうだな。ありがたい」

「そうですか？良かったあ〜」

「む……………っ。瑞希って、意外と積極的なのね……………」

「それでは、せっかくのご馳走じゃし、こんな教室ではなくて屋上でも行くかのう」

「そうだね」

「」

SIDE 明久

ところ変わって屋上。雄二と島田さんは飲み物を買いに行った。この場にいるのは、僕とムツツリー二、秀吉、姫路さん、そして何か悟ったような顔をしてるエリスだけだ。いったいエリスに何があったのか気になるところだけど、今は気にしないでおこつ。

「あの、あんまり自信は無いんですけど・・・」  
『おおっ』

そう言っつて姫路さんが開けた重箱には、美味しそうなおかずが詰まっていた。定番のメニューがぎっしり詰まってる。

「じゃあ、雄二には悪いけど先に」  
「・・・・・・(ヒョイ)」  
「あつ、ずるいぞムツツリー二つ」  
「・・・・・・(グッ)」  
「あ、お口に会いましたか？良かったですっ」

ムツツリー二が素早く卵焼きを引つつかんで口に運び、黙って姫路さんに親指を立てた。多分『すごく美味しいぞ』と伝えたいんだろう。それが伝わったのか、姫路さんが喜ぶ。傍らではエリスが冷や汗を流しながら安堵のため息をついていた。いったい何なんだろう。

「それじゃ、僕達も」  
「あつ、すいませんっ。お箸とスプーンを教室に忘れちゃいました」

っ

「あ、そう？それなら僕たちは待ってるね。さすがに作った本人を置いて食べるのは悪いし」

「す、すいませんっ。すぐ取ってきますっ。」

そう言っつて、姫路さんは小走りで屋上を後にした。それをエリスは無言で確認し、エビフライを手に取り、

「……………ムツツリーニ、口を開きなさい」

「……………？（パカ）」

「……………（ヒョイ）」

ムツツリーニの口に放り込んだ途端、

バタン

ガタガタガタガタ

ムツツリーニは豪快に顔から倒れ、小刻みに震えだした。

「……………」

「……………」

僕と秀吉は一筋の汗を流し、顔を見合わせる。

と、エリスがぼつぼつと語りだした。

「……………昔、ね。瑞希に料理を教えてあげようとしたのよ」

「……………」

「そのときは簡単に卵焼きを作っただけどね？あの子、何か隠し味を入れたいって言うの」

「……………」

「それだけなら初心者にありがちな間違いで済むんだけど。あの子、酸味が欲しいって理由で何を入れようとしたと思う?」

「……………」

「その日受けた理科の授業がいけなかったんでしょね……酸性の液体は酸っぱいって習ったから……」

「……………」

「……………」どこから持ってきたのか、十%の硫酸をぶち込もうとしたのよ。」

場の空気が凍りついた。

「そのときは全力で止めさせたけどね……今現在、あの子が作る料理で人体に影響がないのは、恐らく塩おにぎりと卵焼きだけよ」

そついいながらエリスが立ち上がる。その姿は、まるで全てを悟った英雄のようで。

「さて、決めましょうか……。誰が『このお弁当おしほを食べる』のかを……………」

そんなエリスの言葉をきっかけに、僕らが弁当逆争奪戦殺し合いを始めようとしたとき、

「おう、待たせたな!へー、こりゃ旨そうじゃないか。どれどれ」

「すみません、おまたせしましたっ」

そんな声と共に我らが雄二メシヤと姫路さんがやってきた。とつさに僕はアイコンタクト。

( )(雄二を生贄に惨劇を回避する！)( )

「瑞希、ちょっとこっち来て！大切な話があるから！」

「は、はわっ？」

「島田さん！そこ、さつき虫の死骸があつたから手を洗ってきたほうが良いよ！」

「ええっ！？うつつ、ちょっと行って来るわ」

「雄二！口をあけるのじゃ！」

「ん？ああ、どうしたんだ？(パカ)」

『そおおいっ！！』

「もがああっ！」

これが僕らのコンビプレー。女子達に配慮し、かつ被害を最小限に留める完璧な作戦だ。雄二は目を白黒させているので、顎を掴んで咀嚼するのを手伝ってあげる。結果。

ゴクン

バタン

ガシャガシャン、ガタガタガ

タガタ

ジュースの缶をぶちまけて倒れた。

倒れたまま僕のほうをじっと見て、雄二が目で訴えかける。

『毒を盛ったな』と。

『毒じゃないよ。姫路さんの実力だよ』

僕も目で返事をする。

(・・・終わったわね?)

(うん。僕らの平和は保たれた)

戻ってきたエリスとアイコンタクトを交わす。僕らの気分は青空のように晴れやかだ。生きてるって、素晴らしいね。

「あれ？もう全部食べちゃったんですか？」

「ええ、そう見たいね。特に雄二がすごい勢いで」

「そうですかー、嬉しいですっ・・・あれ、何で倒れてるんですか？」

「あ、足が・・・攣つかってな・・・」

姫路さんを傷つけないように虚ろな目で嘘をつく雄二。確かに優しいかもしれない。

## SIDE OUT

昼下がり。あの昼食さんげきを終えた私たちは、のどかにお茶をしていた。特に雄二にはお茶を大量に飲ませる。お茶って殺菌作用があるらしいからね。

ちなみにデザートの方は私が必死に処理した。勿論捨てたりせず、眼球が破裂するほど必死で物質解析アナリシスで材料を読み取り、気力を振り絞った全力の念動能力サイコキネシスで毒素だけを取り除いた後、一纏めにして空間転移レポートで地中に埋めた。ちゃんと無害になったヨーグルトを食べました。ものすごく疲れたけど。体の節々が痛いし。

「そういえば坂本、次の目標はBクラスなの？」

「ああ、そうだが」

そんな美波の疑問に事も無げに答える雄二。そりゃ壊したのはBクラスの室外機だ。次にAクラス戦をやるなんて思わないだろう。

「どうしてよ？ウチらの目標はAクラスでしょ？」

「ああ。その事なんだが」

神妙な顔で言う。

「無理だ。F<sup>ウチ</sup>クラスの戦力じゃどんな奇策妙策を練ろうが、Aクラスには勝てやしない」

「まあ当然よね。自力の差が違う。向こうは点数に裏打ちされた圧倒的な火力があるのに対して、こっちの強みは設備の酷さから来るモチベーションと雄二の立てた作戦のみ。その作戦も霧島翔子には通じないでしょうし、クラス単位で勝つのはまず無理よ」

そう、これは厳然たる事実。翔子ちゃん相手に雄二の立てた作戦は通用しない。これは学力云々の話ではなく、雄二は何があっても霧島証拠という人物に勝てないの。私に明久が絶対勝てないのと一緒ね。

「じゃあ、ウチらの最終目標はBクラスに変更って事？」

「いいや、そんな事は無い。Aクラスをやる」

「雄二、さっきと言ってることが違うじゃないか」

美波の台詞を引き継いで明久が言う。バカは黙ってなさい。

「クラス単位では勝てないといったただけだ。だから一騎打ちに持ち込む」

「へ？どうやって？」

「はあ、何のためにBクラスと戦うと思ってるの。いい？試召戦争

で上位クラスに負けた場合、設備がワンランク下がる。なら私たちがFクラスに負けた場合は？」

「悔しい」

「ムッツリーニ、鈍」

「我々Fクラスの設備と入れ替わります、はい」

今瑞希が慌てて耳打ちしたわね。まあいい。

「雄二」

「ああ。で、設備をそのままにする代わりにAクラスに攻め込ませる。さつきも言ったように俺達の最大の強みはモチベーションだ。同じ連戦ならこっちに分があるから、そこについて一騎打ちに持ち込む」

作戦の概要はそんな感じだ。問題があるとすれば一騎打ちで勝てるかどうかね。翔子ちゃん、私も『切り札』を使わないと勝てないだろうなあ・・・あれ、人前で使いたくないし。

「で、明久」

「ん？」

「今日テストが終わったら、Bクラスに宣戦布告して来い」

「断る。雄二か、もしくはエリスが行けば良いじゃないか」

むう、さすがに警戒するか。仕方が無い。

「それならジャンケンで決めましょう。明久は一回やってるからシードで良いわ。心理戦ありで、負けたほうが行く。良いわね？」

「OK。乗った」

さすが明久ね。シードのほうが不利だって気がついてない。

「じゃあまずは雄二と私ね。グーを出す、と言っておきましょつか」  
「ふむ。ならば俺もグーを出そう」

建前上一応言っておく。どうせ狙いは明久だからなんでも良いのよねー。

「はいじゃーんけーん」

「ほいっと」

私はグー、雄二はパー。とりあえず私の負けだ。

「よし、次は明久ね」

「わかった。それなら、僕はグーを出すよ」

「そう。それなら私は」

そこで私はニイツ、と口の端を持ち上げ、

「あんたがグー以外を出したらその右腕を貰うわ。ムッツリーニ、  
鈍用意しといて」

「ちよっ……！何その心理戦!?!」

明久が何か言ってるが無視。勝負は非情なのよ。

「行くわよ、ジャンケン！」

「わああっ!」

パー（私）      グー（明久）

「決まりね。行ってらっしやい」

「絶対に嫌だ！」

「大丈夫だ明久。今度は殴られたりはしない」

「何を根拠に！」

「Bクラスは美少年好きが多いらしい」

「そっか。それなら確かに大丈夫だねっ」

本当乗せられやすいわね。アホの鏡だわ。もう一押しするために、溜め息混じりに呟く。

「でも、明久ブサイクだしね・・・」

「失礼な！365度どこから見ても美少年じゃないか！」

「5度多いぞ」

「実質5度じゃな」

「まあ5度くらいなら」

「三人なんて嫌いだっ」

そんなことを言い残して、明久は駆けて行った。

**第四話 汎用対人究極殺戮兵器『お弁当』（後書き）**

如何でしたでしょうか。

感想、評価などありましたらお願いします。

第五話 個人の才能の違いが戦力の決定的差ではない、らしい(前書き)

第五話、主人公は問題児で通ってます。

第五話 個人の才能の違いが戦力の決定的差ではない、らしい

問 次の問いに答えなさい。

『ベンゼンの化学式を答えなさい』

姫路瑞希の答え

『C6H6』

教師のコメント

簡単でしたかね。

土屋康太の答え

『ベン+ゼン=ベンゼン』

教師のコメント

君は科学を舐めていませんか。

吉井明久の答え

『B・E・N・Z・E・N』

教師のコメント

後で土屋君と一緒に職員室に来るように。

神代エリスの答え

『発癌性物質』  
ベンゼン

教師

それは化学式ではありません。職員室一名追加です。

S I D E 明久

「・・・言い訳を聞こうか」  
「予想通りだ」

千切れかけた袖を抑えて詰め寄った僕を迎えたのは、そんな雄二の冷めた対応だった。

「くきいー！殺す！殺しきるーっ！」  
「落ち着きなさい」  
「ぐふあっ！」

さ、サイコキネシス念動能力で鳩尾に消しゴムを打ち込むなんて・・・

「俺は先に帰ってるからな」  
「ほら、さっさと帰るわよ？明日も午前中はテストなんだから、あんまり寝てないの」

爽やかに言う二人。外道め。

「むっ、回復には時間がかかるかしらね。向こうで瑞希と話してるから、歩けるようになったら校門のところまで待ってなさい」  
「うっ・・・腹が・・・」

そう言って姫路さんの所へ歩いていくエリス。ふとそちらに目をやると、姫路さんは妙に拳動不審だった。何だろう。昨日の恋文を置く場所でも考えてるのかな？

そんな姫路さんと一言二言話し、だんだんと顔色が変わるエリス。時折こつちを見て何かを心配するような素振りをしてる。

ああ、もしかして僕は邪魔だったかな？そうだよ。ラブレターを置くところなんて異性に見られたくないだろうし。

「よい、しよっと・・・」

それ以上見ていたら悪い気がして、僕は匍匐前進で教室を後にした。

## SIDE OUT

「さて皆、今日はご苦労だった。午後はBクラス戦に突入する予定だが、殺る気は充分か？」

「おおーっ！」

私は受けてないけれど、今日は午前中テストをやってさっき昼食を食べたところだ。それなのに一向にモチベーションが下がらないのも凄い。

「今回の戦闘は敵を教室に押し込むことが重要になる。その為、開戦直後の渡り廊下戦は絶対に負けるわけにはいかない」

「おおーっ！」

「そこで、前衛部隊は姫路瑞希に指揮を取ってもらおう。野朗共、きつちり死んで来い！」

「が、頑張ります」

周りのテンションについていけないのか、若干引き気味で瑞希が前に出る。本当愛らしい。だから百合じゃないと何度も・・・もう良いや。

『うおおーっ！』

瑞希と一緒に闘えるとあって、前線部隊の指揮は最高に達しようとしていた。

今回は廊下での先頭を勝ちに行くらしく、クラスの五分の四の戦力を注ぎ込むらしい。そこにはFクラス最強の点数を持つ瑞希もいるので、廊下の戦闘はまず間違いなく取れるでしょうね。

ちなみに、私は教室待機だ。もう勘弁して欲しいのよねえ。暇すぎる。

キンコーンカーンコーン

昼休み終了のチャイムを皮切りに、Bクラス戦が始まった。クラスの皆が一斉に駆け出す中、私は雄二に異議を申し立てる。

「暇よ。何か暇つぶしを寄越しなさい」

「知らん。要はおまえがFクラスだって知られなければ良いんだから、適当に見てくれればいいだろう」

そしてありがたいお告げ。よし、ちょっと行ってきましょうか。

『はい皆、私のことは知らない振りをしててねー？絶対にFクラスだって気取られないようにー』

ちよつとしたズルを使つて先頭集団を追い越すとき、『意思疎通』テレパシーで一方的に告げる。相変わらず不便だがこういつときには便利だ。目は合わせない。これを見られても面倒だからね。

「さつてと、CクラスかAクラス辺りの振りでもしましょうか」

しばらく進んだ辺りで止まり、いかにも野次馬ですよつて感じで戦局を見守る。私の評判は知れ渡つてるので、授業をサボつてると思われても違和感はないだろう。

「あらまあ、点差おかしいでしょ、アレ」

思わず半眼になる。Bクラスの点数は甘く見積もつてもFクラスの二倍はあつた。これはあいつらでどうにかなる戦力差じゃないわね。と、そんな事を考えてるとき、

「お、遅れ、まし、た・・・ごめ、んな、さい・・・」

息を切らせて瑞希が到着。さすがにあの全力疾走についてこれなかつたんでしょう。Bクラスの人達はあらかじめ警戒しているみたい。

「長谷川先生、Bクラス岩下律子。姫路瑞希さんに数学勝負を申し込みます！」

「あ、長谷川先生。姫路瑞希です。よろしく願ひします」

「律子、私も手伝う！」

さつそく二人掛りで瑞希に勝負を挑むBクラス生徒。十人中二人をぶつけてくるか。それにしても数学、ねえ……

『サモン試獣召喚！』

死んだわね、あの二人。

『Fクラス 姫路瑞希 VS Bクラス 岩下律子&菊入真由美』

数学 412点 VS 189点 & 151点』

「きゃあああーっ！」

「り、律子！」

片方の召喚中が瑞希の召喚獣が放った『熱線』の炎に包まれた。あれは400点以上の生徒の召喚獣を持つ『腕輪』の能力だ。能力は各々違い、様々な能力がある。私の能力……は使ったことないからわからないけど、腕輪を装備した試獣を召喚するとその能力も解るらしい。

「い、ごめんなさい。これも勝負ですのっ」

体制を崩した召喚獣に肉薄し、その手に持って巨大な大剣によって相手の武具ごと切り裂いた。羨ましいなーあの剣。私の武器なんかよりよっぽど使いやすそう。

「っと、瑞希は下がるか。私は別のほう行きましようかね」

腕輪の能力は割と点数消費激しいらしいし、当然かもね。  
んー思ったより暇ねー、見てるだけって言うのも。何か面白い事  
起こらないかなー。

あつたわよ、面白いこと。前もこんな事なかったっけ。

「ち、近寄るなあ！近寄ったらこいつを補修室送りにするぞ！」

王道パターンね。捕まってるのは美波か・・・って美波！？何で  
捕まってるのよ！あんたなら捕まりそうになつたら相手の間接をバ  
ツキバキにする程度はやるわよね！？ちよつと・・・いや、かなり  
不思議だったので、アイコンタクトを飛ばす。

（ちよつと美波、どうしたのよ？何かあつたの？）

（あ、エリス！大変、吉井が瑞希のパンツを見て鼻血が止まなくな  
つたつて・・・！）

（・・・さいでっか）

やはり美波は美波だったわ。で、それに騙されてのこのこと捕ま  
つたと。ある意味流石ね。

「島田さん！」

「よ、吉井！」

と、明久到着。うん、ドラマみたいね。表面上は。

「そこで止まれ！それ以上近寄るなら、召喚獣に止めを・・・」

「総員突撃用意いーっ！」

「隊長それでいいのか!？」

一瞬で決断する。外道ね。

「ま、待て、吉井！コイツがどうして俺達に捕まったと思ってる？」

「馬鹿だから」

「殺すわよ」

そして即答する明久。まああながち間違ってないけども。

「コイツ、お前が怪我したって偽情報を流したら、部隊を離れて一人で保健室に向かったんだよ」

うん、間違っではないわね。『パンツ見て鼻血』が怪我に入るかは置いといて。

「島田さん・・・」

「な、なによ」

「怪我をした僕に止めを刺しに行くなんて、アンタは鬼か！」

「違うわよ!」

ある意味当然の反応ね。全く朴念仁め。アイツの忠告も覚えてないわね。はぁ・・・

「ウチがアンタの様子を見に行っちゃわるいっての!??これでも心配したんだからね!」

「島田さん。それ、本当？」

「そ、そうよ。悪い?」

突然だが、狼少年を知ってるだろうか。いつも嘘をついていた少年は、本当の危機に本当のことを言っても信じてもらえない。つまり、

「総員突撃いーっ！」

「どうしてよっ!？」

「こういうことだ。ドンマイっ美波！」

「あの島田さんは偽者だ！本物にそんな優しさがあるわけがない！本物は嬉々として僕を殺りにくるに決まってるじゃないか！」

普段の美波を見ると、正しい事のような気がしてくるから怖い。

「おい待てって！コイツ本当に本物の島田だつて！」

「黙れ！見破られた作戦にいつまでも固執するなんて見苦しいぞ！」

「だから本当に　！」

『 Bクラス	鈴木次郎	V S	Fクラス	田中明
英語 W	33点	V S	65点	』
『 Bクラス	吉田卓夫	V S	Fクラス	須川亮
英語 W	18点	V S	59点	』

そして瞬殺される二人。消耗してたみたいねえ。後は美波なんだけど・・・明久、まだ本物だつて解ってないっばい。

「皆、気をつける！変装を解いて襲い掛かってくるぞ！」

やっぱりか。期待を裏切らない男ね。勿論悪い方の意味で。

「よ、吉井、酷い・・・ウチ、本当に心配したのに・・・」

「まだ白々しい演技を続けるか！この大根役者め！」

「本当だよ！本当に心配したんだから！」

ああ、美波が若干涙目に・・・もう見てらんないわね。

「と、言うわけで毎度お馴染みエリスさんですよー」

「ん、エリス。ちょうど良かった。今からこの島田さんの名を語った偽者を倒すから協力してもらえるかい？」

「なにいつてんの。私はCクラス（という名目）なんだからそんな事する訳ないでしょ」

はまだ気付いて無い明久。何でこんなのが好きなんだろう、美波は。

「そんな明久に朗報。美波は『あんたが瑞希のパンツ見て鼻血が止まらなくなつた』と聞いて心配したらしいわ」

「包囲中止！コレ本物の島田さんだ！」

流石に解つたらしく、周りに命令を飛ばす明久。うん、美波の周りに見える黒いオーラはきつと気のせいね。

「島田さん、大丈夫だった？」

美波に手を差し伸べる明久。もう手遅れでしょうね、色々な意味で。

「・・・・・・・・」

「無事で良かったよ。心配したんだからね」

「……………」

「教室に戻って休憩すると良いよ。疲れてるでしょ？」

「……………」

「それにしても、卑怯な連中だね。人として恥ずかしくないのかな？」

「……………」

何の言葉も返さない美波。正直めっちゃ怖い。

「あー、島田さん。実はね」

「……………何よ」

ようやくリアクションを返す美波。それに明久は素敵な笑顔を浮かべ、致命的な言葉を口にした。

「僕、本物の島田さんだつて最初から気付いてたんだよ？」

死体のオブジェクトが出来上がった。

「エリス。こんなところにおったのか」

「？あら秀吉。どうかしたの」

人が少なくなってきたので、購買で飲み物を買ってるところで秀

吉に遭遇した。秀吉に彼女なんて出来るのかしら？彼氏なら直ぐにできると思うんだけど。可愛いし。

「お主、今かなり失礼なことを考えておったであろう」

「いやいや、客観的な事実を考えてただけよ。それで何かあったの？もうこれから教室に戻るけど」

「ふむ、それなら道すがら話そうではないか。どの道教室に集合しなければならぬのでな」

「うん？どうしてよ」

作戦会議にしてもあんなかび臭い教室でやらなくても良いんじゃないかしら。

「いや、なぜか明久がまるで誰かに散々殴られたあと頭から廊下に叩き付けられた様な傷をつけて倒れておっこのう。教室で寝かせてあるのじゃ。まったく、いくら『戦争』じゃからと、本当に怪我する必要はないというのに・・・」

「へ、へー。そう、不思議ねえ」

うん。その見解は正しいわよ。唯一つ、あれは『戦争』じゃなくて一方的な虐殺よ。

「で、結局Bクラス戦はどうなったのよ。特別勝敗が決まった感じもないけど」

「うぬ。今相手を教室に押し込んだところでな。協定のとおり休戦中じゃ」

「協定、ねえ・・・何か裏があると思うんだけど・・・」

なんと言っても相手はあの根元恭二だ。昨日無くなってた瑞希のラブレターも気になる。落としただけだと良いんだけど・・・っと、

教室が見えてきたわ。何度見てもぼろいわね。明久が戦ったら崩れるんじゃないかしら。」

「はいはい、明久は生きてるー？」

「おう、エリス。明久なら生きてるぞ」

そこには雄二と瑞希、それに全身に傷のある明久がいた。

「よかった。流石にあれは死んだかと思っただわ」

「そう感じたなら助けてよ・・・体の節々が猛烈に痛いんだけど」

明久は意識を取り戻してるようなのでひとまず安心する。

「・・・・・・・・(トントン)」

「お、ムツリーニか。何か変わったことはあったか？」

気がつくとムツリーニがいた。今回ムツリーニは、出番が来るまで情報収集だ。覗きで培った隠密技術を遺憾なく発揮している。

「ん？Cクラスの様子が怪しいだど？」

「・・・・・・・・(コクリ)」

ムツリーニによると、Cクラスが試召戦争の準備をしているらしい。まさかAクラス相手に仕掛けるとも思えないから・・・漁夫の利か。意地の悪い連中ね。

「んー、そういうことならCクラスと協定でも結ぶか。俺達が勝つとも思っていないだろうし、Dクラスを使えば難しいことでもないだろっ」

「そうだね。今から行こうか」

そして皆が立ち上がる。まだ四時半だし、そんなに遅い時間でもない。

「あ、秀吉は残っておきなさい。顔を見られると次善策が使えなくなるわ」

「ん？何じゃ？ワシは行かなくて良いのか？」

「俺としては神代にも残ってもらいたいんだが。今更ばれる訳にもいかん」

うん。もつともだ。しかーし、

「大丈夫よ。『メタモルフォーゼ肉体変化』っていう便利能力があってねー。顔だけ自由に变化できるの。声も体型も変わらないけど」

そうやって顔をEクラス代表のものに変える。ま、これではれないでしょう。多分。

「おお、そんなのあったのか」

「例によって召喚フィールドの中では解除されるけどねー」

さて、じゃあ行きましようか。いざCクラス！

**第五話 個人の才能の違いが戦力の決定的差ではない、らしい（後書き）**

どうぞしよう。

感想、評価などあればお願いします。

第六話 奥の手はギリギリまで使わないから『奥の手』（前書き）

アニメ版バカテス、普通に面白かったですねー。  
という訳で第六話、始まります。

## 第六話 奥の手はギリギリまで使わないから『奥の手』

問 以下の問いに答えなさい

『時に食用できる地下茎を持つ、英語で「lily」という名の植物を答えなさい。』

姫路瑞希の答え

『ユリ』

教師のコメント

正解です。さすがですね、姫路さん。

地下茎は鱗茎と呼ばれ、養分を蓄えて厚くなった葉で、ネギやラッキョウなども鱗茎に含まれます。

吉井明久の答え

『山芋、ジャガイモ、サツマイモ!』

教師のコメント

『食用』以外にも注意を向けてください。

神代エリスの答え

『白セイバー』

教師のコメント

あなたは『lily』以外にも注意を向けてください。

「おつ、美波と須川じゃん。丁度良い所に。Cクラスまで付き合っ  
てくれない？」

廊下に出たところで、二人のクラスメイトに出会った。瑞希は体  
が弱いので守る人材が必要だ。須川には生n・・・尊い犠牲になっ  
てもらおう。言い換えた意味がない気もする。

「んー、別に良いけど？」

「ああ。俺も大丈夫だ」

よし、楯と仲間ゲット。そのまま七人でCクラスに向かう。

「Fクラス代表の坂本だ。このクラスの代表はいるか？」

「私だけど、何か用かしら」

扉を開けるなり告げる雄二。それに答えたのは黒髪をベリショイ  
トにしたCクラスの代表、小山さんだ。何か陰険そうだなあ・・・

「Fクラス代表として、Cクラスと不可侵条約を結びたい」

「不可侵条約ねえ・・・どうしようしらね、根本クン？」

へ、根本？何故？

「当然却下。だって、必要ないだろ？」

「なっ！？根本君！Bクラスの君がどうしてこんなところに！」

奥から現れたのはBクラス代表の根本恭二。見るからに性格の悪  
そうな目でこちらを見ていて、ソレは同じ鋭い目でも雄二とはまっ  
たく別のモノだ。

「酷いじゃないかFクラスの皆さん。先に条約を破ったのはソツチだからな？これはお互い様、だよな！」

！不味いつ・・・！

召喚フィールドの張られる気配を感じ、すぐそこから飛びのく。あのまま張られたら肉体変化メタモルフォーゼが解けてしまうからだ。教室から出たところで、雄二に大声で叫ぶ。

「雄二っ！速く・・・」

「長谷川先生！Bクラス芳野が召喚を」

「させるかっ！Fクラス須川が受けてたっ！試獣サモン召喚！」

私の言葉を遮ってBクラスの生徒が雄二に攻撃しようとしたところを、須川が身代わりになる。よし、今はファインプレーだ！

「明久！ここは逃げるぞ！」

「くそっ」

そしてその隙に全員で駆け出す。須川も長くは持たないし、こうなったら『奥の手』で・・・って、ああ！そういえばこっちは昼間、戦場へ先回りするときに使ったんだっ！ちっ、こんな事なら温存しておくんだっ！

「はあ、ふう・・・」

「姫路、大丈夫か？」

廊下を走っていると瑞希が遅れだした。当たり前だ。この面子の全力疾走について行けるほど瑞希の体力はない。かといって、ここで瑞希を失うわけには行かないし・・・ああ、仕方ない！

「雄二！ここで足止めをしようと思うけど、異論は！？」

「あるに決まってる！何のためにここまで隠してきたと思ってるんだ！」

「だけど、この状況じゃ誰かが足止めするしかない！あんたと瑞希、ムツツリーニは論外だしあの人数相手じゃ明久や美波でも無理だわ！」

冷静に状況を述べる。事実、今この状況であいつらを足止めできるのは私だけだ。

「いやエリス、僕も残る！多分居ないよりもまだ！」

「私も残るわ！相手は数学だから戦力になる筈！」

二人も走りながら声をかけてくれる。つたく、嬉しい事言ってくれるじゃない・・・！

「ええい、解った！だが戦死はするなよ！」

「当たり前よ！」

そこで言葉を切り、メタモルフオーゼ肉体変化を解除。急停止して後ろから繰るBクラス勢を見据える。そこで、明久が声をかけてきた。

「エリス、島田さん。僕に考えがあるんだ」

「え？あんに？」

「嘘でしょ？明久に考えなんて」

そして訝しげな目で見る私と美波。明久バカが作戦？あんま当てにならないけど。

「僕だって補修室になんて行きたくないからね。任せといて」

「ふーん。ま、アンタがそこまで言うなら信用しましょうか」

「明久、役に立たなかつたら承知しないからね？」

追っ手の数は6人。さて、この人数相手にどんな策を弄してくれるのかしらね。

「Bクラス！そこで止まりなさい！」

相手の氣勢を削ぐように、強い口調で呼び止める。

「お、お前は神代・・・だが、たった一人で6人を止める気か？」

「あなたの目は節穴かしら。この場にはあなた達を除いて3人いるんだけど」

そんな軽口を叩き合ってる間に、他の面子も揃う。さあ明久、どうするのかしら？

「長谷川先生、話があります」

「なんですか、吉井君」

ふむ、作戦というのは長谷川先生を説得するのか。だけど根本の事だからうまくいってあるでしょうし、何を材料に説得するのか・・・

「Bクラスが協定違反をしていることはご存知ですか？」

「話を聞く限り、休戦協定を破ったのはFクラスのようにですね。そこで反撃を受けて協定違反を訴えるのは、戦争云々以前に人としてどうかと思いますよ」

ここまででは予想通りね。明久、どういうつもり？

そんな私と美波の期待に応えるべく、明久が片目を瞑って、言う。

「……万策、尽きたか……」

『こいつ馬鹿だあーっ！』

期待した私が馬鹿だったっ！

「坂本君、吉井君は、大丈夫、なんですか……？」

「勿論だ。他のヤツならともかく、明久なら何とかなる」

「でも……」

「確かにあいつは勉強ができない。けどどな、学力が低いからといって、全てが決まるわけじゃないだろう？」

「そ、それは、どうい……？」

「あのバカも、伊達に『観察処分者』なんて呼ばれてないってコトだ」

『サモン  
試獣召喚！』

追っ手が声をそろえて召喚獣を呼び出す。走って逃げてるけど、この先は行き止まり。先頭は避けられないわね。

「明久！どうするのよ！」

「どうするって言われても、どうしよう！」

「良いから何か考えなさい、吉井！」

三人で怒鳴りあうように会話する。

「よし、こうしよう！まず島田さんが六人をひきつける！」

「ふんふん、それで？」

「僕が逃げ易くなる」

「・・・アンタとは一度決着をつける必要がありそうね」

「明久。バカいってないで、もっと真面目に考えなさい」

つと、廊下の終わりが見えてきた。この先は行き止まりか。

「それじゃ、エリスが召喚獣を呼んで」

「呼んで？」

「僕の楯になる」

「死になさい！」

「うわ、突然どうしたの！？キレる十代！？」

「吉井！アンタ自分が助かる以外の何かは無いの？」

走りながら回し蹴りを放つが、避けられる。無駄なスキルつけて・

・・・！

そして止まる。ここから先は行き止まりだ。

「はぁ・・・最低クラスの癖に手こずらせやがって・・・！」

「クラスは最低じゃないぞ！メンバーが最低なだけだ！！！」

「吉井は黙ってなさい！」

明久。それはフォローじゃなくてトドメよ。

「その最低クラスの実力、確かめて見なさい！試獣<sup>サモ</sup>召喚っ！」  
「いいだろう、実力差を思い知らせてやる！」

美波の召喚獣が姿を現し、Bクラスの生徒が応戦するように召喚獣を動かして突進させる。

「このおっ！」

美波も同じように召喚獣を突っ込ませる。科目は 数学！

『 Bクラス	工藤信二	V S	Fクラス	島田美波
数学	156点	V S	171点	

108

なら美波は大丈夫だ。古典の点数は一桁だけど、数学ならBクラスにも引けを取らない……！」

「くっ、フォローするわ工藤君！」

罅迫り合いをしているところに、別の召喚獣が突っ込んでいく。  
不味い！

「明久！」

「解ってるよ！」

それに対抗すべく、私たちは声を揃えて叫んだ。

『試<sup>サモシ</sup>獣召喚っ！』

S I D E 明久

精悍な顔立ち。

しなやかな形態。

軽やかな動き。

喚び出すたびに感じる絶対的な強さが顕現する。

「吉井は構うな！見るからに雑魚だ！」

「返せっ！僕の格好いい描写を返せ！」

「どきなさい雑魚でヘナチヨコ！」

「島田さんは味方だよね！？」

「明久、遊んでないで仕事しなさい！」

はっ、そうだった！島田さんの召喚獣に向かう敵の前に立ちふさがり、

「ていつ、足払い！」

「ああっ！」

足を引っ掛けて体制を崩させる。

「更につ！」

敵に木刀を叩き込んで、宙に浮いたところで、

「いいいよいよしょーっ！」

その後頭部を引つつかみ、思いつきり床に叩き付けた。  
ゴン、という硬い音が廊下に響く。

『・・・え？』

その場にいた人たちが驚きの声を漏らす中、エリスだけは不適に笑っていた。

「さて、勝負はこれからだ・・・！」

『Bクラス	真田由香	VS	Fクラス	吉井明久
数学	166点	VS	51点	

さっきの戦闘の参考用に点数が表示される。  
は、恥ずかしい！トリプルスコアですよ！

「吉井、どういうこと？」

「ま、『観察処分者』の数少ない利点ってトコね」

美波の問いには、後退して来たエリスが答えた。そう、つまり召喚獣の扱いに慣れてるってコトだ。

ちなみに、彼女の召喚獣は肌に吸い付くボディースーツに黒のスラックス。それに上下に分かれた真っ赤な外套を着て、右手に白の左手に黒の中華剣を持つてる。所謂『双剣』と言うヤツだ。

ぱっと見たよりなさそうな装備だが、あの外套には腕輪の能力を減衰させる能力があるそうだ。その代わり防御力自体は僕と同レベルだけだ。

最初あの召喚獣を見たとき、どこかで見たと思ったらエリスの家でやった格ゲーでエリスが即死コンボを使ってたキャラと同じ格好だった。どうしてそんなことができるのか聞いたら

「主人公だから・・・ごめんウソ嘘。召喚獣の外見はイメージが関係してるの。私にとっての『戦う姿』がああ格好だったことよ」

と言ってた。その理屈でいくと僕の『戦う姿』は特攻服ということになるから認めない。絶対に認めないぞ！

『Fクラス            神代エリス            VS            Bクラス            野中  
長男&里井真由子

数学            226点            VS            171点            &  
92点            』

向こうの点数も表示される。片方は消耗してるみたいだし、エリスだって数学は苦手じゃない。これなら押し切れる！

「くっ・・・！」

向こうはエリスを両側から挟もうとしてるが、甘い。彼女の武器は双剣なのだ。召喚獣の体を回転させ、相手の武器を弾く。

「てあっ！」

そして、エリスが右手の白い短剣    莫耶、とエリス言っていた気がする    を里井さんの召喚獣に投擲する。回転を伴うその一撃で召喚獣は点数を失った。

「隙ありっ！」

莫耶を投げて攻撃力が半減すると同時に体制を崩してるエリスに、もう一人の召喚獣が襲い掛かる。その光景にエリスは目を鋭くし、

「 “ ” 」

「 ……え? 」

何かを呟いたかと思うと、召喚獣は敵の後ろにいた。そのまま干将を振り、敵の首を薙いだ。

「 よしつ、こつちはこれで終わりよ! そつちは…っ痛 」

エリスの体が急に硬直する。気になるけど、それより今は !

「 島田さん! 」

「 ほいほい! 」

島田さんと戦っていた召喚獣が下がったため、消火器を使って逃げる! ちなみに僕はメタルスライムの如く三人の敵から逃げ回ってる。そして消火器の安全弁を引き抜く島田さん。だけど、いつまでも使わない。

「 島田さん、早く使って! 」

「 うーん。どうしよつかなく? 」

「 ちょ、美波! 遊んでないで! もう体中が筋肉痛で痛いのよ! 」

こんなときに島田さんの本性が出てきた! 僕もいつまでも三対一はきついのに!

「 今なら大抵の事は聞きます! 」

「それじゃ、ウチはあんたを『アキ』って呼ぶから、アンタはウチのことを『美波様』ってよぶように」

「み、美波様！これでいい!？」

「え、今更？」

エリスは黙ってて！これは生きるか死ぬかの瀬戸際なんだ！

「よろしい。じゃ、最後に」

「まだ!？今度は何!？」

「あ、もう私オチ読めてきたわ」

島田さん、とつても楽しそうです。

「ウチのことを愛してるって、言ってみて？」

「『ウチのことを愛してる』!」

「・・・ばか」

「・・・え？そこまでバカなの？」

ブシャアアツ!

一言一句復唱したはずなのにひどく不機嫌な島田さんと並び、呆れた顔でこつちを見てるエリスを引きずって粉まみれのまま脱出した。

第六話 奥の手はギリギリまで使わないから『奥の手』（後書き）

どうでしたでしょうか。

感想、評価などありましたらお願いします

**第七話 卑怯は立派な手段だが、何事にも限度はある（前書き）**

ノロウイルスって怖いですね。風邪と似たような物だと思ってましたよ。

ということで少々遅れましたが、第七話が始まります。

## 第七話 卑怯は立派な手段だが、何事にも限度はある

問 以下の問いに答えなさい

『good及びbadの比較級と最上級をそれぞれ書きなさい』

姫路瑞樹の答え

『good	better	best
bad	worse	worst』

教師のコメント  
その通りです。

吉井明久の答え

『good	gooder	goodest
-------	--------	---------

教師のコメント

まともな間違え方で先生驚いています。goodやbadの比較級と最上級は語尾に-erや-estをつけるだけではダメです。覚えておきましょう。

神代エリスの答え

『ぐつど - べたー - べすと』

教師のコメント

平仮名にすれば良いという物ではありません。幼少期をアメリカで過ごして居たそうなのに、なぜ英語だけ成績が悪いのか気になりま

す。

土屋康太の答え

『bad butter bust』

教師のコメント

『悪い』『乳製品』『おっぱい』

翌日。昨日言った『次善策』のため、予備の制服を持って学校へ行く。あー、筋肉痛が・・・すっごい痛い・・・『奥の手』使っちゃったからな・・・

「うー、おはよー」

教室に入り、明久たちに挨拶をする。此処最近色々やる事があって、あまり明久と登校できてない。どうにかしたいなあ。

「よう神代。さっそくだが、昨日言った作戦を実行する」

「ん、はいはい。じゃ、秀吉。ちよっところち来て」

「むう、ワシか？何をするのじゃ？」

「これに着替えて。後優子さんと同じ髪型に」

そういつて、紙袋から文月学園の女子制服を取り出す。他校の人や大人のオトモダチも羨む一品だ。

「秀吉と神代には、Aクラスの使者としてCクラスを挑発してもら  
う」

「え？私も？」

それは想定外だ。私に何をしろと？

「昨日使ってた肉メタモルフォーゼ体変化があるだろう。あれでAクラス代表、翔子に変装して貰う。体格も似てるし、あいつなら余りしゃべらないから大丈夫だ。代表がいたほうが説得力が増すからな」

「あ、そうかも」

そういつて私は翔子ちゃんに顔を変えて、秀吉は女子制服に着替える。うん、完璧だ。雄二と秀吉以外の全員が複雑な表情である事を除けば、だが。

「ん？皆どうしたのじゃ？」

「さあな？俺にもよくわからん」

「おかしな連中じゃのう」

断言しよう。おかしいのは秀吉だ。

「んじゃ、Cクラスに行くぞ」

「うむ」

「んー」

「あ、僕も行くよ」

明久もついてくる。昨日も思ったけど、FクラスとCクラスは結構離れてるのね。もうちょっとわかりやすい構造にして欲しいわ。

「さて、行くわよ秀吉。いざとなったら吹き替えを頼むわ」

「気が進まんもの・・・」

そして、二人で教室に入る。中には昨日も見た小山さんと、何か

その他。

(じゃ、頼むわよ秀吉。意思疎通テレパシーで伝えた事をそのまましゃべって頂戴)

(うむ。ではまず・・・)

「静かになさい、この薄汚い豚ども!」

ナイス秀吉。

「な、何よアンタ!」

「話しかけないで!豚臭いわ!」

「・・・優子。それは豚に失礼」

そして口パクをする。C.V秀吉って、いいね。

「というか自分から来ておいて『話しかけるな』とか突っ込み所満載なんだけど。」

「私はね、こんな臭くて醜い教室が同じ校内にあるなんて我慢ならないの!貴方達なんて豚小屋で十分だわ!」

「・・・むしろ豚小屋すら勿体無い。肥溜めで十分」

「なっ!言う事欠いて私たちにはFクラスがお似合いですって!?!」

案外ノリノリだなあ秀吉。『肥溜めで十分』なんて言ってないんだけど。そして小山さん。あなたの中では、Fクラスは豚小屋以下なのかしら。

「手が穢れてしまうから本当は嫌だけど、特別に今回は貴方達を相応しい教室に送ってあげようかと思うの」

「・・・覚悟しておくといい。試召戦争の準備もしてるようだし、

近いうちに薄汚い貴方達を始末してあげる」

演劇部って、ここまでできないと駄目なんだろうか。それともこの学校がおかしいんだろうか。

まあなんだかねで、高飛車な感じで私たちは教室を後にした。

「これで良かったかのう？」

「ああ。素晴らしい仕事だった」

「・・・私としては冷や汗物だったわ」

いつ殴り掛かられるか気が気じゃなくて。

「さて、俺達もBクラス戦の準備をするぞ」

「あ、うん」

見ると、明久も複雑そうな表情だった。後十分で今日の試召戦争も始まることだし、さっさと戻りましょうか。

「ドアと壁をうまく使っくんじゃ！ 戦線を拡大させるでないぞ！」

秀吉の指示が飛ぶ。

昨日の交渉通り午前九時よりBクラス戦が開始され、場所は中断された場所から進軍を開始した。

雄二の指示は『敵を教室内に閉じ込める』とのこと。

ここまでは順調だ。だが現地で指示を出しているのは秀吉。秀吉は副司令官のはずなんだけど、本来指揮を取るはずの瑞希が指示を

一向に出さないし戦わない。これはやっぱり・・・

ちなみに今日は私も前線だ。昨日にもう私がFクラスだということばれてるので、存分に双剣を振り回してる。目下召喚獣に鶴翼三連をキメさせるのが目標だ。難しいのよね、あれ。

「勝負は極力単教科で挑むのじゃ！ 補給も念入りに行え！」

始まってから数時間、ちゃんと雄二の指示通りに事は進んでいるが、こちらの主戦力である瑞希が活動しないこの状況ではそれも危うい。

「左側出入り口、押し戻されています！」

「古典の戦力が足りない！ 援軍を頼む！」

不味いわね、このままじゃ突破される。こういう時瑞希に頼りた  
いんだけど、その肝心な瑞希はオロオロするばかりだ。

お。明久が押し返されている部分に向かっていく。

「・・・ツラ、ずれてますよ」

「っ！！！」

よし、ナイス明久っ！

「少々席を外します！」

去っていった。え、いいの？先生なのに。

「古典の点数が残っている人は左側の出入り口へ！ 消耗した人は補給に回って！」

さて、ちよつと時間も空いたし、瑞希に話を聞かないと。

「瑞樹、どうかしたの？」

「そ、その、なんでもないですっ」

瑞希は必要以上に首を振る。嘘が下手だあ、瑞希は。

「そうは見えないよ。何かあったなら話してくれないかな。それ次第では作戦も大きく変わるだろうし」

「ほ、本当になんでもないんです！」

明久も会話に加わる。やっぱりおかしいと思うわよね。

「右側出入り口、教科が現国に変更されました！」

「数学教師はどうした！」

「Bクラス内に拉致された模様！」

左側右側と両方文系にチェンジ。Bクラスって文系が強いんだっけ。

「私が行きますっ！」

瑞希がよつやく動く、がしかし。

「あ……」

急にその動きを止め、俯く。

瑞希の視線の先には根本。その手には何か封筒がある。一見、ア  
しはただの封筒に見えるが、私には分かる。

そう。アレは、

瑞希が明久宛に書いた、紛失したと思ってたラブレターだ。

「予想的中、ね。明久、今の見えたわね？」

「当たり前じゃないか。姫路さん」

考えてみれば当然。あの根本が、対等な取引をするはずがない。

「は、はい・・・？」

「具合が悪そうだからあまり戦線に加わらないように。試召戦争はこれで終わりじゃないんだから、体調管理には気をつけてもらわないと」

あの段階で、瑞希を無力化する算段が整ってたんだろう。だからこそあの協定を持ちかけた。瑞希が動けないなら、あの取引はBクラスに圧倒的有利。上手い方法だ。合理的でリスクもない。

「・・・はい」

「さて、行くわよ明久。」

「あ・・・！」

明久と私は、瑞希に背を向けて駆け出す。方向は教室だ。そして  
眩く。

「面白い事してくれるじゃないか、根本君」

「あら、皮肉が言えるようになったのね。嬉しいわ、明久」

『あの野郎、ブチ殺す』

私と明久は、確かにそう思っていた。

「雄二っ！」

「うん？明久……に神代か。脱走は許さんぞ」

「話があるわ。とりあえず聞いて」

「……」

教室に戻ると、雄二がノートを広げて何かを書いていた。私たちと相手の戦力分布だろう。悪いけど、それはいったん白紙に戻してもらわないといけない。

「根本君の着ている制服がほしいんだ」

「……お前に何があったんだ？」

「明久。それは唯の変態よ」

どう考えても言い方を間違えてる。あなたはそんな子じゃない……わよね？

「ああ、いや、その。えーっ」と……」

「まあいいだろう。勝利の暁にはそれくらい何とかしてやるっ」

受け入れた！？なかなかいい感じに誤解してるわね。私には関係ないから良いけど。

「それともう一つ。瑞希を前線から外してもらえないかしら」

「……どうしてもか？」

「ええ。どうしても、よ」

無茶を言ってるのは解ってる。瑞希はFクラスの最重要戦力だ。それこそ、成績だけなら私でも適わない。対抗できるのは久保君か翔子ちゃんくらいだろう。

それにそれが原因で負ける事だつて十分にあり得るし、その責任を問われるのは代表である雄二。正直私が代表だつたらそんな頼みを受けたりしない。

「・・・条件がある」

「聞かせてもらうわ」

「神代。姫路の担う予定だつた役割をお前が果たせ。明久はそのサポート。どうやっても良いから、必ず成功させる」

だが、そんなハイリスクノーリターンな賭けを雄二はコールする。やっぱ、私なんかとは器が違うわ。

「わかった。絶対に成功させて見せる！」

「同じく、よ。その役割は？」

「いい返事だ。仕事は簡単だ。科目は何でも良い、根本に攻撃を仕掛ける」

「皆のフォローは？」

「無い。しかもBクラスの出入り口は今の状態のままだ」

「・・・なかか難しいことをいつてくれるわね」

今、Bクラスの出入り口は緋詰め状態だ。その関係上、何より作戦の為に戦闘は常に一対一。そこを突破して無駄に広いBクラスの奥、根本にたどり着くには圧倒的な火力が必要だ。例えば瑞希のような。私にも明久にもその火力がない。

「失敗は許されない、か・・・」

作戦の全貌こそ知られてないが、大体察しはついている。私たちに割り振られるのはムツツリー二の露払いだ。あれは保健体育だけならぶつちぎりで学年トップ。締め切られ、室外機の壊れた教室。その湿気と温度が支配する教室に、唯一入ろうと思う、入る事のできる教師。体育の大島教諭だ。そこについて保健体育で止めを刺すのが作戦なのだろう。だが。

「いいわ。此処まで来たらレイズうわのせしないと失礼じゃないの」

「何か言ったか、神代？」

「いいや？ただ、ちよつとやる気出たわ」

そういつてニヤリと笑い、それに雄二は何を思ったのか目を細くする。気付かれたかな？

「・・・まあいいさ。お前の仕事は根本に攻撃を仕掛けること。それ以外は何をしても良い。それじゃ、上手くやれよ。」

「え？どこかいくの？」

「Dクラスに指示を出してくる。例の件でな。」

「ん。行ってらっしゃい」

「え、あ、ちよつと」

ふむ。室外機の件ね。雄二は身を翻して教室を後にする。

「さて。行くわよ、明久」

「待つてよエリス。僕らでどうやって姫路さんの代わりをするのか考えないと・・・」

「明久」

これからは遊びは終わりだ。少しでも手順を間違えればこちらの詰みだ。これからやるのは奇策以外の何物でもなく、これを逃したらもう手はない。だからこそ慎重にやる必要がある。

まあ今からやることは、『慎重』なんて言葉の対極にあるんだけどね。

「確かに成績は酷いけど、それでもアンタにだって出来る事がある。貴方にしかできないことがあるはずよ」

「僕にしか、できないこと・・・」

これからやろうとしてる作戦には明久の協力が必要不可欠だ。他の誰でも無い、明久の協力が。

「・・・あ」

「気付いたわね？ちょっと痛いだろうけど、我慢しなさい。私もできるだけ手伝うから」

私には私の、明久には明久の役割がある。それを果たすために最大限の努力をするだけだ。

「うん・・・よっし。それじゃあ行くかうか」

「ええ。猿山の大将を引き摺り下ろすわよ！」

あの外道に目に物見せてやる！

**第七話 卑怯は立派な手段だが、何事にも限度はある（後書き）**

いかがでしたでしょうか。

感想、評価等あればお願いします。

**第八話 未知ではないけど、とりあえず壁を突き破れ（前書き）**

ついに登場する『奥の手』、詳しい説明は後ほど。

という感じで第八話、始まりますよ。

## 第八話 未知ではないけど、とりあえず壁を突き破れ

問 以下の問いに答えなさい。

『女性は（ ）を迎えることで第二次性徴期になり、特有の体つきになり始める』

姫路瑞希の答え

『初潮』

教師のコメント

正解です。

吉井明久の答え

『明日』

教師のコメント

随分と急な話ですね。

神代エリスの答え

『先生、セクハラです』

教師のコメント

問題なので普通に答えてください。

土屋康太の答え

『初潮と呼ばれる生まれて初めての生理。医学用語では、生理のことを月経、初潮のことを初経という。初潮年齢は体重と密接な関係があり、体重が1.5kgに達するところに初潮をみるものが多い為、その訪れる年齢には個人差がある。日本では平均12歳。また、体重の他にも初潮年齢は人種、気候、社会的環境、栄養状態などに影響される』

教師のコメント

詳し過ぎです。

「美波！武藤と君島も、少し頼み事があるわ！」

やることは決まった。体を張るのは明久だけど、そこは我慢してもらおう。

まずは教室内で補給テストを受けていた三人に声をかける。

「どうしたの？」

「何か用か？」

「補給テストがあるんだけど」

全員怪訝そうな顔をしている。この三人は昨日結構ダメージを受けているので、当面は補給テストを受けるのが任務となっているようだ。とりあえず明久が要点だけを答える。

「補給テストは中断。その代わりに、僕に協力して欲しい。この戦争の鍵を握る大切な役割なんだ」

「・・・ずいぶんとマジな話みたいね」

「うん。ここからは冗談抜きだ」

「何をすればいいの？」

「僕と召喚獣で勝負をして欲しい」

「・・・」  
『ディラビディティド物質脆化』

前もって壁に能力を使っておく。効果は『限定された半径10cmの物質を若干脆くする』程度だ。これでDクラスの壁でもEクラス程にはなる・・・はずだ。使ったことないからわかんないけど。

「んー・・・本当は、明久の拳に直接保護をかけたいんだけど・・・」

その手の持続系の能力は召喚フィールドに入ると解除されるから意味がない。私の能力何故か治癒系の能力ないし・・・私にできるのは、今はこのくらいね。

「サモン試獣召喚っ！」

向こうでも話がついたようで、美波と明久が召喚獣を出す。明久の肩書きは『観察処分者』。この上なく不名誉な肩書きだけど、今回はそれに感謝しなければいけない。

ドン、と明久の拳が壁を打つ。

今戦闘を行っているのはDクラスで、この隣にBクラスがある。明久が先ほどから召喚獣で打ち付けてる壁の向こう側に、ね。

「アキ、時間がないわよ」

美波が壁の時計を見上げて告げる。作戦開始までは、後三分強・  
・！

『お前らいい加減諦めるよな。昨日から教室の出入り口に人が集まりやがって。暑苦しいことこの上ないっての』

『どうした？ 軟弱なBクラス代表サマはそろそろギブアップか？』

壁の向こうから声が聞こえる。敵の大将である根本と我らが代表雄二だ。そんなこともお構い無しに、明久は壁を打ち続ける。二度、三度 その衝撃は軽くはないはずなのに、明久は拳に血を滲ませながら壁を殴打する。

『はア？ ギブアップするのはそっちだろ？』

『無用な心配だな』

『そうか？ 頼みの綱の姫路さんも調子が悪そうだぜ？』

『……お前ら相手じゃ役不足だからな。休ませておくさ』

『けっ！ 口だけは達者だな。負け組代表さんよお』

『負け組？ それがFクラスのことなら、もうすぐお前が負け組代表だな』

四度、明久が壁を打ったところで壁に一筋の亀裂が入る。多少脆くしてあるとはいえそう容易く壊せる物ではない壁に。だが、それが仇となる。フツ、と美波と明久の召喚獣の姿が掻き消えた。

「ちよっ・・・先生、まだ勝負は！」

「壁に罅が入ったのを見たでしょう。このままでは吉井君、君の攻

撃で壁が壊れてしまいます。場所を変えて続けましょう」  
「そんな・・・！」

壁が壊れるかもしれないと思った遠藤教諭が、召喚許可を取り消してしまった。これでは作戦が決行できない。この壁を壊さなければ、私たちに勝利はない。

「アキ、そろそろ・・・」

「解ってる！でも、これじゃ・・・！」

「大丈夫、よ」

けれど。

壁を壊す方法は、何もそれだけじゃないわよ、明久？

『……さっきからドンドンと、壁がうるせえな。何かやっているのか？』

『さあな。人望の無いお前に対しての嫌がらせじゃないのか？』

『けっ。言ってる。どうせもうすぐ決着だ。お前ら、一気に押し出せ！』

『……態勢を立て直す！一旦下がるぞ！』

『どうした、散々ふかしておきながら逃げるのか！』

「エリス、それってどういう・・・」

「『サイコキネシス フルバースト』  
『念動能力』 全力行使。」

予め用意しておいた1kg程の鉄球を大量にばら撒き、滞空させる。百余りの鉄球がカミシロエリスの意思で壁に向かって狙いをつける。

「全く、これ疲れるのよ？根本め、後で締め上げてやる」

私の念動応力サイコキネシスは重量制限と範囲こそ酷いものの、かなりの速度が出る。また有効範囲から出て慣性の法則に従ってそのまま進むため、こういうことにも使えるのだ。

『後は任せたぞ。神代、明久』

壁の向こうから、よく通る声で雄二が告げる。午後三時ジャスト、作戦開始だ。

私は、指を鳴らして高らかに宣言する。

「さあ。それじゃ、派手にイツときましようか！」

オーバードライブ プラスター  
最高出力。鉄球、連続射出 シュート !

ガガガガガガガガガガガ！と、数多の鉄球が壁を撃ち抜き、

「ッらあ！」

すでに明久によってダメージを与えられていた壁は豪快な音とともに崩れ、Bクラスへの道が生まれた。

「ンなっ！」

崩れた壁の向こうにある、驚いて引きつった根本の顔。

向こうの戦力の殆どは雄二率いる本体を追って教室から出ている。またとない勝機。敵の主戦力は出払い、代表の防備は薄い。此処を逃せば勝ちはない。

「くたばれ、根本恭二いっつ！」

呆気にとられている根本を討ち取るべく明久たちが駆け寄るが、近衛部隊に阻まれる。根本までの距離は20m弱。せめて一秒隙があれば、近衛隊を潜り抜けてアイツの下まで走ることができる。

「は、ははっ！驚かせやがって！残念だったな！お前らの奇襲は失敗だ！」

「・・・アンタごときには勿体無いけど・・・」

そして私には、その一秒を生み出す手段が、ある！

「刻<sup>トキ</sup>ヲ停<sup>ト</sup>マレ」

そして私は、凍った世界を駆け抜けた。

## S I D E 明久

何が起こったのか解らなかった。エリスは、近衛隊目掛けて駆けだした、ただそれだけの筈だった。

なのにエリスが小さく何かを呟いた瞬間、エリスは近衛隊をすり抜けたように根本君に向かって駆けていた。

不思議と、その一言は耳に残ってる。

ときよとまれ、と

そうだったのだから、きつと時は止まったのだろう。

だからこそ。今エリスは根本に攻撃を仕掛けている。

「……痛。Fクラス神代、Bクラス根本恭二に世界史勝負を仕掛けるわ。試獣<sup>サモン</sup>召喚」

呆然としていた田中先生も根本君も、ようやく我に帰った。エリスに応じ、根本君も召喚獣を召喚する。

『Fクラス                    神代エリス                    VS                    Bクラス                    根本

恭二

世界史                    419点                    VS                    218点

』

勝敗は一瞬で決した。エリスの召喚獣が手にした弓で敵を射抜く。ただそれだけ。

しばらくの沈黙の後、教室に降り立った二人に対し、エリスは子憎たらしい笑みを浮かべた。

「あら、ムツツリーニ。遅かったわね。猿山の大将、倒しちゃったわよ?」

言って、膝を着くエリス。

今ここに、Bクラス戦は終結した。

「か、身体中に……焼け付くような、痛みがっ……!」

「うう……痛いよう、痛いよう……」

終戦後、Bクラスに転がってるエリスはそんなことを言ってた。何でも、極度の筋肉痛で体が動かないんだとか。最後の『アレ』のせいだろう。

僕のほうも手の痛みが尋常じゃない。100%返るわけではないとはいえ、素手で鉄筋コンクリートを破壊したわけだし。

「なんとも……お主らしい作戦じゃったな」

「で、でしょ？もつと褒めてもいいと思うよ？」

「後のことを何も考えず、自分の立場を追い詰める、男気溢れる素晴らしい作戦じゃな」

「……遠回しに馬鹿って言ってる？」

そこでエリスが口を挟む。

「失礼ね。いくらなんでも明久ほど馬鹿じゃないわよ」

「おお。それは済まなかったの」

「ちよつと！二人とも酷いと思う！」

学校の壁を破壊するなんて、問題にならないはずがない。僕とエリスの放課後の予定は職員室でのハートフルコミュニケーションで埋まってしまった。初犯でなければ留年や退学になっていただろう。特に僕は召喚獣を悪用したりもしたし。

「ま、それが明久の強みだからな」

雄二がバンバンと肩を叩いてくる。

馬鹿が強み！？なんて不名誉な！

「さて、それじゃ嬉し恥ずかし戦後対談といくか。な、負け組代表」?

「.....」

床に座り込んでる根本君。さっきまでの強気が嘘のようにおとなしい。

「本来なら設備を明け渡してもらい、お前らには素敵なちやぶ台をプレゼントするところだが、特別に免除してやらんでもない」

その言葉に周囲がざわつく。

「落ち着け、皆。ここはあくまで通過点だ。だから、Bクラスが条件を呑めば解放してやるうかと思う」

その言葉で僕らのクラスは納得の表情をした。Dクラス戦で雄二の性格を理解してきたのだろう。

「.....条件はなんだ」

力なく根本君が問う。

「条件？それはお前だよ、負け組代表さん」

「俺、だと？」

「ああ。お前には散々好き勝手やってもらったし、正直去年から目障りだったんだよな」

ひどい言い様だけど、周りのフォローはない。それだけのことを彼はやってきたのだ。

「そこで、アンタ達Bクラスに特別チャンスよ」

雄二の言葉を引き継ぎ、根本君の後ろで寝転がってるエリスが言う。いつの間にあんなところまで移動したのだろう。謎だ。

「Aクラスに行つて、試召戦争の準備が出来ていると宣言して来なさい。そうすれば今回は設備については見逃してあげる。ただし、宣戦布告はだめよ。したら戦争は避けられないから。あくまでも戦争の意思と準備があるとだけ伝えるの」

「……それだけでいいのか？」

エリスの声に、根本君が振り返る。その目は探るような視線だ。まあ当初は、ね。

「そうね。だーけーどー。折角だから一生モノの思い出しトウシュにスしてあげたいわよねえ？雄二」

そして雄二と二人で悪魔のように笑うエリス。と言うか今のどうやって発音したんだろう。エリスの本音が垣間見える。

「ああ。負け組代表さんにはコレを着て行ってもらうことにしようか」

そう言つて雄二が取り出したのはエリスが持ってきた女子の制服。僕達の要望をかなえるための手段だ。絶対に個人的な嫌がらせもあるけど。

「ば、馬鹿なこと言うな！この俺がそんなふざけたことを……」

『Bクラス生徒全員で必ず実行させよう!』

『任せて!必ずやらせるから!』

『それだけでで教室を守れるなら、やらない手はないな!』

「おまえら!？」

「だそうよ。がんばってねー」

意外とノリが良いね、Bクラス。

「んじゃ、決定だな」

「くっ!よ、寄るな!変態ぐふうっ!」

「黙ってなさい」

何か言おうとする根本君に、エリスが先ほどの鉄球を打ち込む。  
痛そうだなあ・・・

「じゃ、着付けに移りましょうか。明久、任せたわ」

そついい残し、エリスはごろごろ転がって教室から出て行った。

**第八話 未知ではないけど、とりあえず壁を突き破れ（後書き）**

なんか必殺技っぽいのがありますが、正直ノリでやりました。書いてて楽しいんですよ、ああいうの。

という訳で感想、評価などありましたらお願いします。

余談ですが、PVが50,000を超えました。読んで下さった皆さんに感謝です。

第九話 や、だから百合とかじゃないんだってば（前書き）

第九話。男に興味が無いだけで女の子が好きな訳ではないのです。

## 第九話 や、だから百合とかじゃないんだってば

問 以下の問いに答えなさい。

『人が生きていく上で必要となる五大栄養素を全て書きなさい』

姫路瑞希の答え

『？脂質 ？炭水化物 ？タンパク質 ？ビタミン ？ミネラル』

教師のコメント

流石は姫路さん。優秀ですね。

吉井明久の答え

『？砂糖 ？塩 ？水道水 ？雨水 ？湧き水』

教師のコメント

それで生きていけるのは君だけです。

神代エリスの答え

『？漫画 ？ラノベ ？ロープレ ？ギャルゲ ？エロゲ』

教師のコメント

せめて十八禁のものを書くことを控えてください。

土屋康太の答え

『初潮年齢が十歳未満の時は早発月経という。また、十五歳になっ

ても初潮がない時を遅発月経、さらに十八歳になっても初潮がない時を原発性無月経といい・・・』

教師のコメント

保健体育のテストは一時間前に終わりました。

あの後、無事に瑞希にラブレターを返却した直後。こっちが動けないのを良い事に職員室まで拉致され、明久と共に先生方の親身な指導を受けて疲れ果てた私は、家に帰って『日課』をした後すぐに眠ってしまった。筋肉痛も痛いし。

そして点数補給のテストを終えた二日後の朝。

いよいよAクラス戦を残すのみとなった私たちは、もうじきお別れになる予定のFクラスで最後の作戦の説明を受けていた。

「まずは皆に礼を言いたい。周りの連中には不可能だと言われていたにも関わらずここまで来れたのは、他でもない皆の協力があったることだ。感謝している」

雄二は壇上に上がるなり、そんな言葉を口にした。

「どうしたのよ雄二。らしくないわよ？」

「ああ。自分でもそう思う。だがこれは偽らざる俺の気持ちだ」

そういわれると嬉しいわね。こちらら命令違反の数々なんだけど。

「ああ。ここまで来た以上、絶対にAクラスにも勝ちたい。勝って、生き残るには勉強すればいいってもんじゃないという現実を、教師どもに突きつけるんだ！」

『おおーっ!』

『そうだーっ!』

『勉強だけじゃねえんだーっ!』

「皆ありがとう。そして残るクラス戦だが、これは一騎討ちで決着をつけたと考えている。やるのは当然、俺と翔子だ」

「私たちはあの昼食さんげきの時に聞いたから驚かないけど、他の人たちはかなりびっくりしてる。

翔子ちゃん成績すごいからなあ・・・明久の十倍とか有りそうだしなあ、点数。」

「馬鹿の雄二が勝てるわけなあっ!?!」

不用意に士気を下げような発言をする明久に、雄二がカッターを投擲。投げられたカッターは当たることなく明久の頬を掠める。ち、惜しい。

まあさすがに牽制だろうし、本当に当ては・・・

「次は耳だ」

前言撤回。頑張って明久。

「まあ、明久の言うとおりたしかに翔子は強い。まともには遣り合えば勝ち目はないかもしれない」

そこまで認めるなら明久にカッターを投げなくてもよかつたんじゃないかしら。

「だが、それはこれまでの戦いも同じだっただろう?今回もそうだ。

俺は翔子に勝つ。そして、FクラスはAクラスを手に入れる」

翔子ちゃんに勝つ、ね。一見不可能に思える言葉も、雄二が言う  
と不思議と説得力がある。

「俺を信じて任せてくれ。過去に神童とまで言われた力を、今皆に  
見せてやる」

『おおおーっ！』

その後の雄二の話によると、翔子ちゃんは小学生レベルの日本史  
大化の改新の年号を間違えるらしい。これが幼馴染パワーって  
やつね。

「あの、坂本君・・・」

「ん？何だ姫路」

「霧島さんとは、その・・・仲が良いんですか？」

うん、当然の疑問ね。雄二は翔子ちゃんのこと呼び捨てだし。だ  
から答えてあげる。

「あら、知らなかったの？雄二と翔子ちゃんは幼馴染よ」

「総員、狙ええッ！」

「待て！何で神代はそんなことまで知ってる！？そしてなぜ明久の  
号令で皆が急に上履きを構える！？」

「黙れ、男の敵！Aクラスの前に貴様を殺す！」

「ごめん雄二。こいつ等のこつという所、忘れてたわ。理由はこれが終わってからね」

「俺が一体何をしたと!？」

そんな雄二のココロの声が虚しい。何でこんな事に団結力を発揮するのだろうか、このクラスは。

「遺言はそれだけか?・・・待つんだ須川君。靴下はまだ早い。それは押さえつけた後で口に押し込むものだ」

「了解です隊長」

明久がこんな子に育ってしまったて、私は悲しいよ。

「あの、吉井君」

「ん?何、姫路さん」

「吉井君は霧島さんが好みなんですか？」

「そりゃ、まあ。美人だし」

「.....」

「え?何で姫路さんは僕に向かって攻撃態勢をとるの!?!それと美波、どうして君は僕に向かって教卓なんて危険なものを投げつけようとしているの!?!それとエリス!君が後ろから僕の首に押し付けてるそのナイフらしきものは本物だよね!?!」

今の発言はいただけじゃないわ。制裁が必要ね。人の女を寝取るうなら下種のやることよ?

「まあまあ。落ち着くのじゃ皆の衆」

パンパンと手を叩いて場を取り持つ秀吉。さすがは美少女だ。

「む。秀吉は雄二が憎くないの？」

「冷静になって考えてみるが良い。相手はあの霧島翔子じゃぞ？男である雄二に興味があるとは思えんじやろうが」

「いや、別にそんなことはないと思うけど・・・他の人はそうは思っていないようだ。」

「むしろ、興味があるとすれば・・・」

「・・・そうだね」

明久たちの視線が瑞希に集中する。うーん、翔子ちゃん百合説はわりと広まってるなあ・・・ってあれ？何で皆私のほうに目を移してるの？

「？なによ。昨日のアレの事なら教えないわよ？」

「いや、別にそれはいいけど・・・」

なによ。言いたいことがあるなら早く言いなさいよ。

「とにかく、俺と翔子は幼なじみで、小さな頃に間違えて嘘を教えただんだ」

雄二が話を打ち切って言う。ふーん、『あの』雄二が間違い、ねえ。そんなこともあるのかしら。

「アイツは一度教えた事は忘れない。だから今、学年トップの座にいる。」

それだけだろうか。絶対雄二の為とかあると思うけど。

「俺はそれを利用してアイツに勝つ。そうしたら俺達の机は」

『システムデスクだ!』

「一騎打ち?」

「ああ。Fクラスは試召戦争として、Aクラス代表に一騎打ちを申し込む」

恒例の宣戦布告。

今回は代表である雄二を筆頭に、明久、瑞希、秀吉にムツツリ。二。それに私も居る。首脳陣勢ぞろいと言った感じだ。

「うーん、何が狙いな?」

「狙いつて。ひどいなあ、優子ちゃん。Fクラスの勝利に決まってるじゃない」

そう、今回交渉の席に着いているのは木下秀吉の姉、木下優子ちゃんだ。こっちからは代表である雄二と、優子ちゃんと仲が良いと言う理由から私が居る。

その優子ちゃんが、頬杖をつきながらつまらなそうに答えた。

「そうは言っけどね、エリス。面倒な試召戦争を手軽に終わらせることができるのはありがたいけど、だからと言ってわざわざリスクを犯す必要も無いのよ」

「・・・賢明な判断ね」

苦笑しながら答える。まあ予想通りの返事に対する、だけど。ここが交渉の本番だ。ちなみにその手の交渉は好きじゃないので基本雄二に任せる事にしてる。

「ところで、Cクラスの連中との試召戦争はどうだった？」

「時間は取られたけど、それだけだったよ？何の問題もなし」

私と秀吉の挑発に乗って、昨日Aクラスに攻め込んだCクラス。

その勝負は半日で決着がつき、いまCクラスはDクラスと同等の設備で授業を受けている。

「Bクラスとやりあう気はあるか？」

「Bクラスって・・・昨日着ていたあの・・・」

「ああ。アレが代表をやっているクラスだ。幸い宣戦布告はまだされてないようだが、さてさて。どうなることやら」

「でも、BクラスはFクラスと戦争したから、三ヶ月の準備期間を取らない限り試召戦争はできないはずだよな？」

試召戦争の決まりの一つ、準備期間。

戦争の泥沼化を防ぐため、負けたクラスは三ヶ月の準備期間を経ない限り自ら戦争を申し込む事はできない決まり、なんだけど。

「残念。Bクラスとは和平交渉にて終結したことになってるからね。

・・・勿論Dクラスも、ね」

「...それって脅迫？」

二人して目を細める。私と優子ちゃんの関係はいつもこんな感じ。とっても仲良しだ。ちなみに交渉は好きじゃないだけでわりと得意よ。

「あら人聞きの悪い。ただのお願いよ」

「・・・うん、わかったよ。何を企んでいるのか知らないけど、代表が負けるなんてありえないからね。その提案受けるよ」

「え？本当？」

優子ちゃんのおっさりとした答えに、明久が声を漏らす。

「だって、あんな格好した代表のいるクラスと戦争なんて嫌だもん・・・」

根本の女装が思わぬところで大活躍。予備を一着捨てただけあったわ。秀吉ならともかく根本が着た制服なんて嫌だし。

「でも、こちらからも提案。代表同士の一騎打ちじゃなくて、そうだね、お互い五人ずつ選んで、一騎打ち五回で三回勝った方が勝ち、っていうのなら受けてもいいよ」

「う……」

「なるほど。こっちから姫路が出てくる可能性を警戒しているんだな？」

やっぱり、そこらへんは警戒してくるか。油断ならない。

「うん。多分大丈夫だと思うけど、代表が調子悪くて姫路さんが絶好調だったら、問題次第では万が一があるかもしれないし」

「わかった。その条件を呑んでも良い」

五回となると雄二が勝つことを前提に、瑞希とムッツリー二がそれぞれ勝てば良い。ま、問題ないわね。

「ホント？嬉しいな」

「何その音符。それよりも科目の選択権は貰うわよ、Aクラス様？  
Fクラス相手にまさかハンデも無しって訳じゃないわよね」

「え？うーん……」

軽く挑発してみるが、冷静に考える優子ちゃん。こちらら科目選択ができないと勝ち目がないのよ。

「……受けてもいい」

「うわっ！」

明久が情けない声を上げる。それより、この声は……

「……雄二とエリスの提案を受けてもいい」

やっぱり翔子ちゃんか。こんな静かで凜とした声、私はほかに知らないし。

「あ、翔子ちゃん。ひっさしぶりー」

「……エリス、久しぶり」

翔子ちゃんに手を振ったら、品定めするような目線が返ってきた。何だろう。私は雄二を取る気はないんだけど。この背筋に走る悪寒は何？

「ん。それで？この提案を呑んでくれるの？」

「……うん」

さすが翔子ちゃん。そこの腐と違って話が分かる。

「あれ？代表。いいの？」

「・・・その代わり、条件がある」

「条件？」

「・・・うん」

む、これは悩みどころ。

「その条件は？」

「・・・負けた方は何でも一つ言うことを聞く」

間違いなく雄二ね。約束を盾に雄二と交際を迫る気がする。

「・・・（カチャカチャ）」

「ムツツリーニ、まだ撮影の準備は早いよ！というか、負ける気満々じゃないか！」

とりあえず、あそこの馬鹿二人を誰か止めて。何想像してるか知らないけど、邪な匂いがするわ。

「じゃ、こうしよう？勝負内容は五つの内三つそっちに決めさせてあげる。二つはうちで決めさせて？」

問題無し。三勝すれば良いんだから、三つもあれば上等だ。

「交渉成立だな」

「ゆ、雄二！何を勝手に！まだ姫路さんが了承してないじゃないか！」

「・・・アイツ等の考えてること大体解ったわ。適当に手をヒラヒラ振って答えてやる。」

「大丈夫よ。瑞希に危険はないから」

「・・・勝負はいつ？」

「そうね。十時からでいい？」

「・・・わかった」

「ん。交渉成立よ。一旦教室に戻りましょう」

交渉に成功し、Aクラスを後にする。

さて、そろそろツメに入りましょうか。

『瑞希にはってことは・・・まさか、エリス！自分を犠牲に・・・』

っ！

『・・・！！（カチャカチャ）』

『だからムツツリーニ、気が早いつて！』

とりあえずは後ろの二人をシメる所から、ね。

第九話 や、だから百合とかじゃないんだってば（後書き）

如何でしたて御座いましょうか。

感想、評価などありましたらお願いします。

第十話 体は剣でできている、そう考えてる時期もありました(前書き)

第十話。いよいよクライマックスです。

第十話 体は剣でできている、そう考えてる時期もありました

問い 以下の問いに答えなさい。

『家計の消費支出の中で、食費が占める割合をなんと呼ぶでしょう』

姫路瑞希の答え

『エンゲル係数』

教師のコメント

正解です。さすがですね、姫路さん。一般に、エンゲル係数が高いほど、生活水準は低いとされています。

吉井明久の答え

『今週は塩と水だけです』

教師のコメント

食事の内訳は聞いてません。

神代エリスの答え

『食事なんて採らなくなつて、人は生きていける』

教師のコメント

無理です。

SIDE 明久

「では、両名共準備は良いですか？」

今日はここ数日お世話になったAクラス担任兼学年主任の高橋先生が立会人を務める。今日も知的な眼鏡とタイトスカートから伸びる脚がとても綺麗だ。

「ああ」

「・・・問題ない」

一騎打ちの会場はAクラス。広いし、Fクラスでやったら締まらないからね。

「それでは一人目の方、どうぞ」

「アタシから行くよっ」

向こうは秀吉の姉、木下優子さん。対してこちらは、

「ワシがやるっ」

その弟、木下秀吉。苦手科目や集中力の乱し方を知ってるだろうと言っ理由だ。エリスも仲がいいけど、やはり家族には適わないだろっ。

「ところでさ、秀吉」

「なんじゃ？姉上」

「Cクラスの小山さんって知ってる？」

「はて、誰じゃ？」

ん？何かまずい事が起こってる気がする。確かCクラスの小山さんって、この間……

「じゃーいいや。その代わりに、ちよつとこつちに来てくれる？」

「うん？ワシを廊下に連れ出してどうするんじゃ姉上？」

「……丁度良い。エリス、こつちに来て」

「ん？翔子ちゃん、どうしたのよ？」

秀吉とエリスが木下さんと霧島さんのフリをして罵倒しまくった相手だったような……

「姉上、勝負は どうしてワシの腕を掴む？」

「アンタ、Cクラスで何してくれたのかしら？どうしてアタシがCクラスの人達を豚呼ばわりしていることになっているのかなあ？」

「はっはっは。それはじゃな、姉上の本性をワシなりに推測して

あ、姉上！ちがつ……！その関節はそつちには曲がらなっ……

！」

「……エリス。Cクラスでしたこと、教えてもらっ」

「え、ちよ、ま、幾らなんでも嫁入り前の体にそれは……いえ、すいまあああああ！目が、目があ！」

「……反省しても、許さない」

ガラガラガラ

扉を開けて木下さんと霧島さんが戻ってくる。美少女二人、返り血を吹きながらじゃなければ絵になっただらう。

「秀吉は急用ができたから帰るってさっ。代わりに人を出してくる？」

「・・・私が、行く、わ」

息も絶え絶えに体を引き摺って帰ってきたエリスが答える。血の涙を流してるのは何故だろうか。

「ん、エリス。まだ生きてたんだ？すごいね、代表の制裁を受けて意識があるなんて」

「・・・ふ、ふふ・・・こちら、折檻には、慣れてんの、よ・・・」

なんだろう。エリスがすごく怖い。目に光がないんだけど。

「えっと・・・教科は何にしますか？」

高橋先生が遠慮がちに尋ねる。ここで、エリスが姫路さんにアイコンタクト。軽く頷いた後、

「現代文で」

と簡潔に告げた。

「はい・・・と、それでは召喚を開始してください」

「サモン試獣召喚っ」

「サモン試獣召喚よ」

二人の召喚獣が姿を現す。エリスはこの前も見た赤い外套に白黒の双剣。

対して木下さんの召喚獣は、姫路さんのような騎士甲冑に、大き

なランスを構えていた。

□ Aクラス                      木下優子                      VS                      Fクラス                      神代エリス

現代文                      395点                      VS                      431点

□

って高あ！？431点で、姫路さん並の点数じゃないか！何でこんな・・・と思っただが、対戦相手の木下さんもこれは予想してみたいだ。

「やっぱ相手の得意科目で、って言うのも不利かしらね」

「当然。現文か世界史なら400点くらいちよろいわ」

そうなの！？幼なじみやってるのに初耳なんだけど！

僕がエリスとの関係について考えていると、いつの間にか戦闘を開始していた。

「さあ、行くわよッ・・・！」

エリスが右手を開いて突き出すと、それに呼応するように腕輪が光り

『はっ？』

エリスは、両の手に持った剣を一直線に投げつけた。

「・・・エリス。幾らなんでもそんな物が避けられない訳がないでしょ？」

木下さんは当然のようにそれを武器で弾く。それに、召喚獣の武器は一つきりだ。替えなんて無い筈なのに、あんな軽々しく・・・弾かれた剣は明後日の方向に飛び去り、

「はい残念」

エリスは、後ろに回りこんでその手に持った双剣で斬りつけた。

「なっ・・・!？」

な!？エリスは先刻双剣さっきを投げつけて・・・ってあれ?まだ、双剣空中を舞ってるよ?　っ、嘘!？双剣が、弧を描いて左右から木下さんに向かつてる!？

「何ですって・・・!？」

「更にっ!」

二本の双剣が木下さんの召喚獣に刺さったところで、エリスは

「っらあっ!!」

馬鹿でかい大剣を叩きつけた。しかも・・・よく見たらアレ、姫路さんの剣だ!？良く分からないけど、これは勝負あったか？

「なるほどね・・・道理でそんな手品みたいな・・・」

「・・・ち、仕留め切れなかつたか」

いや、まだまだ!木下さんの召喚獣は、紙一重で大剣による一撃をかわしていた。ただし片腕がない。さすがは姫路さんの大剣、掠っただけですごい威力だ。

「その能力・・・見たことのある召喚獣の武器を創る能力ね？」

「そこまで気付いてるなら話は早い、わねっと！」

木下さんの召喚中が駆け出すと同時に、エリスの双剣が無数に投げつけられる。木下さんは苦しそうな表情で逃げていた。

「そう、私の腕輪の能力は『剣製』！一度見たことのある武器を、最大成績の状態で複製する能力よ・・・！」

「また性質の悪いっ！そんな反則みたいの、あつていいの!？」

そういいながら、エリスは無数の武器を投げ・・・てない。最早空中に出現した武器を射出してる。全く関係ないけど、脳裏に金髪を逆立てた偉そうな男の姿がよぎった。

木下さんはそれから逃げ回ってる・・・あ、あれ僕の木刀だ。あつちは美波のサーベルじゃないか。そつちは・・・ムツツリー二の小太刀だな。向こうには秀吉の薙刀も突き刺さってる。何だろう、この武器の博物館。

「ああもう！『剣製』とか言っておきながら、普通に槍とか鎌とか有るじゃない！というか何その弓はっ!？」

そう。その中には木下さん自身の突撃槍ランスや、どこで仕入れたのか解らないような鎌なんかもある。あんな武装の人居たっけ・・・？また、エリス自身も武器の射出と平行して弓による追撃を狙ってる。召喚獣の武器に遠距離用のあつたんだ。

「ふふはははは！もう『奥の手』を使うまでもない！腐った女子は滅んでしまええっ！」

「何よその言い草は・・・っ！不味っ」

木下さんが、剣で作られた袋小路に追い詰められている。ああ、ピンチっばいなあ。僕はもう解説するのに疲れちゃったよ。

「ふふふ・・・貴様も所詮その程度の男だったと言うことよ・・・せめて一撃で楽にしてくれる・・・ッ！」

「いや男じゃないし。というか完璧に悪役の台詞よね、ソレ・・・」  
そこに歩いていったエリスの召喚獣が、先程も見た姫路さんの大剣を創り出して、思い切り振りかぶり

「あ、ヤバ」

その重みに耐え切れず、潰された。

『・・・へ？』

その場の全員から驚きの声が漏れる。これはいったいどういう・・・？

そこで、さっきの戦闘の参考用の点数が表示された。

『 Aクラス	木下優子	VS	Fクラス	神代エリス
現代文	186点	VS	4点	

へ、4点？何その美波の古文並みの点数。

「えっと・・・えい」

あ、止め刺された。勿論エリスの方が。これはどういう・・・

「不味ったわー」

「エリス、4点ってどういうこと!?!」

帰ってきたエリスに詰め寄る。戦闘中に、一回も攻撃を受けてないのに点数が百分の一になるってどんな状況さ?

「あれよ。この能力、燃費悪いの。」  
「燃費?」

その答えに、雄二が問い返す。燃費が悪いって、あの反則っぽい能力が?

「そ。あれ一個『剣製』する毎に、10点ちよつと消費するのよ。あー、調子乗らないでさつさと終わらせるべきだったなあ・・・」

や、しみじみ言ってるけど、これ結構大変だからね?重要な戦力であるエリスが勝ちを逃したんだよ?

「問題ないわ。次は、あんたが行くんでしょう?」  
「え!?!僕!?!」

どうしよう!ここで僕が負けたら後がないのに!

「大丈夫よ。私はあなたを信じてる」  
「そうだな。何も問題はない」

自信満々に言うエリスと雄二。そうか、エリスたちは・・・

「ふう・・・やれやれ、僕に本気を出させてこと?」「」

「ああ。もう隠さなくてもいいだろう。この場にいる全員に、お前  
の本気を見せてやれ」

『おい、吉井って実は凄いヤツなのか？』

『いや、そんな話は聞いたことないが』

『いつものジョークだろ？』

味方の筈のFクラスの皆の声。

まあ、仕方が無い。今までの僕を見ていたら普通そう思うよね。  
でも、

「吉井君、でしたか？ あなた、まさか……」

対戦相手の佐藤さんが僕を見て何かに気付いたように戦く。

へえ、良い観察眼してるなあ。

「あれ、気付いた？ ご名答。今までの僕は全然本気なんて出しち  
やあいない」

戦闘の為に袖をまくり、手首を振る。軽い準備体操だ。

「それじゃ、あなたは……！」

「そうさ、君の想像通りだよ。今まで隠してきたけれど、実は僕

大きく息を吸い、この場にいる全員に聞こえるように告げる。

「左利きなんだ」

☐ Aクラス 佐藤美穂 VS Fクラス 吉井明久  
物理 389点 VS 62点

おかしい。本気を出したのに負けるなんて。

第十話 体は剣でできている、そう考えてる時期もありました（後書き）

どうでしたか御座いますか。

感想、評価などありましたらお願いします。

第十一話 最終決戦。私たちの戦いはこれからだっ！（前書き）

第十一話。劇場 f a t e のパンフ見て思ったんですが、ソードバレルは連続掃射なのか。連続『層写』だと思ってました。パンフが間違ってるのかな？

第十一話 最終決戦。私たちの戦いはこれからだっ！

問い 以下の問いに答えなさい。

『マザーグースの歌の中で「スパイスと素敵なもので出来ている」と表現されてるのは何でしょう』

姫路瑞希の答え

『女の子』

教師のコメント

正解です。さすがですね、姫路さん。女の子の材料は砂糖とスパイスと素敵なもので、男の子の材料はカエルとカタツムリと仔犬の尻尾と歌われています。

吉井明久の答え

『カレーライス』

教師のコメント

女の子は食べ物ではありません。

神代エリスの答え

『美味しそうな女の子』

教師のコメント

どのような意図でこの解答を書いたのか非常に気になります。

「このバカ！ テストの点数に利き腕は関係ないでしょうが！」  
「み、美波！ フィールドバックで痛んでるのに、更に殴るのは勘弁して！」

いや、慣れだけで六倍の点数差を覆せるわけないでしょうが。

「さて。勝負はこれからね」

「そうだな。後三勝だ」

「ちよつと待てオマエラ！ あんた達僕を全然信頼してなかったでしょう！」

『信頼？ 何ソレ？ 食えんの？』

雄二と私がハモる。珍しいこともあるモノだ。

「では、三人目の方どうぞ」

「……（スック）」

「じゃ、ボクが行こうかな」

三回戦はムツツリー二と……愛子ちゃんだっけ？ 確か一年の終わりに転校してきた。

「一年の終わりに転入してきた工藤愛子です。よろしくね」

ああ、やっぱり。確か保健体育が得意よね。

「教科は何にしますか？」

「………保健体育」

そして、Bクラス線では披露出来なかったけどムツツリー二の得

意教科も保健体育。保健体育勝負って・・・何か、こう、どうなの？

「土屋君だっけ？ 随分と保健体育が得意みたいだね？ボクだってかなり得意なんだよ？・・・キミとは違って実技で、ね」

え？得意ってそういう意味で？

「そっちのキミ、吉井君だっけ？ 勉強苦手そうだし、保健体育で良かったらボクが教えてあげようか？ 勿論実技で」

「フツ。望むところ」

「アキには永遠にそんな機会なんて来ないから、保健体育の勉強なんて要らないのよ！」

「そうです！ 永遠に必要ありません！」

「むしろ現時点だと、翔子ちゃんにこそ必要じゃない？」

「・・・」

「おまえら。明久が死ぬほど哀しそうな顔をしているんだが。後神代、それはどういう意味だ？」

そんなの勿論、当相手が居ない明久よりももう予定がありそうな翔子ちゃんのほうが大事でしょう。雄二との。

『やはり・・・神代の百合説は本当だったのか・・・』

『ああ。間違い無い・・・』

『負けることを見越して、霧島翔子に保健体育の勉強をさせるなんて・・・』

何だろう。すごく不本意な会話がされてる気がする。

「そろそろ召喚を開始して下さい」

「はい。試獣召喚っと」

「……………試獣召喚」

そんな私に走る悪寒などお構い無しに、言葉と共に出現する二人の召喚獣。デフォルメされた二人が装備するのは、ムッツリーニが小太刀の二刀流に、対する愛子ちゃんは

「なんだあの強大な斧は!？」

「実践派と理論派、どっちが強いか見せてあげるよ」

巨大な斧だった。腕輪つきかあ……能力にもよるけど、どうだろう？

「それじゃ、バイバイ。ムッツリーニくん」

「ムッツリーニっ!」

そして振るわれる斧。まあ、大丈夫でしょう。ムッツリーニの腕輪の能力。ソレは

「……………加速」

召喚獣の姿がブレる。うーん、やっぱりアレ良いなあ。どう考えても『剣製』とかより汎用性高そうだ。

「……………加速、終了」

ボソリと、ムッツリーニが呟く。

そして一拍置いて、愛子ちゃんの召喚獣が全身から血を噴出して倒れた。

『Aクラス

工藤愛子

VS

Fクラス

土屋康太

保健体育                    4 4 6 点                    V S                    5 7 2 点  
」

おう、本当？ 私は得意科目でも400点前後よ？

「そ、そんな・・・！ この、ボクが・・・！」

愛子ちゃんが床に膝をつく。相当ショックみたいね。保健体育に自信があつたつてのもどうかと思うけど。

「これで二対一ですね。次の方は？」

高橋女史は淡々と作業を進めてる。ああ、FクラスがAクラスに勝つなんて夢にも思っていないだろうなあ。こっちも雄二任せだから、このあたりが正念場ね。

「あ、は、はいっ。私ですっ」

4番手は瑞希。学年二位の実力は伊達じゃないハズだ。

「それなら僕が相手をしよう」

対する相手は久保君。さっきから明久に熱い視線を投げかけてるんだけど、気付く気配は無い。まあ、異性からの好意ににすら気付かないのに同姓からの好意に気付くわけも無いわよね。

「さて、ここがどうなるか」

「ああ、もうこちらには後がないからな。姫路にはなんとしても勝つて貰わないといけないんだが・・・」

瑞希と久保君は成績だけならほぼ互角。勝負はどう転ぶかわからない。

「ふむ、私が『奥の手』なり何なり使って補助するのは簡単なんだから……」

さすがにそれではアンフェアだ。この試召戦争は瑞希のためでもあるし、ここは頑張ってもらいましょう。

「科目はどうしますか？」

高橋女史が二人に声をかける。科目の選択権は私とムツツリー二で使った……のか？正直ムツツリー二は使ったのかどうかわからない。ムツツリー二が選ばなくても愛子ちゃんが選んでた気もする。こっちは雄二に最低ひとつは選択権を残さなければいけないし、ここは相手に任せるほうが無難でしょう。

「総合科目でお願いします」

「それでは……」

久保君が答え、高橋女史が前と同じように操作を行う。

そしてそれぞれの召喚獣が呼び出され　一瞬で決着がついた。

『 Aクラス	久保利光	VS	Aクラス	姫路瑞希
総合科目	3997点	VS	4409点	

点数差400点オーバー。杞憂だったようね！。

『マ、マジか！？』

『いつの間にこんな実力を！？』

『この点数、霧島翔子に匹敵するぞ……！』

所々に驚きの声があがる。ふむ、翔子ちゃんは総合科目で450  
0点程度か。太刀打ちできるレベルじゃないわ。

「ぐっ……！ 姫路さん、どうやってそんなに強くなったんだ・  
・？」

久保君が悔しそうに瑞希に尋ねる。

いや、どうしても何も純粹に勉強した結果だと思っただけでも  
それでも律儀に答える瑞希。

「……私、このクラスの皆が好きなんです。人の為に一生懸命な  
皆のいる、Fクラスが」

「Fクラスが好き？」

「はい。だから、頑張れるんです」

瑞希の癒される台詞。

うん、ごめん。確かに一生懸命だと思うんだけど、それは他人  
の幸せを邪魔する時に発揮される強さよね。どうしても瑞希が好き  
になる要素が……明久くらいしか見つからない。

「これで二対二です」

高橋女史の表情に若干の変化が見られる。瑞希の成長に驚いてる  
のか、AクラスとFクラスが拮抗してる事に戸惑ってるのか。或い  
はどちらもかも知れない。

「最後の一人、どうぞ」  
「・・・はい」

相手からは勿論、最強の敵足りえる翔子ちゃん。対してこちらは、  
「俺の出番だな」

自信満々な我らが代表、雄二。翔子ちゃんと決着をつけるのはやはりコイツの役割だろう。

「教科はどうしますか？」

翔子ちゃんが負けるわけないと思ってるのか、Aクラスの連中は静かなものだ。その油断が命取りになる。

「教科は日本史、内容は小学生レベルで方式は百点満点の上限ありだ！」

ざわ・・・！

そこで、Aクラスにざわめきが生まれる。ここに、私たちの勝機がある・・・！

『上限ありだつて？』  
『しかも小学生レベル。満点確実じゃないか』  
『注意力と集中力の勝負になるぞ・・・』

Aクラスからそんな声があがる。相手にも、こちらに勝ち目が出てきたことを理解できたのだろう。

「わかりました。そうになると問題を用意しなくてははいけませんね。少しこのまま待っていてください」

一度ノートパソコンを閉じ、高橋女史が退出する。あのヒトのことだから小学生レベルのテストも持つてるんだろっな。そんな先生を見送って、明久が雄二に近づく。

「雄二、あとは任せたよ」

「ああ。任された」

ぐつと手を握りあう。

そして明久が雄二から離れる。次にムッツリーニが、瑞希が歩み寄る。

「……………(ビツ)」

「お前の力には随分助けられた。感謝している」

「……………(フツ)」

ムッツリーニはピースサインの後口の端を軽く上げ、雄二から離れ。

「坂本君、あのこと、教えてくれてありがとうございます」

「ああ。明久のことか。気にするな。あとは頑張れよ」

「はいっ」

瑞希がにこやかな笑顔とともに元気な返事をする。

雄二はその仕草を見て、楽しそうな優しい笑顔を形作る。あんなことするから翔子ちゃんに誤解されるんだろっなあ、と思っけど口には出さない。

「雄二、頑張りなさい。勉強しかできない『あの頃』とは、違うんでしょ?」

「神代・・・そうだな。見せ付けてやるさ。最弱が最強を倒すところをな」

私も雄二に近づき、軽く手を打ち合わせる。相手が翔子ちゃんつてのはあれだけど、その理想はきつと間違つてないはずだ。

「では、最後の勝負、日本史を行います。参加者の霧島さんと坂本君は視聴覚室に向かつて下さい」

テスト製作を終了して戻ってきた高橋女史が代表二人に声をかける。

「・・・はい」

短い返事を残し、翔子ちゃんが教室から出て行く。

「じゃ、行ってくるか」

「はい。行ってらっしゃい。坂本君」

「ああ」

雄二は瑞希に送り出されて、最終決戦へと向かう。なぜそこで瑞希・・・いや、もう何も言つまい。

「皆さんはここでモニターを見ていて下さい」

高橋女史が機械を操作すると、壁のディスプレイが視聴覚室の様子を映し出す。無駄にハイスペック。

そして翔子ちゃんが先に席に着き、雄二が席に着く。

『では、問題を配ります。制限時間は五十分。満点は100点です。不正行為等は即失格になります。いいですね?』

『・・・はい』

『わかっているさ』

『では、始めてください』

二人の手によって問題用紙が表にされる。

さて、問題は『大化の改新』だったかしら。どろどろか〜に〜・  
・っと、発見。

『次の( ) に正しい年号を記入しなさい。』

( ) 年 平城京に遷都

( ) 年 平安京に遷都

( ) 年 鎌倉幕府成立

( ) 年 大化の改新

例の問題のあたりで明久が声を上げる。

「よし!これで僕らの卓袱台が」

『システムデスクに！』

「最下層に位置した僕らの、歴史的な勝利だ！」

『うおおおおっ！』

教室を揺るがすような歓喜の声。

そして

『日本史勝負 限定テスト 100点満点

Aクラス 霧島翔子 97点

VS

Fクラス 坂本雄二 53点』

私たちの卓袱台は、みかん箱になった。

**第十一話 最終決戦。私たちの戦いはこれからだっ！（後書き）**

いかがでしたでしょうか。感想、評価などありましたらお願いします。

次話で超展開がある・・・かも知れません。

**第十二話 終結する戦争、そして迫り来る花の脅威（前書き）**

第十二話。おつやく一巻分終了です。

## 第十二話 終結する戦争、そして迫り来る花の脅威

問 次の（ ）に正しい年号を記入しなさい。

『（ ）年 キリスト教伝来』

霧島翔子の答え

『1549年』

教師のコメント

正解。特にコメントはありません。

坂本雄二の答え

『雪の降り積もる中、寒さに震える君の手を握った1993』

教師のコメント

ロマンチックな表現をしても間違いは間違いです。

「三対二でAクラスの勝利です」

視聴覚室になだれこんだ私たちの姿を見て締め台詞を発する高橋女史。

わかっている。私たちの負けだ。雄二がアホなせいで。

「・・・雄二、私の勝ち」

床に膝をつく哀れな雄二に翔子ちゃんが歩み寄る。

「・・・殺せ」

「良い覚悟だ、殺してやる！ 歯を食い縛れ！」

「ロールアウト 工程完了。バレット 全投影、クリア 待機 ！」

作品の壁なんて、憎しみの力で超えられるものなのよ。

「吉井君、エリスちゃんも！落ち着いてください！」

明久が瑞希に取り押さえられる。

「だいたい、53点って何よ！ 0点なら名前の書き忘れも考えられるけど、この点数は ！」

「いかにも俺の全力だ」

「この阿呆があーっ！」

「アキ、落ち着きなさい！ アンタだったら30点も取れないでしようが！」

「それについては否定はしない！」

どんだけ馬鹿なのよ、明久。

「ふっ、ならば満点なんてちよろいこの私が  
影ッ！」

！凍結停止、全投

「アンタも止めなさい！」

50を越える剣の群れを雄二に向かって掃射する直前、美波に止められる。物質錬成で作った1.5kgのハリボテを念動能力で飛ばしてただけなので、使用中に動く解除されるのである。

「くっ！ なぜ止めるの美波！この馬鹿には全身を剣に貫かれると

「いう末路が必要なのに！」  
「それ処刑じゃないの！」

美波の必死の説得に、とりあえず剣を消す。ハリボテちなみにこのハリボテ、持続時間は30秒だ。

「……でも、危なかった。雄二が所詮小学校の問題だと油断して  
いなければ負けてた」  
「言い訳はしねえ」

人はそれを凶星と言う。

「……ところで、約束」

もういいよ。どうせ雄二だろうし。回りの奴等が私と瑞希を交互に見てるけど無視だ。

「別にいいんじゃない？自業自得だし」

潔く返事をする、というかそれが既に制裁になりそうだから良しとしよう。

「……それじゃ」

翔子ちゃんの目線が雄二、瑞希、私、と来て雄二に戻る。  
そして、小さく息を吸って、

「……エリス、私と付き合って」

「……what？」

言い放った。なぜか不意打ちでこっちのほうを向いて。

あるえ？私の耳はオカシクなったみたいだ。何か今、女の子に告白された気がする。

「うん。ゴメン、幻聴が聴こえたわ。雄二と付き合いたいのね？」

「・・・だから、私はエリスと付き合う。ちなみに雄二とは既に婚約済み」

「いや、双方の合意がない婚約ってどうなんだ」

やはりおかしい。耳が一向に正しい情報を送ってくれない。とりあえず雄二にはおめでとうと言っておく。

「え、私女子よ」

「> ㄤ?」

「・・・私には雄二とエリス以外、興味ない」

なぜか成立する会話。

やばいなあ。翔子ちゃんの百合説は、あながち間違ってたみたいだ。

「拒否権は」

「\$ \$ \$ ? ? ?」

「・・・無い。約束は守ってもらおう」

どうしよう、冷や汗が止まらない。ついでに言えば後ろで期待に満ちた目でカメラを構えるムツツリー二と明久に対する殺気も収まりそうも無い。

かといって、ここで制裁なんてしようものなら間違いない翔子ち

やんに捕まる。ここは

昔

偉い人は言いました

「……………」

「、」

「」

「……………何の話？」

「……………三十六計」

逃げるに如かず、つてね。

「<sup>ハザマ</sup>“碇二染マレ”えっ！！」

もう一つの『奥の手』を使う。これは、自分の概念に『此处ではないどこか』の法則を一つ附加する能力。簡単に言うと

「アーイ、キヤーン、フラアアイツ！」

今私には『人間は空を飛べる』、という法則が適用されるのだ。窓を開け放ち、空へと舞い上がる！

ちなみに副作用は目が真っ赤に染まること。大した事無いかもしれないけど、いろいろあつたのです、アイツには。

「私には、同姓で恋愛する趣味は無いつ！！」

後ろの翔子ちゃんに大声で叫ぶ。とうかね、私。別に百合じゃない訳よ。そりゃ確かに去年は思わせぶりな行動とっちゃったかも知らないけど、とにかくノーマルなの。なのに、

「……………逃がさない…………ツ！」

「おおっ！？何アレ怖い！」

翔子ちゃんはあるうことか同じ窓から飛び降り、地上を高速して

追走してくる。ちょ、何あのスピード。振り切れないんですけど。

「いいいいやあああああつー!!」

「……大丈夫。女の子同士なら、浮気にならない……ッ!」

ちなみに、“Empty Link 碇繋ぎ”の接続時間は五分。結局着地したところを捕まり、雄二と共にデートとやらに出かける事になった。

(……大変だな、神代。とりあえず諦めておけ。翔子から逃げるのは……不可能だ)

(……アンタも苦労してんのね……でも、私から見るとアンタ満更でも無さそうなんだけど)

そんなことを話しながら、私と雄二は翔子ちゃんに引き摺られて行った。

「で、何でFクラスに登校してきた筈なのに鉄人が居るのよ。」

翌日。昨日のクスリやらスタンガンのダメージなんかが抜けず、昼過ぎから学校に来たらなんか暑苦しいのが居る。

鉄人って、確か生活指導教師よね。

「鉄人と呼ぶな。お前らは試召戦争に負けて、設備のランクが落ちただろう?」

「お前らとは心外な。負けたのは雄二がアホなせいであって、雄二の一人負けと言っても過言じゃないわ」

Aクラスにならないとアレが使えないってのに。

瑞希にも暫くはこの環境のままやっていって貰わないといけなしし……

「ふむ。まあそのおかげで、俺に担任が引き継がれたからな。坂本には感謝しておけ。これから一年間、死に物狂いで勉強できるぞ」「えー面倒くさーい。ああ、だから明久と雄二があんなに真っ白なの」

「いや、あいつらは学校に来た時からああだった。坂本はガタガタ震えてやがるし、吉井はしきりに『食費が……』と呟いててな」

と、言うことは。

雄二は私が脱走した後には何かあったんだろう。身をもって体験したからわかる。翔子ちゃんにはギャグ補正がなかったらヤンデレだ。問答無用でスタンガンで動きを封じてくるし。

明久は……瑞希か美波あたりがデート　まあ本人は気付いてないでしょうけど　に連れ回したんでしょう。モテるって辛いねー。

「鉄人が担任かあー……サボるのは絶望的……となるといかに監視の目を潜り抜けるか……」

「……吉井にも言ったが、お前らには悔い改めると言う発想はないのか……」

うん、これから三ヶ月。瑞希には悪いけど、私は私でFクラスの生活を楽しみましょうか。

ある部屋で、二つの影が会話をしていた。

「で？あの欠陥品・・・どうするつもりだ。いまさら回収するわけにも行かないだろう」

影の一つ。壁際に背中を預ける長身の人物が話しかける。その声はひどく高く、とても男の声とは思えなかったが、その口調や動作、醸し出す雰囲気は紛れもなく男性のものだ。

対して、老人のような声が答える。こちらは部屋の奥を陣取る椅子に腰掛け、手を組んでいた。

「どうするもこうするも・・・誰かに依頼して、優勝して貰うしかないね。暴走の危険性のない点数で、かつ優勝の見込みのある者。簡単じゃないが、まだ一ヶ月近くあるんだ。何とか見つけてやるさ」

ふん、と鼻を鳴らして言うその返答に、相對する人物は目を細める。

影は一つため息をつくど、

「・・・学園長。今言った条件に合う人物に心当たりがある・・・かもしれない。つーかあんたが今浮かべた人物と同一人物さ、多分どうする？何なら俺から伝えておくが・・・」

「いや、別に大丈夫さね。確かにあいつらは魅力的だが、何の見返りもなしに動くような連中じゃないだろう。あれは最後の手段にさせてもらおうとするよ」

「・・・確かに、なあ・・・まあ、とりあえずはそれだけだ。俺はもう帰るとするよ」

そこでまたため息を一つつくと、やれやれと首を振って踵を返す影。それを老人が呼び止める。

「待ちな。アンタにはもう一つ別の依頼がある。報酬は・・・そうさね。『腕輪』を出してやっても良い」

「・・・本当か？」

影は驚いたように目を見開いた。その後ク、と笑いを漏らし。

「いいだろう。それで、内容は何だ？あまりにも無茶じゃなければ受けるとするよ」

「ああ、それはね」

「

内容を聞き、影は満足そうに笑った。

## 第十二話 終結する戦争、そして迫り来る花の脅威（後書き）

最後の伏線めいたもの・・・は別に要らなかつたりします。ノリです。そして犠牲者一命追加。  
感想、評価などあればお願いします。

次回は過去編というか、小学四年生の時の話を一、二話やってから二巻の内容に入ります。

設定集・その一 『神代エリス』（前書き）

番外が間に合う気がしないので、設定でお茶を濁す訳なのです。

## 設定集・その一 『神代エリス』

神代 エリス（かみしろ えりす） 女性 17歳 12月17日生

肉体と精神の整合性を取るために生まれた、現在の“カミシロエリス”の主人格。

集中すればある程度『神代 襟守』と意思疎通が図れるらしいが、時間がかかる上にやっている間は文字通り『魂が抜けたような』状態になるため余りやらない。

透き通るような、膝裏まで届く綺麗な金髪をポニーテールにしており、吊り目。襟守の強い希望により女物の下着は着けず、サラシを巻いてスパッツを穿いてる。胸はD程度。趣味はラノベ。

神の力によって『微妙な』超能力を使うことができる。精度や効果は微妙、召喚フィールド内では使えないので試召戦争では役に立たない。

が、『奥の手』と『切り札』は召喚フィールド内でも使えるので、それらを有効活用して戦争に貢献する。

成績は上の中、運動は上の下程度。テストの成績は得意教科の現代文や世界史で四百点前後だが、苦手科目の物理等は百点程で、英語系統にいたっては一桁。振り分け試験の前日明久と夜遅くまで騒いでいた所為で寝不足、朦朧とした頭で文系の得意科目にヲタ風の答えを書き連ね、Fクラスになる。

召喚獣の外見は赤い弓兵をイメージしたため、張り付くようなボディースーツに黒のスラックス、上下に別れた赤い外套。これは防御力はあまり高くないが、対戦相手の腕輪の能力を減少させる効果を持つ。

武器は陰陽の双剣。干将・莫耶にそっくりのこれらは引き合う性質を持っているが、対物理の効果は無い。

腕輪の能力は『剣製』。一度見たことのある試獣の武器を最高点数の状態複製することができる。一つ『剣製』することに十点程消費するため使い勝手は微妙。

### 『奥の手』

襟守の超能力に対するイメージが具現化したモノ。二つとも、一回使うと零時零分になるまで使えない。また襟守のトラウマが生んだ副作用がある。

Clock Over

“刻繰り”

『奥の手』一つ目。

“カミシロエリス”を除く全ての概念の時間を停める。召喚獣は召喚者の概念が宿っているので問題なく動ける。効果は一秒弱。

解文は“刻<sup>トキ</sup>停<sup>ト</sup>マレ”。

Self Empty

“碇<sup>イカリ</sup>繋<sup>ツナ</sup>ぎ”

もう一つの『奥の手』。この世に存在しない、まったく別の世界の物理法則を一つだけ“カミシロエリス”に付加する能力。

副作用は、“眼色の変化”。それに伴い若干視力が低下する。

解文は“碇<sup>イカリ</sup>二<sup>ニ</sup>染<sup>シ</sup>マレ”。

設定集・その一 『神代エリス』（後書き）

余談ですが、PV100,000を超えました。このような駄文を  
読んでくださる皆様に感謝です。

番外一 前編・スパッツって、正直下着よりもエロいと思う(前書き)

番外編。たぶん前後編です。

番外一 前編・スパッツって、正直下着よりもエロいと思う

バカテスト 小学生編

問題

『ひろしくんは、リンゴを24個持っています。たけし君と分けると、リンゴは何個ずつになりますか』

姫路瑞希の答え

『12個』

教師のコメント

正解です。かけ算、わり算は今後の基礎なのできちんとできるようにしましょう。  
。

吉井明久の答え

『ひろしに24個、たけしに0個』

教師のコメント

均等に分けてあげて下さい。

神城エリスの答え

『各12個ずつに分けた後、結果的に全て食べるので0個』

教師のコメント

正解かもしれませんが、なんとなく釈然としません。

S I D E R E S T

小学四年生の秋。転校生が来ると聞いて、姫路瑞希は不安だった。彼女自身今年の始めに軽いいじめに遭っていた。吉井昭久がすぐに鎮静し

てくれたが、し、転校生が自分のような目に遭うのも嫌だった。

だから、姫路瑞希は願う。

せめて、自分は転校生と仲良くできるようにと。

まあ、そんなものは全くの杞憂だったのだが。

S I D E O U T

「ふむ」

私、神代エリスは軽いジョギングから帰ってくる。この体は『アイツ』よりも様々な面で劣っているのだ。少しでも追いつくようにしないと申し訳が立たない。

ジョギング中に、可愛い女の子とすれ違ったので挨拶を交わしたが、軽い世間話の途中で性別は男だと判明。それを悟ったときは驚愕した。

名前は聞きそびれたけれど、あの少年は私の中で七不思議に登録された。

「……さて。私は学校に行かなければならないのだけど」

ともすれば独り言に聞こえるかも知れないが、ちゃんと会話相手は存在する。

そのためにはたつぷり一分間程不動で精神集中した後、心を完璧に閉ざして外界を拒絶しなければいけないが。

『で。なぜ私の腕は下着を手にしたまま動けないのかしら』

『なんか・・・こう、さすがに男として、ね・・・？』

『いや、私心も体も女なただけ』

『神代 襟守』。この体に宿る人格。私と経験と記憶を共有する。・・・いや、違うわね。この言い方は正しくない。

この男の経験と記憶を引き継いだのが、私。

本来消えるはずだったこの襟守が、なぜか今も残ってる。理由は不明、と。神のヤツ、適当な仕事しやがって。

まあ、とりあえずそんな愚痴はさておき。

『いや、でもね？こう、やっぱり自分の体だったわけだからさ、ホラ。』

そう。コイツは男、私は女。一つの体に別々の性別の人格があったりすると、こんなこともあったりする。本来体を動かすのは私の役目なのだが、強い思いがあつたりすると体が動かなくなったり、勝手に動いたりする。そんなに下着が嫌か。

『そうは言っても、この体は現在私のもの。性別も女。それとも何か？私に下着を着ずに学校に行けと？』

『そういわれるとあれだが・・・ほら、やっぱり互いに妥協とかすべきだと思うわけ、俺としては』

『どこに妥協する要素があるのよ。精神肉体共に女性なのに、女物

の下着をつけるなどはこれ如何に』

『む・・・百歩譲ってスパッツとか。あと、スカート止めてくんね？はらはらするんだな、アレ』

『・・・いいけど、中学の制服ってスカートよ？』

小学生の間は私服だが、とりあえずいく予定の中学は制服だ。その時はどうすんのよ。

『そこはおいおい慣れる・・・多分』

『頼りないわねえ・・・』

否が応でも後二年弱で卒業だから、それまでに何とかして貰わないと。

「っと、もうこんな時間？」

むう、やっぱり時間感覚狂うなあ。

さてと、行ってきますかね。

「・・・」

家を出て十分。本来ならとくに学校についている筈、なのだが。

「迷ったわ」

そう言えば学校の場所、地図上でしか知らなかったんだった。

どうでしょうか。こういう時に使える能力なんて無いし。

「仕方ないわね」

こうなったら、多少値が張っても携帯のGPSで……いや、人に聞くかな。この辺の小学校はそんなにないらしいし。

「思い立ったが吉日……と言う訳で、すいませーん」  
「ん、何？俺急いでるんだけど」

同年らしき、赤毛の少年に声をかける。何だか頭が良さそうな子だ。目つきが悪いけど。

「いや、ちよつと道を探ねたくて。ここら辺の小学校はどこか解る？」

「小学校……水無月学園か？」

「うんにゃ、違うわね。他の所は知らない？」

「……ここらで小学校っていうと二つあるんだが、水無月じゃないなら町の向こう側だぞ」

「……まーじでー……」

くうっ……私の地図能力はそこまで下がってたか……

「あー、完全に遅刻ねー……いや。ありがとねー。えーっ……」

「坂本だよ。坂本雄二」

「んー。じゃーね、雄二。ここらに住んでるなら、中学で会うこともあるでしょ」

軽く手を振り、その場を離れる。反対側ってことは今来た道をま

っすぐ行けばいいはずだ。

それにしても坂本雄二、ね。何か聞いたことがある気がする・・・何でだろうね？『こつち』に来てからニュースとか新聞は見えてないから、そんな筈は無いんだけど。

「やっと着いた・・・」

あれから約十五分。まさかこんな事に『奥の手』を使う訳にもいかず、普通に歩いてきたらこんな時間になってしまった。

小学校ってHRとか有るんだっけ？

「ま、どっちにしる遅刻なんだけど」

さてと。目下、目指すのは職員室ね。

「校内地図・・・何て気の利いた物はないわね」

仕方ない。自分で探しますか。

あれから十分。ええ、職員室を探すだけで迷いました。いつの間には迷子キヤラになったのだろう。そして今、私は担任（予定）に謝り倒している。

「すみません、遅れちゃって・・・」  
「いやいや、いいよ。引越してきたばかりじゃあ道も分からないだろうし」

寛容な人で助かった。ただでさえ転校初日から一時間近く遅刻なんて事態になってるのに、担任とまでギスギスしたら目も当てられない。

「で、私はいつ行けば良いでしょうか。さすがに一限と二限の間じや中途半端ですし」

「うーん・・・午後からか、もしくは放課後に発表するかどちらかな。どっちにする?」

「ああ、それなら午後からで」

そうと決まれば、午後まで約三時間半。何して過ごそうかな。

「で、ここが体育館だね。入るときは上履きは脱いで、体育慣用のシューズに着替える事になってる。持ってるよね?」

「ええ。そういった必需品は一通り。あ、あっちの部屋は何ですか?」

「ああ、あれは」

で、結局校長先生に校内を案内してもらった。さすが小学校と言つべきか、色々なところで小規模だ。

さて。もう大体案内して貰えそうな訳だが、あと二時間弱はある。何しようかな・・・と、そうだ。

「と。これで学校内の施設はこれで全部だね。他に、何かみたいものはあるかい？」

「えと、私のクラスを見てきてもいいですか？別に教室には入らなくて良いんですけど」

そう。まだやることがあった。今のうちにクラスの顔ぶれを覚えて、ついでに要所要所の合鍵を作ってしまう。超能力を使えば割と簡単にできる。

「ああ、別にいいよ。場所は覚えてるかな？」

「大丈夫です。っと、それじゃあ十二時までには校長室に戻るの

う。私のクラスは三階の一番奥。ちゃっちゃと仕事を済ませてしまおう。

#### SIDE 瑞希

「はい皆さん。静かにー。転校生を紹介するぞー。」

昼休み。これから給食が始まると言うときに響く先生のそんな言葉で、クラス中がざわめきます。

「えー、転校生？男の子、女の子ー？」

「っーか何でこんな時間？」

「普通転校生って朝の時間とかじゃないの？」

にわかに騒がしくなる教室に、一人の女の子が入ってきました。

第一印象は、とても綺麗な子。長く透き通るような金髪をくくったポニーテールが左右に揺れ、整った顔立ち、高い身長、スレンダーな体型と、そのどれもが同級生とは思えないほど光っていて。加えてその人から感じる大人びた雰囲気もあいまって、とても年上に思えました。やがてその子は口を開いて言います。

「転校してきた神代エリスです。これから短い間ですが、よろしくお願ひしますっ」

そういったその子 エリスちゃんは年相応の少女にも思えて、同姓の私から見ても十分魅力的でした。

「あっ、エリスちゃん！」

「ん？あら、吉井君。同じクラスだったの」

ふいに、一人の男の子が声を上げます。彼は吉井明久君。彼と居ると、不思議と私の心は暖かくなります。

だから、吉井君の知り合いならと、私は声をかけました。

「エリスちゃんって言うんですか。私は姫路 瑞希です。よろしくね？」

そう。“吉井君の知り合いだから”、私は声をかけました。

## SIDE OUT

ふむ。第一印象は上々・・・かな？少なくとも、質問しようと思っ  
め寄ってくる有象無象共からは悪い感情は感じない。やっぱりあれ

ね。可愛いは正義ね。『アイツ』曰く美少女らしいし。  
代わりに、女子からの視線ビームが痛い。特に吉井明久と話した  
あたりから。アンタどんだけモテてんのよ。

「みたいな事が・・・ってエリス、聞いてる？」

やめて！私を名前で呼ばないで！視線で殺されそう！  
あるうことか、“明久は”さつき、

『お隣さんだし、堅苦しい呼び名もあれでしょ？だから、お互い名  
前で呼び合おうよ！』

とかのたまいやがった。お前は天然ジゴロか何かか。マジ勘弁し  
てください。

「うん、聞いてるわよ・・・とりあえず明久」

いつそう深まる嫉妬の視線。いつそ武力で征服してやろうか。

「うん？」

「その馬鹿みたいに多い給食は何？」

うん。この量はどう考えてもおかしいわね。明久の前に盛られた  
給食、軽く三人分くらいあるんだけど。

そんな軽い気持ちで放った問いに、明久は遠くを見て答える。

「・・・今日は、月に一回の姉さんが夕食を作る日なんだ・・・」

うん？それがどうしたのよ。

「……うちの姉さんが出す夕飯は、たいてい食べ物じゃないからね……しかも自分で作るって聞かないから……給食だけでお腹を満たしておかないと……」

「そ、そう……大変ね……」

なんだろう。まるで海栗と間違えてたわし食卓に出されたような顔をしている。あの玲さんにそんな一面がねえ……覚えとこ。

「と言うか、エリスちゃんの量も十分多いと思うんですけど……」

隣では瑞希が苦笑していた。長いピンク色の髪、控えめながらも年の割りに膨らんだ胸。可愛いなあ……ハッ!? 違う、私は百合じゃない!

余談だが、襟守の影響なのか美男子を見るとすごい殺意が沸く。そして美少女をみるとすごい心が和む。別に女の子が好きなのじゃないんだよ? 男に恋ができなさそうだけで。

「んー、別に普通だと思うけどね。ほら、そこの西川君も同じくらいだし」

「男の子と女の子じゃ違うと思うんですけど……」

そうだろうか。生前の感覚じゃ当然だから良く分からない。とうか瑞希が控えめすぎるのよね。何でそんなに……は、まさか!

「瑞希……この年でダイエットとかはあまりよくないわよ?」

「いや違いますよ!? 単純に小食なだけですっ!」

あら当てが外れた。瑞希、そういうの気にしそうだからなあ……

「いえ、そういえば朝、体重が300gほど増えてた気が……」

うっ、やっぱり間食は控えめにしないと……」

ほらね。絶対それ胸の分だと思っただけ。この歳で『間食控えめ』て。

「そっだ！」

うるさいわ明久。いきなり叫ばないで。

「何よ？」

「明日さ、エリスの歓迎会とかもかねて、『秘密基地』に探検に行かない？」

「あっ、良いなソレ！」

明久の意見に、クラスの何人かが賛同する。それは良いんだけど、明久……『秘密基地』なのに探検するの？それもう基地って呼ばないよね？

「エリス、良いよね？」

明久が、無邪気に聞いてくる。

私と言えば、特に予定があるわけでもないの、黙ってうなずいた。

番外一 前編・スパッツって、正直下着よりもエロいと思う(後書き)

中身のないお話でした。さすがオリジナル。  
感想、評価などありましたらお願いします！。

番外一 中編・迷路は難しすぎても簡単すぎても駄目(前書き)

予想以上に長引き、まさかの前中後編に。

番外一 中編・迷路は難しすぎても簡単すぎても駄目

バカテスト 小学生編  
問題

『植物を育てるために、なくてはならないものを一つ答えなさい』

姫路瑞希の答え

『水』

教師のコメント

正解です。

神代エリスの答え

『空気』

教師のコメント

これも正解です。植物も生き物なので、空気がないと成長することができません。

吉井明久の答え

『愛情』

教師のコメント

そついう話ではありません。

翌日、土曜日。

私たちは廃墟を前にして談笑していた。

「へー。これって潰れた学校？なんともまあ曰くありそうな・・・」

「噂じゃ幽霊も出るらしいぜー！」

「何だよお前、ビビッてんのかよ？」

そんなことを話している理由は一つ。瑞希が来てない。

昨日、この廃校に来ようと明久が言い出したとき、それを聞いてた瑞希が遠慮がちに、

『あの・・・それ、私も行ってもいいですか？』

と言い出したのだ。この言葉には私以外の全員が驚いた。何でも、瑞希は体が強いほうではなく、こういったことには今まで参加しなかったそう。これを受けて明久は、

『エリスのために苦手なことをやろうとするなんて、瑞希ちゃんは優しいなあ』

とか言ってた。お前の目は節穴か。瑞希から私に送られる、『吉井君は渡しません』的なオーラが見えないのか。いや見えないけども、少しぐらい察してくれてもいいと思う。

と、そんな事を話してる間に瑞希到着。ちなみに集合時間まで後十分ちよいあるのだが、何で皆集まってるんだろ。そんなに探検が楽しみかね？

「あの、すいません！遅れました・・・」

「いや、まだ集合時間の十分前だし。こいつらが早すぎるだけでし

よ

小動物のような仕草で謝る瑞希。か、可愛い……持って帰った……いや！だから女の子だから！

自分の嗜好について真剣に悩んでいると、明久から声かけられた。

「ほらエリス、早く。置いてっちゃうよ？」

「ん？ああ、今いく」

見れば、もう皆入り口の前まで行っていた。好奇心旺盛ねえ……よっこらせ、と言う自分を年寄り臭いと思いつつも、私は腰を上げて明久の後に続いた。

「何この迷宮？」

「ほええ……凄いです……」

「これが僕らの『秘密基地』だよ」

廃墟の中は、まさに『秘密基地』と言うものだった。広く取られたスペースに、皆が思い思いに持ち込んだであろう家具、嗜好品や駄菓子の数々。

それなりに整頓されてるのは女子の力……もとい明久のモテ度の賜物だろうか。

が、私と瑞希が驚いたのはそんなことではない。

その『秘密基地』を中心に、何か迷路のようなものが広がっていた。

その迷路は控えめに見ても100m四方はある・・・と言うより、この廃墟の敷地を全て使ったものだった。なるほど、これなら確かに『探検』と言えるかもしれない。というか小学四年生にこんなものが作れるの？

「凄いでしょ？一ヶ月くらいかけて作ったんだ。適当に作った所為で逆に複雑になりすぎた道、要所要所には数々のトラップも！最早作った僕らでさえどこに何があるかなんて覚えちゃいない、長難度の迷路さ！いや、これは皆の自主性に任せた結果偶然にも出来てしまった天然にして究極の要塞だね。もちろんこうなることを予想してあえて皆には好きなようにやってもらったんだけど・・・」

「要はあなたの統率がなかった為に予想外のものができてしまったから、これを機に攻略しておきたい訳ね？」

「そんなにはつきり言わないでよ！哀しくなるじゃないか！」

「で、その結果できあがったのが『コレ』ね・・・全く、此処まで来ると逆に感動すら覚えるわ」

「いやあ、そんなに褒めないですよ」

「馬鹿にしてるのよ」

「殆ど初対面なのに馬鹿にされた!？」

皮肉に気付かない時点で相当馬鹿だと思っただけど・・・まあそれはいいや。

「そんなことよりも。これ、一度入ってゴールできなかつたらどうするのよ。そもそも、これちゃんとゴールあるんでしょうね？」

「大丈夫だよ。最初に入ったときは半日掛かったけど、しつかりとゴールできたから」

「・・・明久。それは普通大丈夫とは言わないわ」

「大丈夫だって。今回は非常食も持ってきてるし、少しくらい迷っ

ても大丈夫さ。運がよければ三時間くらいでゴールできるし」  
「ソウデスカ……」

何でこう、コイツの感性は一般的なものとずれているのだろう。  
私もだけど。ところで。

「と言うか、一回ゴールしたなら『探検』する必要はない？」  
「いや……どうもこれ、ゴールまでたくさん道筋があるみたいで  
一応把握しておかないと、何かあったときに使えないでしょ？」

何に使うんだろう。七日間戦争でもするつもりだろうか。  
もっとも、明久の両親は海外で働いてるし、別にそんなことする  
必要は欠片もないと思うけど。

「よし。皆、準備できた？出発するよー！」

そんな明久の号令で、私たち 私と明久、そして瑞希と、名も  
無きモブが四人 は、迷宮の中へと足を踏み入れた。  
そこで一つの問題が。いきなり道が三つに分かれてる。

「で、どうするのよ？迷路の構造を把握するのが目的なら、人数を  
分けたほうがいいと思うわよ？」

「そうだね……じゃあグッパだ！前は真ん中から行ったから、グ  
ーは右でパーは左ね」

ぐっと、パーで、という掛け声に合わせて、私たちは反射的に手を  
出した。

「想像以上に危険なんですけどッ!」

振ってくる金ダライを避け、落とし穴にはまる寸前で回避し、地面に転がるゴムボールを踏まないように蹴飛ばしながら、背後から迫り来る巨大なバランスボールから逃げる。表面にびっしりとくっ付いてるゴキブリの死骸は見るだけで吐き気を催す。アレに潰されれば、不快どころじゃ済まなそうだ。

「くうっ、トラップ担当の川下君(仮)め! 上げつないトラップ仕掛けやがって! さては今日来なかったのはこのトラップがあるからだな!」

「明久、無駄口をたたく暇があるなら対策を考えなさい! と言うか(仮)って何!」

そう言いながら、必死で走る。くっ、このままじゃ追いつかれる! いっそ超『ブチッ!』能力で……『ブチッ!』? ふと足を見ると、そこにはワイヤーが引っかかっていた。後ろを振り返る。

こっちにきたグループ……私と明久を除く二人のクラスメイトが、二つに増えたバランスボールの下敷きになっていた。

『いやああああああああつ! ! ! ! !』

迷宮探索は、まだまだ続く。

「？」

ところ変わってパー組。姫路瑞希は首を傾げていた。今、何か悲鳴のようなものを聞いた気がする。

「んー？どつたの姫路さん」

「あ、いえ。何でもありません」

きつと空耳だろう、と自分に言い聞かせ、T字路で自分呼んでるクラスメイトに駆け寄る。と、

「あれ？」

何か足に違和感を感じて下を見ると、ワイヤーが引っかかっている。何故だろうと首をひねり、次に顔を上げたときには、

『うわあああああああ！！！！』

と悲鳴を残し、クラスメイトは瑞希から見て右側に走り去っていった。

「え、ちょっと、いったい何が・・・」

言いかけたところで、今度は左側からゴキブリがびっしりとついたバランスボールが流れていった。

瑞希は、失神した。

## SIDEOT

「ぜえ、はぁ・・・ぜっ、明久、居る、わね・・・？」  
「げほっ、ごほっ・・・エリス、こそ、無事・・・？」

数十分後。何とかゴキブリ付きバランスボールの脅威から逃げ出した私たちが、二人の尊い犠牲を出してしまった。まあ、後で『奥の手』が何か使って助け出そう。

ちなみに、超能力のことはまだ誰にも教えてない。知られても面倒臭いし。お隣さんだしそのうち教えるつもりだけど、別にもうちよっと親しくなってるからでもいいだろう。

「はぁ、ふう・・・ゴールは、まだ見えないの・・・？」  
「ひい、まだ、みたいだね・・・」

息も切れ切れに会話する。何だかんだでもう入ってから五時間弱だ。そろそろゴールが見えてきたって良いと思う。まさか本当に丸一日迷うわけにもいかないし・・・

そういえば、最近の小学生はこんな時間まで遊んでても平気なのか。もう午後の八時よ？

そのことを明久に言うと、

「大丈夫だよ。迷路探検するって言ったら『朝までには帰って来い』って言われたから」

との返答が。世も末ね。

「はぁ・・・ったく、そろそろ飲み物もないし、さっさと出たいのだけど・・・」

そういつて、たった今飲み終わったペットボトルを背後に投げ捨てる。500mlを五本持つてきていたのだが、今でなくなってしまう。もう気力も体力も限界だし、早く帰りたい『カチッ!』いん……カチッ?』

私と明久は顔を見合わせる。

また、このパターンか。

後ろを見ると、今投げたペットボトルによって押されたであろうスイッチと、牛乳が良くしみこんで乾いた、とても人体に悪そうな雑巾。今にも飛んできそう。具体的にはあの転がるビー玉がワイヤーに引っかかったら。どこのピタゴラスなスイッチだ。

『もついやだあああああ!!!!!』

全力で曲がり角を曲がり、その先にあったスライム入り落とし穴を飛び越え、命からがら(?)逃げ出した。何なのだろう。『こっち』に来てから、極端に不幸な気がする。どこの幻想殺しだ、と言う具合に運が悪いんだけど。

「ん?あれ、ゴールじゃない?」

そついいながら、明久が手に持つてる手帳に何かを書き込む。そついえば、スタート時から持ってたわよね、あれ……何を書いているんだろう?

「まあいいか。やっと出口よ。さっさと帰ってお風呂に……あはいや、先にあの二人を助けに行かないと」

どうせ明久の事だから、大したことではないでしょう。たった二日の付き合いで分かる。あいつは本当の馬鹿だ。

「明久、道分かる？」

「うん。ちゃんと道順はメモしてあるし」

驚いた。あの手帳に書いてたのはここの地図か。あの明久が役に立つことをするなんて・・・

「さてと、それなら水分を補給してから助けに・・・」

「大変だあああああ！！！」

「・・・何ごと？」

ゴール間近で、反対側の通路から二人組が走ってきた。こいつら、瑞希のほうの組よね。何故二人？

「どうしたの？瑞希ちゃんは？」

明久も同じことを思ったのか、二人に尋ねる。そいつらはあわてた様子で叫んだ。

「そ、そうだ吉井！大変なんだよ！姫路さんが・・・」

「瑞希ちゃんが？」

「姫路さんが・・・失神したままスライムの落とし穴に落ちて、なんだかエロい事になってる！！」

「そうか！それならすぐに助けに行かなくちゃね！」

「・・・それは、そこまで慌てることなのかしら？」

話によると、場所は分かっているらしいし。まあ救助対象が一人増

えたとおぼいまして。

番外一 中編・迷路は難しすぎても簡単すぎても駄目（後書き）

相変わらずの薄い内容ですが、感想や評価などありましたらお願いします。

番外一 後編・男なら誰しも必殺技を欲しがるものだ(前書き)

後編。相変わらず内容は薄いのです。

番外一 後編・男なら誰しも必殺技を欲しがるものだ

バカテスト 小学校編

家庭科アンケート

『味噌汁の具材として、あなたの家でよく入っているものを挙げなさい』

神代エリスの答え

『浅蜷、蛸など』

教師のコメント

神代さんの家では、貝を使う味噌汁が良く出るのですね。先生もアサリやシジミの味噌汁は大好きです。

姫路瑞希の答え

『栄養のある皮を残した洗っただけのジャガイモ

いつもお父さんが全部食べてしまうので自分では食べたことはありませんが、美味しいそうです』

吉井明久の答え

『自分で作る時は大根など。』

母や姉が作る時はザリガニやトリカブトなんか良く入ってます』

教師のコメント

ずいぶんと個性的な家庭ですね。

・・・冗談ですよ？

『ん、こっちの方は発見。明久、そっちは？』

『あー見つけた・・・なんか見るも無残な事になってる』

その後。瑞希を男子に任せるのは危険と判断して、私とその他大勢クラスメの女子で助けに来た。ルビが逆な気もするが気のせいだろう。

ゴキブリに潰された二人に関しては明久たちに任せてきた。中々に吐き気を催す光景らしい。

「というか・・・」

明久との通話を切り（ちなみにこのメンバーで携帯を持つてるのは私と明久、それに潰されたほうの片割れだけだ）、眼下の瑞希を見下ろす。なんとまあ・・・

「これなんてTO LOVEる？」

落とし穴の中には、スライムにまみれた瑞希が居た。なぜ白濁色なのかは川下君（仮）に聞いて下さい。

「にしても、割と深いわね。目算1m強。どうやって引き上げようかしら、山田さん（仮）？」

「いや、なによ（仮）って。普通に山田よ」

「いや、何となくつけないといけない気がして・・・」

とりあえず軽口はこのくらいにして、早々に瑞希を助け出さないといけない。何か良い案は・・・ああそうだ。

「とりあえず山田さん。この中に飛び込んで？」  
「なんでよ!？」

即座に疑問が返ってくる。ちよつと端折りすぎたか。

「いやね?まずこの中に山田さんが入るでしょ?」

「納得いかないけど・・・それで?」

「地上まで続く人間が通れるトンネルを、緩やかな斜面で掘って?」

「・・・一つ聞くけど、その間あなたはどつするの?」

「ここで休んでるわ」

「突き落とすわよ」

何か気に障ったらしい。全くもう・・・

「じゃあこうしましょう」

「うん?」

「まず山田さんが飛び込んで」

「その前提どうにかならないの!？」

「え、飛び降りたくないの?」

「当たり前でしょ!何で本気で不思議そうな顔してるのよ!？」

えー。じゃあ何よー。あ、そうだ。

「お願い・・・」

「う・・・いや、駄目よ!そこまでいうならあんたがやればいいじゃない!」

「ちっ・・・やっぱ女じゃ騙せないか・・・」

「確信犯!？」

涙目+上目使いで頼んで見たが、やはり駄目か。顔を赤くして拒

否されてしまった。

しかし、山田さんは反応が面白いなあ。ついからかいたくなっちゃう。

とまあ冗談はさておき。

どうやって助けようかなあ、瑞希。

「うーん、やっぱり失神してるのがネックよね・・・ああそうだ」

そういえば、私が今日持ってきた荷物の一つにあるものがある。

それで瑞希を起こしましょうか。神特製の物だから、すごい音がるんでしよう。多分。

「というわけで、ぱっぱらぱら。爆竹」

「・・・何でそんなもの持ってるのよ」

「そんなの、大きい音を鳴らして自分の位置を知らせるために決まってるじゃない」

ふーん、と納得する山田さん。本当は悪戯の為に持ってきたんだけど、それはまあ良いや。

「よし。着火」

ライターで火をつけて、落とし穴を挟んだ反対側に投げる。自分の足元だ破裂されたらびっくりするし。

さて、これで瑞希が起きたらロープかなんかを『クリエイト物資精製』で作って、さも持ってきてたかのように振舞えば良いや。

そんなことを考えたとき、唐突に爆発音が響いた。

「……………え？」

見れば、先ほどの『爆竹』を中心に、一帯が吹き飛んでいた。  
この廃墟を支える、大黒柱らしきものを巻き込んで。

第二ラウンド『崩れる迷路』、スタート。

S I D E R E S T

「ん？何だ、今の音？」

「田中（仮）……そんなことより、こいつら片方でいいから持つてよ……」

「や、だからなんだよ（仮）って……」

「いや、つけなきゃいけない気が……どうしたの？」

「……………吉井」

「何？無駄口をたたく暇があったらどっちか持って欲しいんだけど」

「……………片方持つてやる。逃げるぞ」

「なんでさ。鬼が出たわけじゃ有るまいし」

「……………鬼は出てないが」

「うん？」

「代わりに迷路が崩れ始めた」

「……………ナ、ナンダッテー」

「冗談言つてないで、さっさと逃げるぞ……！」

S I D E O U T

「ちょっと神代さん！？あれ何よ爆竹じゃないでしょダイナマイトでしょ実はダイナマイト何でしょ！！！！？」

「知らないわよっ！！あれは知り合いにもらったの！！文句なら神様に言いなさい！！！」

「いや訳わかんないし！？？」

「ちょ、ま、つて……」

山田さんと叫びあいながら逃げると、程なくして瑞希の息が切れだす。当然だ。彼女は体が強いほうではないのだから。

「ああもう……仕方ないっ、山田さん！」

「何！？？」

「あなた、超能力者の知り合いって欲しい！？？」

「この状況なら喉から手が出るほど欲しいわねっ！！」

「実は私、超能力者なの！」

「はっ！？？」

よし、カミングアウト終了！この状況を打破できるのは“Self Empty 碇繋ぎ”か“Limit Break 戒被い”のどちらか……よし、決定。

「“ハザマ 碇二染マレ”っ！」

このままじゃ瑞希がついて来れない。故に加える法則は、『身体能力の限界突破』。具体的には今の十倍くらい。眼色の変化については、今は気にしてもらえない。

「瑞希、ちょっとゴメン！」

「ひゃあっ！？？」

という訳で、瑞希をお姫様抱っこ。しょうがないじゃない。おんぶだと走りにくいし、他の持ち方だと瑞希に負担がかかる。

「ちよ、何ソレ!？」

「だから超能力、よっ!」

問いに答えながらも、落ちてきた瓦礫を蹴り砕く。身体能力が上がればこんなことだってできるのだ。足は痛いけど。

「サイコキネシス 念動能力、フルバースト 全力行使

! ! !

砕いた破片を使い、壁に叩きつけて壊す。この位置からだ、壁を突っ切ったほうが早い。

「ほら! 呆けてないでさっさと行く!!」

「えっ、あ、うん」

山田さんを促して、瑞希を抱えて真っ直ぐ進む。基本的に壁は蹴り砕き、壊せないものは破片やら何やらを射出。走りながら発動できないのが痛い、それは仕方がない。と、そこに一心不乱に走る見慣れた姿が。

「明久!」

「吉井君!？」

「え!？ エリス、山田さん! 瑞希ちゃんも!」

明久と・・・田中だっけ。それにゴキブリの張り付いたモブ。これで今回のメンバーは全員揃った。

「エリス！これ、どういうことさ！なんでいきなり崩れ始めてるの！？」

「ごめんちゃい ちよつと爆竹だと思ったものがダイナマイトの類だったの」

「とか で誤魔化すなあ！」

ちつ、馬鹿だから誤魔化せると思ったのに。

「間違つて建物を壊すなんて、人生で一度は通る道！アンタもせいぜい気をつけなさいっ！」

「無いよ！断言するけど、間違つて壊すことは無いよ！」

ふ、そう言つてられるのも今のうち。私の直感が告げているわ。

明久は将来、間違つて校舎が何かを壊すわね。それも複数回。

「冗談はここらへんでっ、と。さっさと敷地から出るわよ！」

「わかつてるっ！」

そろそろ出口もみえてきた。それに“Self Empty 碇繋ぎ”の効果切れも近い。これで

「なっ・・・」

「きゃっ！」

全力疾走してたところを何かに躓く。とつさに瑞希を庇うが、地面を滑つてるうちに離してしまう。結果、瑞希のみが崩れかけの迷宮内に取り残される事になった。

「瑞希！！！」

ああ、ミスった！多少怪我する事になっても、瑞希を出口に放り投げるべきだった……！

瑞希を助けなければ。何を使う？いや、考えるまでも無い。“<sup>L</sup>戒<sup>M</sup>抜<sup>t</sup>い”<sup>B</sup>だ。でも、あれをここで使うのは！  
そこで、迷ったのがいけなかったのだろう。足を踏み出すのが、一歩遅れてしまった。

「瑞っ……！！」

ああ、また。私は、<sup>おれ</sup>せつかくできた友達さえも助けられないのか。  
……  
そんな考えが頭をよぎる、が。

「瑞希ちゃんッ！！」

そんなことをしてる間に、明久が飛び出していた。  
その顔に迷いなんか微塵も無く、まるで『助けて当然』といった風で。

狂い無く瑞希の伸ばした手を、取った。

「明久！」

その光景に笑みを浮かべながらも、私は行動を開始する。もう迷ってなんか居られない。このままでは、明久も瑞希も生き埋めだ。だが、明久が瑞希の手を掴んでるこの状況なら　　！！

「その手え、離さないでねっ！」

素早く立ち上がり、駆け出した。

「刻<sup>トキ</sup>三<sup>ト</sup>停<sup>ト</sup>マレ”ッ！」

Clock Over  
“刻<sup>トキ</sup>繰<sup>リ</sup>”を発動。その間に明久の襟首を引っつかみ、効果が切れると同時に思い切り引き寄せた。“<sup>Self Empty</sup>碇<sup>セ</sup>繋<sup>ツ</sup>ぎ”の効果もまだ切れてないし、二人分くらいならイケる筈ッ！

「っらああー！」

「ぐげっ！」

明久の変な声が聞こえても気にしない。結果として、私たちは全員、生き残った。

今更になつて、なんで私たちは命がけで逃げてたんだろう、と考  
え始めた。

全員が、私のほうを向いて眼を光らせていた。

「あー痛い・・・たたくあいつ等・・・少しは手加減しろつての・・・」

体の節々が痛い。節々所じゃなく全身くまなく痛い。空間<sup>テレポート</sup>転移で脱出を試みるも失敗し、結局ボコボコにされた。いいじゃない。原因を作ったのは私だけど、最終的に解決したのも私なんだから、と心の中で愚痴る。実際悪いのは私だから、皆の前ではそんな事言わないけど。

そんな事を考えながら、目の前の鍋をかき混ぜる。うん、そろそろ良いかしらね。

今作ってるのはカレー。明日は何だかんだで夕飯の用意をする時間がなくなりそうなので、今のうちに長持ちするものを作っておいた。

「それにしても・・・」

今日一日の出来事を思い出す。白濁スライム入り落とし穴にはまりかけ、ゴキブリつきバランスボールから逃げ回り、牛乳の染み付いた雑巾を避け・・・川下のヤロウ、次会ったらクロス。

それはさておき、脳裏に浮かぶのは迷いのない明久の顔。

誰かを助ける事に迷いがないと言っただろうか・・・まあ、誰かを貶める事にも迷いがないだろうが。

とにかくそんな明久の姿を思い出し、やはり適わないな、と思う。

「この世界の『主人公』は」

間違いなく、アンタよね。明久

S I D E 瑞希

時刻は午後の九時を回った頃。私、姫路瑞希は寝る準備をします。帰るのが遅くなって両親に叱られてしまいました。エリスちゃんのことを考えると耐えられませんでした。

あの後エリスちゃんには皆にこっぴどく絞られて、すっと正座させられていました。そのたびに、

「違うの！私が悪いんじゃない、神様が！全部あの野郎があああああ  
ああ！痛い痛い痛い！やめて！筋肉痛がやばいのに亀甲縛りはあ  
あああああ！！というかどこでこんなの覚えたオマエラ！小四だろ  
う！？」

なんて叫んでましたが、基本的にみんな聞く耳を持たずにお仕置  
きしてました。少しだけかわいそうです。

だけど、私は忘れません。エリスちゃんは確かにああなる原因を  
作ったかもしれないけれど、それでも誰よりも、私のためにがんば  
ってくれました。

だから、私はエリスちゃんと友達になりたいです。

本当に、心からの友達に　親友と呼べるような存在に。

番外一 後編・男なら誰しも必殺技を欲しがるものだ（後書き）

今回は多分ラブレターの話になります。時系列に沿って行きたいなあ・・・

感想、評価などありましたらお願いいたします。

**第十三話 ラブレターなんて都市伝説だと思ってました（前書き）**

第十三話。ラブレター編は、明久サイドはノータッチだったりします。

### 第十三話 ラブレターなんて都市伝説だと思ってました

問 以下の問いに答えなさい

『地図と方位磁石を頼りにチェックポイントを辿るスポーツを、何と呼ぶでしょう』

姫路瑞希の答え

『オリエンテーリング』

教師のコメント

正解です。さすがですね、姫路さん。

長い距離を歩くスポーツで、上り下りのある山道で行う事もあります。

体の弱い姫路さんには大変かもしれませんが、体作りのためにも頑張って参加してください。

吉井明久の答え

『ロールプレイングゲーム』

教師のコメント

そう答えると思ってました・・・

神代エリスの答え

『人生』

教師のコメント

この回答に不思議な重みがあるのはなぜでしょうか。

「ふあああ……」

眠い。私、神代エリスはいつも通り登校していた。

いつも通りなのにいつもより眠いのはなぜか。それは……

「……エリス。今日という今日は逃がさない……!」

「エリスお姉様、なぜ美春から逃げるのです!? さあ今日こそは、美春と好みの同姓について語り合おうではありませんか!」

こいつらが原因だ。

ちなみになぜ清水さん　清水美春さん　にまで追われてるのかと言つと、話は数週間前に遡る。

翔子ちゃんから命からがら逃げ出してから数日後、美波が謎の女子生徒に絡まれていた。

「あー、何か百合っぽーい……」

正直その手の連中にはもう関わりたくないため、素通りしようとしたのだけだ。

「あつ、貴女は神代エリス様ではないですか!？」  
「・・・もう許してください・・・」

無理だったみたいだ。何で? 何で私はこんな人に名前を知られて  
いるの?

「噂には聞いています。何でも貴女も私と同じく、腐った豚野郎は  
抹殺すべきと言う考えをお持ちの・・・」  
「誰が流したその噂。八つ裂きにしてやるから教えなさい」

そんな危険な思想持った覚えないんだけど。

「そんな貴女と見込んで、私と好みの女性について語りませんか？」

何か目をキラキラさせて聞いてくる。まあ、それくらいなら話を  
聞いてあげても・・・

「ああ、よく見たら貴女も中々素敵・・・」

前言撤回ね。逃げましょう。

みたいな事があったのよ。

「ああもう、しつこいわねえ! と言うか翔子ちゃんとはもかく、何  
故清水さんまで追いかけてくんのか!? 素直に美波でも追っかけてれ  
ばいいじゃない!」

「美春のことは美春とお呼び下さいッ! そしてお姉様は既に二十四  
時間行動を把握できる準備が出来ます!」

「それはそれで怖いわね!？」

くっつ、美波を囿にして逃げる作戦も失敗か!ちなみに前半はスル!

というか翔子ちゃんの足が速い!仕方がない、ここは……!

「翔子ちゃん!」

「……私も、出来れば翔子と呼んで欲しい」

「この前雄二が、瑞希の方が胸が大きくて好みだと言ってたわ!」

「……ちよつと、行って来る……!」

こっちは問題なくクリア。代わりに雄二が大丈夫じゃないだろうけど、それはしょうがない。うん、しょうがない。

「清水さん、さつき美波が……」

「嘘です!私が知らない美波お姉様の情報を、貴方が知ってるとは思えません!」

「看破するの早っ!」

ち、さすがに騙されないか……!ああもう、物理的に振り切るしかないじゃない!

「さあ、美春と共に語らおうではありませんか!」

「嫌だつてばあああああ!」

結局、HRギリギリまで追い回された。

「おはよう。明久、雄二・・・」

「あう。お、おはようエリス」

「ん、神代か？奇遇だな」

下駄箱に行くと、叫び声を上げてる明久と普通に登校してきた雄二とエンカウント。ふむ、まだ翔子ちゃんには見つかってないよね。安心した。

「い、いや、いい朝だねっ！すごくイイコトがありそうな朝だねっ！」

「？何動揺してんの、明久？」

「ん・・・まさか、さっき見えた手紙のようなものは・・・」

「た、ただのプリントだよ！」

手紙のようなもの？ふーん、恋文か何か貰ったのかしら。

「ま、別にいいけど・・・」

そういつて、自分の下駄箱を開ける。そこに見慣れない紙切れがあった。

「ん？何これ・・・手紙？」

スタンダードな白い便箋だ。差出人の名前は書いてないが、表にえらく達筆な字で『神代エリス殿』と書いてあるので私宛なのだろう。開いて、ざっと中身を確認する私の顔は、どんどん赤く染まっ  
ていく。これは・・・

「・・・ラブレター・・・？」

驚愕する。自分の顔が悪いとは思ったことはないが、実際『前世』の分も含めてこの手のものは初めてだ。  
とりあえず内容確認を切り上げ、最後に書いてある差出人の名前を確認する。名前が近づくにつれて、事前と動悸が早まるのを感じる。

です。付き合って、下さい。

Eクラス 中林宏美

「・・・・・・・・女かよ・・・・・・・・」

全力で崩れ落ちた私を見て、明久たちが心配していた。

「工藤」「はい」

「久保」「はい」

チャイムと同時に教室に駆け込むと、間髪入れずに鉄人が教室にやってきて出席を取り始めた。顔に似合わず時間に正確な教師ね。

「近藤」「はい」

「斉藤」「はい」

淡々と進む気だるい毎朝の恒例行事。鉄人の呼び声にクラスの皆は眠そうに返事をしていた。

静かな教室にのどかなひと時が訪れる。春の陽気の中、今日といういつもと変わらない平穏な日常が

「坂本」「……………明久がラブレターを貰ったようだ」

『殺せええッ!!』

雄二の一言で終わった。

「ゆ、雄二！いきなり何てこと言い出すのさ！」

そんなことを言う明久。と言うか明らかに小声だったのに教室中の誰もが気付いた様子だ。流石Fクラス。

怒号が飛び交う教室。その会話で分かった事はやはりFクラスは他人の幸せを許さないと言う事と、この教室は嫌にパンが多いと言うことだけだった。

「お前らっ！静かにしろ！」

それも一転し、鉄人の怒号で静寂が戻る。私には問題の先送りには見えない。主に美波とか瑞希とかから出てる不可視のオーラが。

出席確認を続ける鉄人。

「手塚」「吉井クロス」

「藤堂」「吉井クロス」

「戸沢」「吉井クロス」

「皆落ち着くんだ！なぜか返事が『吉井クロス』に変わってるよ！」

「吉井、静かにしろ！」

「そうね。うるさいわ、明久」

「そ、そういうエリスだってラブレターを貰ってたじゃないか！しかも女の子から！」

「ちよ、明久！今はそれは関係な」

思わず立ち上がると同時に、

『何だつてツ！！？』

と言う、本日二度目の絶叫が教室に響いた。

『須川！相手の確認を急げ！』

『分かってる・・・よしっ、分かった！相手はEクラス代表、中林だ！』

『何！？Eクラス代表までオトしたと言うのか！』

『くっ、流石エリスお姉さま。もう新しい女性を惑わしてしまうなんて・・・！』

『ムツツリーニツ！カメラの用意は！？』

『・・・もう、終わっている・・・っ！』

ああもっ！この教室はアホだらけか！というか須川、お前それどうやって調べた！？

・・・ん？何か今、聞こえるはずのない声を聞いたような・・・？

「つて、美春！？アンタなんでここにいるの！？」

「ああ、美波お姉さまのことが愛しくて、思わず来てしまいました！」

「や、帰りなさいよ」

一人冷静な私。何故だろう。一番取り乱さなきゃならないはずなのに。

「嫌です！エリスお姉さまの新しい女性との門出を、美春が祝わなくて誰が祝うと言うのです！」

「誰も祝わなくていいからね？」

「お前ら、静かにしろといっただろう！」

清水さんを窘めてると、またも鉄人の一括が入る。ナイス鉄人っ！

「清水は自分の教室に戻れ。他の生徒も各自席に着け！出欠確認を続ける」

清水さんは渋々といった風で教室から出て行き、他の奴らも一応席に着いた。

「新田」「とりあえず吉井はクロス」

「布田」「だが神代はどうする？百合は俺達では触れられない禁断の領域だ」

「根岸」「まず吉井をクロス。その後に生暖かく見守ろう」

死ねお前ら。

あの後鉄人が去り、何だかんだあって明久が逃走。  
それを追いかけてクラスの大半分が居なくなり、教室に残ったのは私  
と瑞希、有事に秀吉の四人だけとなった。

「で、どうする？明久の事だから、トイレの個室で読むとかそういう  
ったことは思いつかないでしょう」

「だろうな。おそらくあいつは、下見も兼ねて屋上へ行くはずだ。

そこで待てば問題ないだろう」

「ええ。・・・ククツ、この私に恥をかかせた罪、その身をもって  
償わせてくれる・・・ッ！」

「エリスちゃん・・・口調が違いますよ・・・」

「と言うかお主ら、恋文程度でそこまで目くじらを立てんでも・・・」

秀吉が何かを言ってるが、それは違う。

「違うぞ秀吉。俺は別に、明久にラブレターが来たことに嫉妬して  
るわけじゃない」

「私もよ。別にラブレター自体はどうでもいいの」

「じゃったら・・・」

秀吉が反論しようとするが・・・そういう問題ではないのだ。つ  
まり・・・

「簡単に言つとね、秀吉」

「ああ、俺たちは」

「？」

珍しく、私と有事の声が揃う。

「明久の幸せが、単純にムカつくのよ」

「明久の幸せが、単純にムカつくんだ」

「お主ら・・・存外鬼畜じゃのう・・・」

だっておかしいわよね？何で私はこんなに（女子から告白されたり女子からラブレターを貰ったり女子から同性愛者だと勘違いされたりして）不幸なのに、明久が幸せなのよ。不公平だわ。

フフッ、どうやって明久を絶望させてやろうかしら。

**第十三話 ラブレターなんて都市伝説だと思ってました（後書き）**

最近なぜか百合説が広まりつつある主人公。

いかがでしたでしょうか。感想、評価などありましたらお願いいたします。

第十四話 これ、性別さえ気にしなければハーレムだよな（前書き）

第十四話。着々とハーレムメンバー（同姓）を増やしていく主人公の、運命やいかに。

第十四話 これ、性別さえ気にしなければハーレムだよ

以下の（ ）に当てはまる歴史上の人物を答えなさい

『 楽市楽座や関所の撤廃を行い、商工業や経済の発展を促したのは（ ）である』

姫路瑞希の答え

『 織田信長』

教師のコメント

正解です。

島田美波の答え

『 ちゃんまげ』

教師のコメント

日本にはもう慣れましたか？

この回答を見て先生は少し不安になりました。

吉井明久の答え

『 ノブ』

教師のコメント

ちょっと馴れ馴れしいと思います。

神代エリス

『第六天魔王』

教師のコメント

それは織田信長のことですよ？

SIDE 明久

「やはりここまで来たか、明久」

「吉井君、言うことを聞いてください」

「雄二に姫路さん！エリスまで……！」

下見を兼ねて屋上に行くと、そこには見慣れた顔ぶれが。ラスボスはこの三人か。

やはり、僕の思考は看破されていたようだ。そうか、トイレ。その手があった……！姫路さんの不憫な視線を気にしないようにし、雄二に今回の事件の理由を尋ねる。あいつには霧島さんも居るし、僕に嫉妬する理由なんてないはずなのに。

「明久。俺はただ、純粹に……」

迷いのない瞳で言葉を紡ぐ。

「お前の幸せがムカつくんだよ」

「アンタは最低の友達だ！」

そもそも友達かどうかも疑わしい！雄二の説得は諦め、さっきから俯いて一言も言葉を発さないエリスに声をかける。

「エリスもそうだよ！僕がラブレターを貰ったって、エリスには関係ないじゃないか！」

そもそも中学、高校で同じようなことがあったときはこんな事しなかったし。何か理由があるとしたか思えない。

「……ええ、そうね。確かに瑞希みたいに、嫉妬してどうということではない」

「え、エリスちゃん！」

ようやく口を開いたエリスの隣で慌てふためく姫路さん。姫路さんとは違う？どどういうことだろう。

「でもね明久」

言葉が紡がれることに威圧感が増えていく。何だ！？何がここまですエリスを怒らせてるんだ！？

「私は何故か同姓からモテモテだったのにつ！あんた如きが異性から好かれようなんて百年早いのおっ！！」

「理不尽だっ！」

「え、あれって狙ってやってるんじゃないんですか！？」

愕然として叫ぶ僕と姫路さん。完全にただの八つ当たりだ。

そもそもエリスが同姓から好かれてるのは自業自得だと思う。意識してるかは解ないけど、エリスって女子にはっかかり優しいし。

姫路さんに「瑞希までそんな目で私を見るのっ！？」なんていってるエリスは放っておいて、雄二が話しかけてくる。

「・・・まあ良い。明久。『おとなしく手紙をよこせ』なんて野暮なことは言わねえ。本気でかかって来い」

雄二は学生服の上着を脱ぎ、ネクタイをはずした。改めて見るとやはり喧嘩慣れた体。それはシャドーをするたびに起こる鋭い風切り音を見ても明らかだ。

「姫路、上着を持っていてくれるか？」

「あ、はい」

姫路さんに上着を渡して完全に臨戦体制。ちなみにエリスは天に向かって何かを叫んでいた。

#### SIDE OUT

「ヴウウウウ・・・ハツ！！」

気がついたら、明久が瑞希に上着を渡しているところだった・・・  
・・・え？

「雄二、勝負だ！」

明久が何か叫んでる。無視。

「瑞希、ちよつと明久の上着貸して」

「え？あ、エリスちゃん。お帰りなさい」

はにかむ瑞希が可愛い。イヤ、そんなことよりお帰りなさいって何よ。あなたまで私がトリップしてたと言うの？まあいいや。

「で、明久。このポケットに入ってるラブレターは、私に献上したと見ていいわね？」

「だ、ダメだよっ！戦わないでそれを見るのは反則だよ！」

「お前が馬鹿なだけだろうが！やれ、神代！その手紙を始末するんだ！」

言われるまでもない。雄二に羽交い絞めされてる明久を横目に上の部分を破き、中身に眼を通す。うん、いたって普通の……ん？

「……瑞希、読む？」

「いえ、私は別に……あれ？そ、それってまさか……」

瑞希は戸惑ってるご様子。そうね。そのまさかね。そんな瑞希を見て、あるうことか説得に走ろうとする明久。

「姫路さん」

「えっ！？あ、はい。どうしたんですか？」

「僕には分かってるよ。優しい姫路さんは手紙に込められた人の気持ちや踏みにじることなんてできないってこと。だから、おとなしく」

「手紙を細切れにするんだ」

「違うっ！そうじゃない！雄二、卑怯だぞ！そうやって僕の台詞みたいになぐのは反則だ！」

「はいっ！わかりました！」

「いや『はいっ！』じゃないよ姫路さんってああああっ！そんな丁寧到手紙を裂かなくても！それじゃあもう絶対に読めないよね！？返してっ！僕の幸せな未来と大切なラブレターと六行前の台詞を返

「してえっ！」

明久の叫びもむなしく、廊下に散らばる紙くずラブレターだった物。明久は無残にも崩れ落ちた。

「まさか、本当に姫路が破るとは思わなかった・・・すまん、明久」

そんな明久を見て何か思うことがあったのか、素直に謝る雄二。まあそうよね。普通瑞希があんなことするとは思わないよね。

「ふむ・・・『サイコキネシス念動能力』」

私も流石に気の毒になってきたので、紙くずを集めてやる。持つて行ってやる。

「せめてもの詫びよ」

「ありがとう、エリス。最後の可能性にかけて、この紙くずをつなぎ合わせ」

「未練を断ってあげるわ」

『サイコキネシス念動能力』 フルバースト 全力行使。 ターゲット 対象、 プレススタート 圧縮開始。  
コンプリート 圧縮終了。

「ふう。いい汗かいたわ」

「いやいい汗かいたじゃないよ！何このちっさいの！こんなんなつたらもう読めないじゃん！」

中々ひどい疲労感。その成果は、目の前のこのゴマ粒のようなものだ。無論その正体は私が念動能力で押し固めた紙くず。座標特定の関係上、動くものに使えないけど。これでプラズマとか作れない

かなー。

「明久。あんたは知らないでしょうけど」

「何！？これ、水に濡らしたりすれば直るかな！？」

「私、あなたが幸せだとイラつくの」

「知ってるよアホ！ちくしょー！」

必死の修復作業もむなしく、紙くずだったものは風に流されて飛んでいってしまった。あれを回収するのは不可能だろう。

ドンマイっ、明久！

「そういえば坂本君。手紙の主は誰だか気にならないんですか？」

「ああ。俺は明久の幸せが妨害できたらそれで良い。もっとも」

「まあ、あそこまでやれば気付くわよね？他人の書いた手紙を破り捨てるなんてするはずないし」

「そ、それは、その・・・っ！」

あの心優しい瑞希が、他人の書いた手紙を破ったりするはずがない。ま、そこら辺は明久の言うとおりよね。

「エ、エリス！その話、もっと詳しく」

「あああ吉井君は聞いちゃ駄目ですっ！」

「いっぺっ！」

「瑞希。明久の首が逆を向いてるわ」

「ご、ごめんなさいっ！私、大変なことを・・・」

「まあ気にするな。生かしておいてもあの連中に殺されるだけだろ  
うからな」

『ア〜キ〜〜〜！あんたよくもやってくれたわね〜〜！』

『吉井っ！絶対殺すうっっ！』

『ガンホー！ガンホー！』

いったいこいつは何をしてきたんだろうか。

・・・あ、そういえば。

中林さんの方、どうしよう・・・？

夕暮れの校舎裏。なぜか私は中林さんと向かい合っていた。何この羞恥プレイ。

校舎の窓を見るとギャラリーが生暖かい目で見ている・・・おい待てムツツリーニ。そのカメラは何のために用意してあるんだ。

「あ、あの・・・」

中林さんが口を開く。この場所へ呼び出したのは中林さんだ。大体用件は分かっているとはいえ、自分の思い違いだったらイタい事この上ないので、黙って聞いてる事にした。

「・・・やっぱり、だめ・・・？」

主語のない問い。それだけで分かる私はギャルゲのやり過ぎなのか、分からない明久が鈍すぎるのか。私としては後者だと信じたいが、まあ今はそんなのどうでもいいわけよ。

今、私の頭は一つのことを成し遂げるために最大稼働してる。

告白  
コレ……どうやって断ろうか……

「んー。いや、別にあなたが嫌いって訳じゃないんだけど……」

私としては別に好意を向けられることが嫌な訳ではないので、当然私の答えも曖昧になる。かといって百合ハーレムを作る気もないんだよね。

「ほら、やっぱり私たちって同姓な訳じゃん。それってどう思う？」

ほらソコ。『お前百合じゃないの？』的な視線はやめなさい。何で中林さんもそんな顔してるのよ。そんな『まさかそんなことを言われるとは思ってなかった』みたいに言いたげな表情は何。

「それ、は……」

ここで諦めてくれるようなら嬉しいんだけど……やっぱり、それも行かないわよね。

中林さんは、顔を真っ赤にして、それはもう真っ赤にして、俯きがちに告げた。

「それでも……私は、貴女が好き」

おおー、と言う歓声が周囲から漏れる。黙ってるお前ら。そしてムツツリーニ、カメラのシャッターを連射するのは止めなさい。

「むー……」

さて、こういった告白、実は初めてじゃない。高校に入ってから減ったが、中学のときはそれこそ百合ハーレムができるかと思え

るほど告白されたものだ。

あー、これはやっぱり伝統的な『お友達から始めましょう』で乗り切るか・・・実際、今まで半数以上はそれで乗り切ったし。

「でも・・・」

「ん？」

おや、中林さんもまだ何かあるようだ。

「貴女が嫌だつて言うなら・・・そんな貴方を悩ませてまで、付き合つて欲しいとも思わない」

「おう」

なんて人間のできた娘だ。ちょっと好感度が上が　ゲフンゲフン。いやいや、この私が女の子に興味を持つ訳ないじゃない。

「それでも、私が嫌いじゃないなら」

そこで言葉を切り、

「宏美つて、呼んでくれない？それで友達になりましょう」

「・・・うん、まあ、いいかもね」

その時の笑顔が可愛くて、見惚れてしまったのはここだけの秘密だ。

さて、余談ではあるけれど、あの後に起こった出来事を話しましょうか。

私と宏美が握手を交わした直後、清水さんがクラッカーを鳴らしながら登場。翔子ちゃんもスタンガンを手にして登場。

当然の如く私は逃走を図るも、宏美の『一緒にいてくれないの?』と言う涙目上目使いの前にあけなく撃沈。ふ、私なんかがやるのは威力が違ったわ。

で、逃げる事に失敗した私は、何とか宏美にメアドと携帯番号を託し、意識を放棄。どうやって帰ったのか分からないけど、気がついたら家にいました。

で、携帯を確認して見ると、早速宏美からメール。

『さっきはああいったけど、私は諦めないから。絶対に貴女に好きになってもらう』

………勘弁してください。と言うか諦めてよ。もう一杯いっぱいよ。もはや好意の有無にかかわらず、私を追い回す同姓が四人よ?正気の沙汰じゃないわ。

……明日からは、大変な日々になりそうだ。

………はあ。

第十四話 これ、性別さえ気にしなければハーレムだよね（後書き）

もう無理です。私の精神が。いろいろなものが限界です。そもそもラブコメと言えるかすら怪しいです。

そんなわけですが、感想・評価などありましたらお願いします。

第十五話 文化祭でナンパしてるイケメンは死ね(前書き)

第十五話。 ようやく二巻に突入です。

## 第十五話 文化祭でナンパしてるイケメンは死ね

学園祭の出し物を決めるためのアンケートにご協力ください。

『あなたが今欲しいものは何ですか？』

姫路瑞希の答え

『クラスメイトとの思い出』

教師のコメント

なるほど。お客さんの思い出になるような、そんな出し物もいいかもしれませんね。写真館なんかも候補になり得ると覚えておきます。

土屋康太の答え

『Hな本・・・いや、成人向けの写真集』

教師のコメント

なぜ文章媒体なのにわざわざ言い直すのですか。

吉井明久の答え

『カロリー』

教師のコメント

この回答に君の生命の危機が感じられます。

神代エリスの答え

『同姓に追われる事のない平穏な空間』

教師のコメント

貴女の身に何があつたのか非常に気になりますが、とにかく頑張ってください。

初夏。文月学園には『清涼祭』なるものがある。

要は大規模な文化祭だ。お化け屋敷の準備を始めたり、試験召喚についての展示を行ったりと、どのクラスも賑わっている。

そんな中、我がFクラスといえば

「飛球、燕返しっ！」

「エリス、いくらなんでもボールを三つ投げるのは反側じゃないかな!？」

「違うわね。これは多重<sup>キシユア・ゼルレッチ</sup>元屈折現象だもの。ほら、その証拠にキヤッチャーミットには一つしかボールがないじゃない」

準備もせずに、校庭で野球をして遊んでいた。

「いや、それはエリスが『物質<sup>クリエイト</sup>錬成』で作ったからだよね?あれ、エリスの意思で消せるじゃないか!」

明久の抗議を無視し、キャッチャーである雄二のサインを待つ。かつて神童とまで言われた雄二は、中々すばらしいリードをしてくれるだろう。

『ストレートを』

きた。雄二のサインだ。サインはまず最初に球種。次に

『20球ほど』

投げるボールの数がくる。

「ふ ロールアウト ベースボール 工程完了。全投影、待機」クリア

「ちよつと待て！その背後に浮かんでるボールは何！？」

「何を言ってるのよ明久。ボールが宙に浮くはずが無いでしょう？」

何を馬鹿なことを。これは浮いてるんじゃないなくて、空間に固定してるのよ。

明久を無視して凍結停止しようとする、フリーズアウト

「貴様ら、学園祭の準備をサボって何をしているか！」

「ヤバツ、鉄人じゃない！」

怒髪天を衝く勢いで走り抜けるのは、その鍛え上げた体躯で私たちをボコボコにしようとする悪魔だ。通称は西村、本名は鉄人。逆だった気もするが、今はそんなことを気にしてられない！

「神代、吉井！貴様らがサボりの主犯か！」

「違うわよ！The criminal is AKIHISA responsible! Did you understand!？」  
！（犯人はその馬鹿です！解りましたか！？）

「何て言ってるのかは解らないけど、絶対に僕の所為にしてるだろう！野球を提案したのはのクラス代表の雄二です！」

逃げながら器用に言い訳する明久。ち、英語で言えば誤魔化せる

と思ったのに。そんな時、雄二の姿が眼に入った。

『ストレートを 20球 明久に』

「了解！全投影連続掃射！」  
ベースボールフルオープン

「いただだつ！くそ、僕を生贄にする気だな！？」

さつき待機させて置いた球が残ってて良かった。

「全員教室に戻れ！この時期になってもまだ出し物が決まってるなんて、うちのクラスだけだぞ！」

魂まで震わす鉄人の恫喝が響き、私たちは小汚い教室へと連れ戻される事になった。

「さて。そろそろ春の学園祭、『清涼祭』の出し物を決めなくちゃいけない時期が来たんだが」

Fクラス代表である雄二は床にござを敷いて座る私たちを見下ろしながらそんなことを言ってきた。

「とりあえず、議事進行並びに実行委員として誰かを任命する。そいつに全権を委ねるので、後は任せた」

「うっわー、すごい投げやりねー。心の底からどうでもよさそうなの態度だけで、あいつがどれだけこの行事に興味がないのか良く

分かるというものだ。

まあ、気持ちはわからないでもない。試召戦争であそこまでやる気を出したのは勉強が全てじゃないと証明したかったからだし、別に設備に不満があったわけでもないだろうから。

だとしたら私腹が肥える訳でもない売り上げになど興味も無いのだろう。売り上げは基本的に設備の向上に使われるからね、この学校正直私もそんなに興味がある訳でもない。清涼祭中にはやることもあるしなあ・・・

「んじゃ、学園祭実行委員は島田ということでもいいか？」

と、そんなことを考えてる間に話し合いも佳境のようだ。指名されたのは美波ね・・・あの娘がもうちょつと清水さんを引き付けてくれると助かるんだけどなあ。

「え？ウチがやるの？うん・・・ウチは召喚大会に出るから、ちょつと困るかな」

「雄二。実行委員なら、美波より姫路さんの方が適任なんじゃないの？」

「え？私ですか？」

そんなことを言う明久。なんともおめでたい頭してるわね・・・

「無理ね。瑞希だと全員の意見を意見聞いてるうちに時間切れになるわ」

寝そべったまま眠たげに返事をしてやる。ああ面倒臭き清涼祭。

「それにね、アキ。瑞希も召喚大会に出るのよ」

「え？そうなの？」

「はい。美波ちゃんと組んで出場するつもりなんです」

そういつて小さい手を握りしめる瑞希。癒されるなあ・・・  
それにしても召喚大会、ね。優勝商品は『白金の腕輪』と如月八  
イランドのプレオープンペアチケット。どっちもキナ臭いわねえ・

そんなことを思いながら瑞希を見つめていると、それを曲解した  
人物がやってきた。

(ふふふ・・・エリスお姉様。お悩みのようですね?)  
「っ!!」

気がつくのと、後ろから清水さんが話しかけてきた。まさかこんな  
近づかれるまで気付かないなんて・・・なんて無駄な技術。

向こうが耳元に小声で話してきたので、こっちも空気を呼んで声  
を落とす。

(・・・何よ清水さん。美波を追っかけておかなくていいの?)  
(だから美春と・・・いえ、今はいいでしょう。お姉さまが薄汚い  
豚と親しげに話す気配を感じてやってきたのですが、別にそんなこ  
ともなかったようです)

後一秒でも早く来ていたら、明久が赤く染まっていたことだろう。  
そんなことよりも、私が悩み?今のところそんなことはないんだけ  
ど・・・

そんなことを考えていると、清水さんが姫路を指していった。

(隠さずとも良いのです。ズバリあの女性こそ、エリスお姉さまの  
想い人ですね?)

(はあ?)

何を言い出すんだろうかこの娘は。産まれて・・・と言うか生まれて？から一度も女性に恋慕を抱いた覚えは無いわよ？

(いえ、美春には分かっています。あの方がお姉さまとペアを組む事に憤りを感じているのでしょうか?)

(や、別にそんなことは・・・)

(そこで提案です。私としても、お姉さまが家畜などではないといえ、私以外の人間と組むことには抵抗があります)

(聞きなさいよ)

もはやこつちの話聞いてすらいない。というか、家畜って男の事なのだろうなあ。

(なので、私と共に召喚大会に出ただけないでしょうか?)

(えー・・・?面倒臭いからパスしたいんだけど・・・)

(ちなみにエントリーはもう済ませてあります)

(拒否権はなしかつ!)

本当恐ろしい行動力だ。

(それでは私はこれで)

(あ、うん・・・)

そして音もなく去っていった。冷静だとムツツリーニみたいね・・・いつも殺気立ってるから目立つけど。

清水さんがいなくなつて黒板を見ると、

『候補?・・・吉井』

『候補?・・・明久』

と書いてあった。

何の候補かは知らないけど、何で両方とも明久なんだろうか。

「ほらほら、アキってば。そんなことより、ウチとアンタでやることになったんだから前に出て議事をやらないと」

「なんだか僕はいつもこんな貧乏くじを引かされてる気がするよ……」

ああ、清涼祭の実行委員か。確かに貧乏くじねえ……ま、明久らしいっちゃ明久らしいけど。

(吉井明久……お姉さまと共に実行委員だなんて、許せません……！)

後ろから聞こえてくる怨嗟の声は気のせいだろう。まあ何にせよこれから清涼祭の出し物決め……面倒くさい。ああ、瑞希のために頑張るのもいいかもしれないなあ……

そんなことを考えながら、私はいつの間にか眠っていた。

S I D E 明久

「エリス。エリス、起きて！」

気が付いたらエリスが深い眠りについてた。みかん箱の上で眠るなんてなんて器用なやつなんだ。

「……ん。あ……出し物、決まったの？」

雄二のように面倒臭そうなエリスの声。学園最中にはやる事があるっていつてたし、実際クラスの出し物にはあまり興味はないんだらう。

「ん。中華喫茶だとさ。エリスはホールと厨房、どっちが良い？」

一応エリスには聞いておく。雄二は別にいいや。アイツはアイツで適当にやるだらう。

「んー、どっちでもいいけど・・・たぶんちよくちよく抜ける事になるだらうし、ホールにしとく」

「わかった。エリスはホール班、と」

手帳にメモしておく。僕の記憶力じゃ覚えてられないし。

「それじゃ私は厨房班に」

「ダメだ姫路さん！キミはホール班じゃないと！」

危ない。流石にクラスの設備がかかっているのに客が全員食中毒なんて事態はシャレにならない。

「明久、ファインプレーよ」

「・・・！！（コクコク！）」

エリスとムツツリーニからのアイコンタクト。あの二人はその威力を身をもって知ってるしね。心なしか、一番の犠牲者である雄二も寝ながら震えているように見える。

「え？吉井君、どうして私はホールじゃないとダメなんですか？」

自覚のない必殺料理人は首を傾げる。

本当のことを話すのは簡単だけど、それでは彼女を傷つけてしま  
う。

「あ、えーっと、ほら、姫路さんは可愛いから、ホールでお客様  
に接した方がお店として利益が痛っ！み、美波！僕の背中ではサンド  
バックじゃないよ!？」

「か、可愛いだなんて……。。吉井君がそう言うなら、ホ  
ールでも頑張りますね」

出来ればホールだけで頑張って欲しい。

「アキ、ウチは厨房にしようかな」

「うん。適任だと思う」

「……」

「それなら、ワシも厨房にしようかの」

「秀吉、何を馬鹿なこと言ってるのさ。そんなに可愛いんだから、  
もちろんホールに決まってみぎああっ！み、美波様！折れます！腰  
骨が！命にかかわる大切な骨が！」

「……ウチもホールにするわ」

「そ、そうですね……それが、いいと、思います……」

こんなドタバタの状態で、僕達Fクラスの人並みの学園生活をか  
けた学園祭は幕を開けることになった。

第十六話 他人の不幸は蜜の味。自分の不幸は気にしない（前書き）

十六話。もはや主人公は自らハーレムを形成しようとしてるのではないかとさえ思えてきました。

## 第十六話 他人の不幸は蜜の味。自分の不幸は気にしない

問 以下の問いに答えなさい

『バルト三国と呼ばれる国名を全て挙げなさい』

姫路瑞希の答え

『リトアニア エストニア ラトビア』

教師のコメント

その通りです。

土屋康太の答え

『アジア ヨーロッパ 浦安』

教師のコメント

土屋君にとっての国の定義が気になります。

神代エリスの答え

『遠坂 間桐 アインツベルン』

教師のコメント

それは聖杯戦争の御三家です。

いつも思うのですが、わざとやってるでしょ。

吉井明久の答え

『香川 徳島 愛媛 高知』

教師のコメント

正解不正解の前に、数が合っていない事に違和感を覚えましょう。

「アキ、エリス。ちょっと良い？」

帰りのHRも終わった後。美波がそんなことを言いながら私たちを呼び止めた。

「ん、何か用？」

「あふ・・・どうかしたの？」

「うん。どつちかかって言うかと相談なんだけど・・・」

「相談？僕でよければ聞かせてもらうけど」

相談、ねえ・・・あんま景気の良い話じゃなさそうだ。そう思いつつも、真剣そうな顔なので頷いておく。

「うん。ありがと。多分、二人が言うのが一番だと思うんだけど

その、やっぱり坂本をなんとか学園祭に引っ張り出せないかな？」

「んー、無理じゃないかしらね」

「うーん、それは難しいなあ・・・さつきも言ったけど、雄二は興味の無い事には徹底的に無関心だからね」

私もだけど。私自身は設備のことはどうでもいいのよね。

「でも、アキが頼めばきつと動いてくれるよね？」

「え？別に僕が頼んだからって、アイツの返事は変わらないと思うけど」

「うっん、そんなことない。きつとアキの頼みなら引き受けてくれるはず。だって」

「そりゃ確かに、よくつるんではいるけど、だからと言って別に」

「アンタたち、愛し合ってるんでしよう？」

「もう僕婿にいけないっ！」

明久。そんなことで婿にいけなかったら、私もう一生お嫁にいけないわ。

「誰が雄二なんかと！だったら僕は、断然秀吉の方がいいよ」

「・・・あ、明久？」

と、偶然側に居た秀吉が動きを止める。ナイス明久。これが主人公補正ってやつね。

「そ、その・・・お主の気持ちは嬉しいが、そんな事を言われてもワシらには色々と障害があると思うのじゃ。その、ホラ、歳の差とか・・・」

「落ち着きなさい秀吉。恋愛において、年齢は障害足りえないわ」

「え、エリス・・・」

「違う！突っ込むところはそこじゃない！秀吉もそんな感動しないですよ！そもそもさっきの言葉のアヤで！」

ふ、明久も同姓に愛される苦しみを味わうがいいわっ！秀吉が男かどうかは怪しいけど、まあそこは妥協。

「何とかできないの？このままじゃ、喫茶店は失敗に終わるような・・・」

そうねえ。瑞希のためにも設備は何とかしたいけど・・・

どうしようかと考えてるとき、いまだ顔の赤い秀吉が話しに加わった。

「ところで、お主らは何の話をしてるのじゃ？そこまで思いつめた顔をすると、随分と深刻な話のようじゃが」

「深刻って程じゃないんだけど、喫茶店とクラス設備の話で」

「アキ、そうじゃないの。本当に深刻な話なのよ……」  
「ん？どういうこと？」

何か含みのある美波の言い方。そういえば設備に不満があるわけでもないのに、ここまで熱心な理由も気になる。

「本人には誰にも言わないで欲しいって言われてたんだけど、事情が事情だし……けど、一応秘密の話だからね？」

「う、うん。わかった」

「りょかい」

「実は、瑞希なんだけど」

そこでいったん言葉を切る美波。

「姫路さん？姫路さんがどうかしたの？」

「あの子、このままだと転校するかもしれないの」

「ほえ？」

「瑞希が、転校？」

そんないきなり転校が決まるなんて。やっぱり親の事情……いや、美波は『このままだと』と言った。ってことはクラス設備の問題？まずい、心当たりが多すぎる。

「美波。もうちょつと話を詳しく・・・」

「む、待つんじゃエリス。明久が処理落ちしかけてるぞ」

「はあ？つたく、こんなときに！」

「このバカ！不測の事態に弱いんだから！」

ガクガクと明久の肩を揺する秀吉。やばい、目が虚ろだ。

「秀吉・・・モヒカンになった僕でも、好きでいてくれるかい・・・？」

「・・・どういう処理をしたら、瑞希の転校からこつという反応が得られるねかしら」

「ある意味、稀有な才能かもしれんおう」

「そもそも秀吉があなたの事を好きという前提の元の発言なのね」

全員が微妙な眼で明久を見つめる中、明久が唐突に声を上げた。

「美波！姫路さんが転校って、どういうことさ！」

「どうもこつも、そのままの意味。このままだと瑞希は転校しちゃうかもしれないの」

「このままだと・・・？」

「島田よ。その姫路の転校と、さっきの話が全然つながらないんじゃないんじやが」

小首を傾げる秀吉に、私が説明してあげる。

「おそらく問題は『Fクラス的环境』ね。簡単に言えば、親が『家の娘はやらん！』って言ってるのと同じよ」

「ってコトは、転校は両親の仕事とかじゃなくて」

「そうね。純粹に設備の問題って事になるわ」

「それに瑞希は、身体も弱いから・・・」

「そうだよ。それは一番マズいよね・・・」

ウチのクラス、設備だけじゃなく教室そのものがオンボロだしね。同じ校舎とは思えないほどよ。

「瑞希も対抗して、『召喚大会で優勝してFクラスを見直してもらおう』とか考えてるみたいなんだけど、やっぱり設備をどうにかしないと」

ふむ。Fクラスに競争相手がいないと思われてるのも原因の一つでしょうし、あながち見当違いでもないわね。

「わかった。そういうことなら、なんとしても雄二を焚き付けてやるさ！」

「そうじゃな。ワシもクラスメイトの転校と聞いて黙っておれん」  
「それじゃ、まずは雄二に連絡を取らないとね」

「んー。私も別ルートから探して見るわ」

私はポケットから携帯を取り出し、ある人物の番号を呼び出す。

P r r r r

『もしもし』

「ああ、もしもし。突然だけど、雄二の居場所知らない？」

『・・・うん。今 見つけた』

可愛そうに。見つかったようだ。

「えっと、今どこにいる？」

『・・・名前で読ませてくれるなら、教えてあげてもいい』

「む……」

まさかここでそんな条件を出されるとは。ぬう……背に腹は代えられない、か……はあ。

「わかったわ。取引をしましょう。名前で呼び捨てて、今度一緒に出かけてあげるから、場所を教えて今回は雄二から手を引いてくれない？」

『……分かった。交渉成立』

これはデートではない。断じてない。一緒に出かけるだけだ。

「じゃあ翔子ちゃ　翔子。雄二の居場所を教えてください」

聞きだした現在の位置からこれから行くであろう状況に当たりをつけ、先に教室を出たであろう明久の後を追った。

「さて。覗きとして捕獲され翔子に引き渡されなくなったら、うつ伏せに寝て両手を後ろに組みなさい」

「開口一番ソレかよ……」

「と言うかそれ僕もやるの？」

という訳で、体育館裏の女子更衣室にやってくる。男二人が女子更衣室の物陰で小さくなってる姿は、傍から見ると変態以外の何物でもない。

「うっさいわね。それよりもさっさとしないと優」

ガチャッ

「えーっと・・・あれ？Fクラスの問題児コンビ？ここ、女子更衣室だよな？」

「やあ木下優子さん。奇遇だね」

「秀吉の姉さんか。奇遇じゃないか」

「子が来 遅かったか。久しぶりね、優子」

「あ、うん。奇遇だね。エリスも久しぶり」

音を立てて開くドアから入ってきたのは、ご存知美少女姉妹きょうだいの姉、木下優子。ああいや違う、優子ちゃん。四人揃ってはっはっは、と和やかに笑う。

「先生！覗きです！変態です！！」

「逃げるぞ明久！」

「了解っ！」

「いつてらっしやいー」

誤魔化せない事を悟り、小窓から外へと躍り出る二人を見送る。  
大変ねえ。

『吉井と坂本、それに神代だと！？またあいつらかつ！』

「ちよつと待ちなさい鉄人。今の言葉はどういう意味かしら」

私、何で女子なのに女子更衣室を覗いた事になってるんだらうか。  
場合によっては（明久が）テロ起こすわよ。清涼祭用の花火使って。

「ったく・・・ああ優子　ちゃん。騒がせて悪かったわね。それじゃ」

「待ちなさい」

もう用も無いため立ち去ろうというとき、優子ちゃんが襟首をむんずと掴んできた。

「何よその『優子ちゃん』っての。気持ち悪いわね。敬称をつけるなら様をつけて、それが嫌なら敬称なんてつけなくていいわ」

「えー。私に腐女子の知り合いなんて居ませんー」

「腐女子言っな」

始めて木下家に遊びに言ったときのあの絶望は忘れられない。この学校やけに百合が多いから、やっとそうでない人に出会ったと思つたら実は腐ってたなんて・・・この学校、常識人は居ないのかしら。

「だってー。あんま優子ちゃんと親しくしてるとう、翔子から呪いの視線が・・・こないだの交渉のときは挑発の意味もあったんだけど」

「・・・同情するわ」

「そうか。姫路の転校か・・・」

あれから少しして、Fクラスに帰ったときには全員が揃っていた。

「そうなるよ、喫茶店の成功だけでは不十分だな」

オンボロの教室を見回して雄二が告げる。

「不十分？どうして？」

「アンタもたまには自分で考えなさいよ」

明久のストレートすぎる疑問に、溜息をつきながらも答えてやることにする。最近説明役が増えてきた気がするなあ……

「今回の問題点は3つに絞れるわね。一つは快適でない学習環境、つまりごみやみかん箱の事だけど……それはまあ、喫茶店の利益で何とでもなるわ」

そう言って、いつかのように人差し指を立ててみせる。いざとなれば私の貯金を切り崩すなりなんなりすればいいし。毎月十万は残ってるから、ここ数年は貯まる一方だ。もうちょっと控えめにすればよかったかも。

「二つ目は瑞希の健康を害する教室。学習環境が悪すぎる、って事ね」

「一つ目は道具で、二つ目は教室自体ってこと？」

「そうね。これに関しては、喫茶店程度の利益じゃ改善は厳しい。学校側の協力が不可欠になるわ」

そう言いながら、二本目の指を立てる。その気になれば出来るかも知れないけど、法に触れまくる方法だから却下。

「最後。馬鹿ばっかりのクラスメイト……つまり競争相手が居ない。あんたも、周りに馬鹿しか居ないと勉強しないでしょ」

「う……確かに」

三本目の指を立てつつ、密かに嘆息する。挙げてみると随分と問題だらけだ。

「むう……一つ目だけならともかく、二つ目と三つ目は難しいのう」

「そうでもないさ。一つ目は喫茶店の利益でなんとかなるし、三つ目は姫路と島田で対策を練っているんだろ？」

ああそうか。そういえば、美波と瑞希も召喚大会に……ああ。私も出なきゃいけないんだった……

「この前、瑞希に頼まれちゃったからね。『どうしても転校したくないから協力して下さい』って。召喚大会なんて見世物にされるまけみたいで嫌だったけど、あせこまで必死に頼まれたら、ね？」

ああ、美波が優しそうな顔をしてるなあ。珍しい……。……  
……はっ。今何か、得体の知れないさつきを感じた気がする。

さて、そう考えると私が出る意味も出てくるわね。翔子ち……翔子はチケット目当てで出てくるだろうから、そっちを倒す事に集中しようか……。そろそろあっちも動くだろうし、ね。

「で、坂本。それはそうと、二つ目の問題はどつするの？」  
「どつするも何も、学園長に直訴したらいいだけだろ？」

当たり前のように言う雄二。私もそう思う。

「それだけ？ 僕らが学園長に言ったくらいで何とかしてくれるかな？」

「あのね。ここは曲がりなりにも教育機関よ？いくら方針とは言え、生徒の健康に害を及ぼすような状態であるなら、改善要求は当然の権利じゃない」

明久と雄二が頼むなら尚更。この二人は無駄に悪名が轟いてるし。悪い意味で有名人だから、あの妖怪も無下には断れないでしょ。対面とか気にして。

「それなら、早速学園長に会いに行こうよ」

「そうだな。学園長室に乗り込むか。秀吉と島田は学園祭の準備計画でも考えておいてくれ」

「私も行きましようか。あの妖怪には少し用があるし」

私たちは学園長室を目指して教室を後にした。

第十六話 他人の不幸は蜜の味。自分の不幸は気にしない（後書き）

いかがでしょうか。感想、評価などありましたらお願いします。

第十七話 妖怪とは妖しいに怪しいと書く、とてもアヤしい存在だ（前書き）

第十七話。今回は少し、いつもより長くなりました。まあそれでも短いですが。

というか、主人公が最近暴走気味です。

## 第十七話 妖怪とは妖しいに怪しいと書く、とてもアヤしい存在だ

問 以下の問いに答えなさい

『水泳の個人メドレーの種目を答えなさい』

姫路瑞希の答え

『1、バタフライ2、背泳ぎ3、平泳ぎ4、自由型』

教師のコメント

正解です。流石ですね、姫路さん。

解答は合ってますが、瑞希さんは実際に泳ぐのが苦手なようです。水泳は全身運動で、心肺機能を鍛えることにも役立ちます。

苦手だからと言って尻込みせず、積極的に水泳に参加しましょう。

吉井明久の答え

『アニソンメドレー、ナツメロメドレー、鳩サブレ』

教師のコメント

鳩サブレは先生も好きです・・・

神代エリスの答え

『まずバタフライで息継ぎのために開かれる瑞々しい唇を観察し、背泳ぎで思い切り反らされる張りのある胸元を眺め、平泳ぎで強調される太ももに息を呑み、最後に一生懸命に泳ぐその姿を見て悶える』

教師のコメント

先生は時々、あなたが何を考えているのか分からなくなります。

SIDE 明久

『・・・賞品の・・・として隠し・・・』  
『・・・こそ・・・勝手に・・・如月ハイランドに・・・』

新校舎の一角にある学園長室の前まで来ると、扉の向こうから誰かが言い争っている声が聞こえてきた。

賞品？如月ハイランド？何の話をしてるんだろう。

「どしたの、明久」

「いや、中で何か話をしているみたいなんだけど」

「そうか、つまり中には学園長が居るといっわけだな。無駄足にならなくて何よりだ。さっさと中に入るぞ」

取り込み中かどうかは向こうが判断するってことか。雄二の言うことももつともだ。ひとまずは折角来たんだし、用件だけは伝えてみようか。

「失礼しまーす！」

学園長室の立派なドアをノックして、僕と雄二は中にずんずん入っていった。ちなみにエリスは息を止め、『スケルトンボデー身体透過』を発動して中に紛れ込むらしい。何でかは分かんないけど。

「本当に失礼なガキどもだねえ。普通は返事を待つもんだよ」

室内で私たちを迎えたのは長い白髪が特徴の藤堂カヲル学園長だ。試験召喚システム開発の中心人物でもある。学園長として、第一声が『ガキども』ってどうなんだろう。

「やれやれ。取り込み中だというのに、とんだ来客ですね。これでは話を続けることも出来ません。・・・まさか、貴女の差し金ですか？」

眼鏡を弄りながら学園長を睨み付けたのは教頭の竹原先生だ。鋭い目つきとクールな態度で一部の女子生徒には人気が高い。僕個人としてはあまり好きになれない先生だけだ。

「馬鹿を言わないでくれ。どうしてこのアタシがそんなセコい手を使わなきゃいけないのさ。負い目があるというわけでもないのに」「それはどうだか。学園長は隠し事がお得意のようですから」

僕らにはよく分からないやり取りが行われている。もしかして、出直してきたほうがいいのか？

「さっきから言ってるように隠し事なんて無いね。アンタの見当違いだよ」

「・・・そうですか。そこまで否定されるならこの場はそういう事にしておきましょう」

そう告げると、竹原先生は部屋の隅に一瞬視線を送り、

「それでは、この場は失礼させていただきます」

踵を返して部屋を出て行った。何かを確認していったようだけど、

何だったんだろう。

「んで、ガキども。アンタらは何の用だい？」

「今日は学園長にお話があつて来ました」

教頭との会話を中断されたことを気にもせず、話を振ってきた学園長に話を切り出す雄二。まさかあの雄二が敬語を使っているなんて。

「私は今それどころじゃないんでね。学園の経営に関することなら、教頭の竹原に言いな。それと、まずは名前を名乗るのが社会の礼儀つてモンだ。覚えておきな」

「失礼しました。俺は2年F組代表の坂本雄二。それでこっちが

「

こんな横柄な婆さんに礼儀を説かれるなんて、世も末だと思つていと、雄二が僕の紹介までしていた。

「二年生を代表するバカです」

「ほう……。そうかい。アンタたちがFクラスの坂本と吉井かい」

「ちょっと待って学園長！僕はまだ名前を言つてませんよね!？」

あの紹介で僕の名前が連想されたという事実には涙が出そうだ。

「気が変わったよ。話を聞いてやるうじゃないか」

「ありがとうございます」

「礼なんか言う暇があつたらさっさと話しな、ウスノロ」

「わかりました」

それにしてもおかしい。こんな教育者として間違つてるような婆

さんに口汚く罵倒されているのに、雄二の言動や態度は落ち着いたままだ。コイツがこんな大人なヤツだったなんて。

「Fクラスの設備について改善を要求してきました」

「そうかい。それは暇そうで羨ましい事だね」

「今のFクラスの教室は、まるで学園長の脳みそのように穴だらけで、隙間風が吹き込んでくるような酷い状態です」

あ、言動が綻び始めた。

「学園長のように戦国時代から生きている老いぼれならともかく、今の普通の高校生にこの状態は危険です。健康に害を及ぼす可能性が非常に高いと思われます」

雄二もそうとうキレてるらしく、丁寧な口調の中に危険な言葉があった。うん、やっぱり雄二はこうでなくっちゃね。

「要するに隙間風の吹き込むような教室のせいで体調を崩す生徒が出てくるから、さっさと直せクソバア、というワケです」

そんな慇懃無礼な説明を受け、黙り込んでしまった学園長。うう、やっぱり怒ってるかな？

「あの、学園長・・・？」

「・・・ふむ、丁度いいタイミングさね・・・」

「え？」

今、小声で何か呟いたような・・・気のせいかな？

「よしよし。お前たちの言いたいことはよくわかった」

「え？それじゃ、直してもらえんんですね！」

うん、やっぱり雄二とエリスの言ったとおりだ。ここも曲がりなりに教育機関なんだなあ。生徒の健康のためなら動いてくれるみたいだ。良かった良かった。

「却下だね」

「雄二、このババアをコンクリに詰めて捨ててこよう」

「・・・明久。もう少し態度には気を遣え」

はっ！？つい本音が！

「まったく、このバカが失礼しました。どうか理由をお聞かせ願えますか、ババア」

「そうですね。教えて下さい、ババア」

「・・・お前たち、本当に聞かせてもらいたいと思ってるのかい？」

失礼な。当たり前じゃないか。

「理由も何も、設備に差をつけるのは学園の教育方針だからね。ガタガタ抜かすんじゃないよ、なまっちろいガキども」

こ、このババア・・・！

「それは困ります！そうになると、僕らはともかく身体の弱い子が倒れて、」

「と、いつもなら言っているんだけどね」

僕の台詞を遮り、学園長が顎に手を当てて話す。

「可愛い生徒の頼みだ。こちらの頼みも聞くなら、相談に乗ってやるんじゃないか。そこで隠れてるガキにもね」  
「・・・まさか気付いてたとはね」

学園長の言葉に、エリスが姿を表した。よく今まで息が持ったなあ。

「清涼祭で行われる召喚大会は知ってるかい？」

「ええ、まあ」

「じゃ、その優勝賞品は知ってるかい？」

賞品なんてあったのか。どうせ僕は出場することもないから知らなかった。

「確か、正賞に賞状とトロフィー、それに『白金の腕輪』。副賞は『如月ハイランドプレオープンペアチケット』のはずね」  
「ふむ。よく知ってるじゃないか」

フン、と鼻を鳴らしながらエリスが冷めた眼で返答を返していた。それにペアチケットと言う言葉に雄二が反応してたのは何でだろう。

「実は副賞のチケット、良からぬ噂があって出来れば回収したいのさ」

「回収？それなら、賞品にださなければいいじゃないですか」

「そうできるならしたいさ。けどね、この話は教頭が進めたとは言え、文月学園として如月グループと行った正式な契約だ。今更覆すわけにはいかないだよ」

「契約する前に気付いて下さいよ。学園長なんだから」

「うるさいガキだね。白金の腕輪の開発で手一杯だったんだよ。それに、悪い噂を聞いたのはつい最近だしね」

「明久の言う通りね。その『良からぬ噂』って何よ？大したことじゃないでしょうけど」

エリスが、またも蔑むような眼で学園長を射抜く。何だろう、学園長が嫌いなんだろうか？それにしたって、こんなにストレートに敵意を剥き出しにするようなヤツじゃなかったと思うんだけど。

「如月グループは如月ハイランドに一つのジnkクスを作ろうとするのさ。『ここを訪れたカップルは幸せになれる』ってジnkクスをね」

「？そのどこが悪い噂なんです？良い話じゃないですか」

「そのジnkクスを作る為に、プレミアムチケットを使って来たカップルを結婚までコーディネートするつもりらしい。企業として、多少強引な手段を用いてもね」

「な、なんだと!？」

突然雄二が大声を上げる。ビックリしたなあ、もう。

「どうしたのさ、雄二。そんなに慌てて」

「慌てるに決まってるだろう！今ババアが言ったことは、『プレオ—プンプレミアムチケットでやってきたカップルを如月グループの力で強引に結婚させる』って事だぞ!？」

「いや、別に言い直さなくても分かるわよ」

こんなにうるたえてる雄二は始めて見た。ちょっと新鮮。

「そのカップルを出す候補が、我が文月学園ってわけさ」

「くそつ。うちの学校は何故か美人揃いだし、試験召喚システムという話題性もたっぷりだからな。学生から結婚までいけばジnkクスとしては申し分ないし、如月グループが目をつけるのも当然ってこ

とか」

雄二までも妙な独白を始める。何なんだ一体。

「ふむ。流石は神童と呼ばれていただけはあるね。頭の回転はまずまずじゃないか」

雄二についてやけに詳しいな。僕の名前もすぐに出てきたし。

「雄二、とりあえず落ち着きなよ。如月グループの計画は別にそこまで悪いことでもないし、第一僕らはその話を知っているんだから、行かなければ済む話じゃないか」

「・・・絶対にアイツは参加して、優勝を狙ってくる・・・行けば結婚、行かなくても『約束を破ったから』と結婚・・・俺の、将来は・・・!」

雄二の目は虚ろだ。一体何があったんだ？霧島さんに『チケットがあれば一緒に行つてやる』とでも安請合いたんだらうか。

「ま、そんなワケで、本人の意思を無視して、うちの可愛い生徒の将来を決定しようつて計画が気に入らないのさ」

「つまり交換条件ってのは」

「そうさね。『召喚大会の賞品』と交換。それができるなら、教室の改修くらいしてやるうじゃないか」

ふむ、優勝賞品と交換か。それなら、

「無論、優勝者から強奪なんて真似するんじゃないよ。譲ってもらうのも不可だ。私はお前たちに召喚大会で優勝しろ、と言ってるんだからね」

「ぐっ・・・僕たちが優勝したら、教室の改修と設備の向上を約束してくれるんですね？」

「何を言ってるんだい。やってるやるのは教室の改修だけ。設備についてはうちの教育方針だ。変える気はないよ」

やっぱりそうきたか。こんな取引で設備を導入したら、他のクラスに示しがつかないしなあ・・・

「そこをなんとかオマケして設備の向上をお願いできませんか？僕らにとっては教室の改修と同じくらい設備の向上も重要なんです」

「それで？」

「もしも喫茶店がうまくいかずに設備の向上が危うかったら、そっちが気になって大会に集中できずに僕らも学園長も困ったことに・・・」

「なんだ、それだけかい。ダメだね。そこは譲れないよ」

「でも！設備の向上を約束してくれたら大会だけに」

「明久、無駄だ。ババアに譲る気が無いのは明白だ。この取引に応じるしか方法はない」

いつの間にか復活した雄二が僕の肩をたたく。

・・・くそつ。悔しいけど、僕達には最初から取引に応じる選択肢しかなかったってことか。

「・・・わかりました。この話、引き受けます」

「そうかい。それなら交渉成立だね」

「ちよっと待ちなさい。質問があるわ」

「俺もだ。一つ提案がある」

話も纏まり、これから帰ろうと言うときに二人が学園長に声をかけた。

「なんだい？言ってみな」

「私はもう、別の生徒と組んで出場することが決まっているのだけど。その場合、その生徒を説得して優勝賞品を譲ってもらえればいいわけ？」

そうなの？てっきりエリスも、こういう行事には興味がないものだと思つてただけだ。

「いいや、駄目さね。『あなた達』の力で優勝しなければ、取引は認められないよ」

「・・・ふうん？やっぱり、ね」

エリスが目を細くして、面白くなさそうに学園長を眺める。この返答は予想済みだったみたいだ。

「で、アンタは何さね？」

「召喚大会は二対二のタッグマッチ。形式はトーナメント制で、一回戦が数学だと二回戦は化学、といった具合に進めていくと聞いている」

そりゃあ、ずっと同じ科目で戦い続けてたら地味だしね。これ一応宣伝行事だし。

「それがどうかしたのかい？」

「対戦表が決まったら、その科目の指定を俺にやらせてもらいたい」

そう告げる雄二は、なぜか学園長と、エリスを試すような鋭い目つきでみていた。何か気になることがあったのだろうか？

「ふむ・・・いいだろう。点数の水増しとかだったら一蹴していたけど、それくらいなら協力しようじゃないか」  
「・・・ありがとうございます」

「またも面白くなさそうに鼻を鳴らすエリス。それを見て、雄二の目は更に鋭くなった。どうしてそんな顔をするんだろう。良く分からないやつだなあ。」

「さて。そこまで協力するんだ。当然召喚大会で、優勝できるんだろっかね？」

「無論だ。俺たちを誰だと思っている？」

雄二の不敵な笑み。これは試召戦争のときにも見せた、やる気全開の表情だ。

「絶対に優勝して見せます。そっちこそ、約束を忘れないように！」  
「それじゃ、ボウズども。任せたよ」

「「おっよっ！」」

その後。

エリスが学園長室に残ると言ったときの表情が、やけに気になった。

第十七話 妖怪とは妖しいに怪しいと書く、とてもアヤしい存在だ（後書き）

いかがでしたでしょうか。

感想、評価などありましたらお願い致します。

第十八話 小学校の友達とかと、街中で会うと何か気まずい（前書き）

十八話。題名が本編と関係なくなってきた今日この頃です。ノリでオリキャラが出てきてしまいました。

## 第十八話 小学校の友達とかと、街中で会つと何か気まずい

学園祭の出し物を決める為のアンケートにご協力下さい

『喫茶店を経営する場合、制服はどんなものが良いですか？』

姫路瑞希の答え

『家庭用の可愛いエプロン』

教師のコメント

いかにも学園祭らしいですね。コストをかからないですし、良い考えです。

土屋康太の答え

『スカートは膝上15センチ、胸元はエプロンドレスのように若干の強調をしながらも品を保つ。色は白を基調とした薄い青が望ましい。トレイは輝く銀で照り返しが得られるくらいの物を用意し裏にはロゴを入れる。靴は5センチ程度のヒールを』

教師のコメント

裏面にまでびっしりと書き込まなくても。

吉井明久の答え

『ブラジャー』

教師のコメント

ブレザーの間違いだと言っています。

神代エリスの答え

『青いドレスに銀の騎士甲冑とか、黒の皮鎧に赤い外套とか』

教師のコメント

それはコスプレだと受け取って宜しいのでしょうか？

「いつもはただのバカに見えるけど、坂本の統率力は凄いわね」

「ホント、いつもはただのバカなのにね」

「そんなバカバカと連呼しなさんなって・・・」

清涼祭初日の朝。

私たちのFクラスはいつもの小汚い様相を一新して、見事なまでに中華風の喫茶店に姿を変えていた。

「このテーブルなんて、パツと見は本物と区別がつかないよ」

教室内のいたる所に設置されてるテーブル。実はこれ、Fクラスのみかん箱だったりする。このクラス、無駄な特技を持つてる人間が多いからねえ。

「あ、それは木下君が作ってくれたんですよ。どこからか綺麗なクロスを持ってきて、こう手際よくテキパキと」

ああ、これが噂の秀吉クオリティか。姉も姉なら、妹も妹ね。いや、弟だっけ？まあいいや。

「ま、見かけはそれなりの物になったがの。その分、クロスを捲る

とこの通りじゃ」

秀吉がクロスを捲る、と・・・返事が無い。ただのみかん箱のようだ。

「これを見られたら店の評判はガタ落ちね」

「きつと大丈夫だよ。普通の人はこんなところまで見たりしないし、見たとしてもその人の胸の内にはまっておいてもらえるさ」

まあ、それは営業妨害よね。そんなこと、起こさせやしないけど。

「室内の装飾も綺麗だし、これならうまくいくよね？」

まあ、学園祭の出し物としては十二分に完成度は高いわよね。これなら、設備も何とかなるでしょう。

「・・・・・・飲茶も完璧」

「おわっ」

む。気がついたらムツツリーニが私たちの後ろに立っていた。相変わらず存在感を消すのが巧い友人だ。コイツといい清水さんとい・・・普通は必要ない才能だと思っただけだね。

「ムツツリーニ、厨房の方もオーケー？」

「・・・・・・味見用」

そういつてムツツリーニが差し出したのは、木のお盆。そして上には陶器のティーセットと美味しそうな胡麻団子が乗っていた。パツと見た限りじゃどれも美味しそうだ。

「わぁ・・・美味しいそう・・・」

「土屋、これウチらが食べちゃっていいの？」

「・・・（コクリ）」

「では、遠慮なく頂こうかの」

瑞希、美波、秀吉の三人は出来立てで暖かい胡麻団子を美味しくうに頬張り、口々に感想を漏らす。

「お、美味しいです！」

「本当！表面はカリカリで中はモチモチで食感も良いし！」

「甘すぎないところも良いのう」

三人共大絶賛だった。やはりというか、ムッツリーニは中華料理にも秀でているようだ。そんなにチャイナ服が好きか。

「お茶も美味しいです。幸せ・・・」

「本当ね・・・」

その二人はトリップしてるし。そんなに美味しいのかしら？

「それじゃ、私も貰いましょうか」

「・・・（コクコク）」

ムッツリーニが最後の一つを私に差し出す。軽く解析して見ようかしら。某赤い弓兵よろしく、軽くなら食材を確かめることもできるのだ。

「あ。いいなあ、それ」

「ん？半分いる？」

そう言う明久に、胡麻団子を半分渡してやる。ふむ、『物質解析  
アナリシス』  
・・・ああ。限定的な情報だけで良く分かる。これは 瑞希の料  
理だ。

「ふむふむ。表面はゴリゴリでありながら中はネバナバ。甘すぎず、  
辛すぎる味わいがとつても んゴパっ」

明久の口からは、おおよそ人体から出る筈の無い音が漏れた。く  
っ、一口であるの威力か！

「あ、それはさつき姫路が作ったものじゃな」

『サイコキネシス  
コンセントレート  
念動能力』、一点集中」

『サイコキネシス  
念動能力』って便利よね。応用が利くし 何より、死の危険から  
逃れられるもの。

「ロック照準・・・さあ。逝きなさい、明久・・・！」

「え、エリス！どうしてそんなに怯えた様子で胡麻団子の照準を僕  
に合わせるの！？無理だよ！食べられないよ！」

この走馬灯の見れる特殊な胡麻団子进行处理することができるのは、  
明久しか居ない・・・！

そんなことを考えながら、明久の口目掛けて胡麻団子を・・・

「うーっす。戻ってきたぞー」

救世主メシア再び。

「あ、雄二。おかえり」

「ん？なんだ、美味しそうじゃないか。どれどれ？」

そして躊躇いもなく明久の食べかけの殺人料理を口に運ぶ。技名は今、私命名。直訳だけど。

「・・・たいした男じゃ」

「雄二。キミは今、最高に輝いてるよ」

「結局、雄二ってそういう役回りなのよね」

やはり、あなたは救世主<sup>メシア</sup>だったわ。雄二のことは忘れない。

「？お前らが何を言っているかわからんが・・・ふむふむ。表面はゴリゴリでありながら中はネバナバ。甘すぎず、辛すぎる味わいがとつても んゴバっ」

あれ、何この既視感<sup>デジャヴ</sup>。

「あー、雄二。とつても美味しかったよね？」

(これは瑞希の料理よ？まさか酷い事なんて言わないわよね？)

床に倒れた雄二に目の合わないアイコンタクトで訴えかける。今ほど『意思疎通<sup>テレパシー</sup>』双方向の意思疎通ができないのを悔やんだことはない・・・っ！

「ふっ。何の問題も無い」

雄二が突っ伏したまま返事を返す。

「あの川を渡ればいいんだろう？」

「っちよ！それ、三途の川じゃない!？」

「雄二！その川は渡っちゃ駄目よ！」

まさか、あの一口でここまでとは。瑞希の料理、名実共に『必殺』  
になってきたわね。

「え？あれ？坂本君はどうかしたんですか？」

「あ、ホントだ。坂本、大丈夫？」

このタイミングでトリップしてた二人が帰ってくる。くっ、間の  
悪い！

「大丈夫だよ、ちょっと足が攣っただけみたいだから。おーい、ゆ  
ーじー、おきろー」

明久は軽口を叩き雄二を起こす仕草をしながらも、必死で心臓マ  
ッサージを施す。私の能力に治療形サイコキネシスの能力がないのが歯がゆい。私  
にできるのは、空気を念動能力で操作して擬似的な人工呼吸をする  
ことぐらいだ。

「六万だと？バカを言え。普通渡し賃は六文と相場が決まっ  
はっ！？」

無事に蘇生成功。余計なことを言い出す前に、明久が畳み込む。

「雄二、足が攣ったんだよね？」

「足が攣った？バカを言うな！あれは明らかにあの団子の」

『・・・もう一つ食べたいの？』

「足が攣ったんだ。運動不足だからな」

『意思疎通』<sup>テレパシー</sup>で伝えてやる。雄二が頭のいいヤツで助かったわ。流石に、級友をこの手にかけるのは忍びないもの。

(・・・明久、神代。いつかキサマを殺す)

(・・・上等だ。殺られる前に殺ってやる)

(・・・ふ、テキトーに考えた新技を見せてあげるわ)

笑顔の貼り付けて小声のやり取り。こんな私たち、仲良し三人組。

「ふーん。坂本ってよく足が攣るのね？」

拙い。美波が前と同じような状況を訝しんでる。どう誤魔化しましょうか。

「ほら、雄二って余計な脂肪がついてないでしょう？そういう身体って、筋が攣りやすいんだよ。美波も胸がよく攣るからわかるとぐべあっ！」

「・・・明久は俺が手を下すまでも無かったな」

と思つたら、明久が勝手に誤魔化そうとして玉砕していた。うん、ドンマイ・・・ん？メール？

ポケットの中で振動する携帯電話を取り出し、メールの内容を確認する・・・うわ、めんどくさっ。

「ん、エリス、どうかしたの？」

「いや・・・」

思わず眉を潜めたのに気付かれたようで、美波が声をかけてくる。私はため息をついて、

「ごめん。ちょっと用事ができたわ」

そう言い残して、教室から出て行った。

「あー、やっと来た。遅いよ、エリス？」

「早く来て欲しいなら、此処に着く前にメールしなさいよ。さっきメールを受け取ったのに、すぐこれる分けないでしょうに」

途中で野暮用をすませ、待ち人のいる校門へと赴く。だるい。正直目茶苦茶だるいけど、一応こんなのも私の知り合いだ。前もつて来ることも聞いていたのだが・・・まさか、本当に来るとは思ってたなかった。いつも通り冗談だと思ってたのに。

「酷いなあ。それが久々に会いに来た、旧友に対する態度？もうちょよつと喜んでくれてもいいじゃない」

「イヤよ。そんなことする暇があったら、世界征服の構想でもしてた方がマシね」

「うわっ、本当に酷い」

それにしても、可愛げの無くなった物だ。昔はあんなに面白かったのに・・・やっぱり、六年間みっちり弄り抜いた所為で慣れちゃったかなあ・・・

「まあいいわ。それで？私もそこまで暇じゃないから、そんなに案内してはあげられないわよ」

「大丈夫よ。基本的にあなたのクラスのところに入り浸るから」

「・・・勘弁して頂戴・・・」

ああ、こいつなら本当に居座りそうだから怖い。どうせあらぬ誤解を撒き散らすんだろうなあ・・・

「・・・はあ。とりあえず私のクラスのところ以案内するわ。その後私は召喚大会に出なきゃいけないけど・・・それでもいいわね、麗華？」

「召喚大会ってあの？それを見に行くのもいいかもしれないね・・・うん。とりあえずはそれでいいよ」

「言つとくけど、召喚大会の一般公開は三回戦からだからね？」

コイツ 山田麗華は、そんなことを言いながらついてきた。ああ、（仮）とか言ってたあの頃が懐かしい。

第十八話 小学校の友達とかと、街中で会うと何か気まずい（後書き）

という訳で、まさかの山田さん（仮）改め山田麗華さん再登場。ちなみに名前は書く寸前に決めました。

という訳で、感想・評価などありましたらお願いします。

第十九話 幼少の頃の友人は、あらぬ誤解を撒き散らす（前書き）

十九話。正直毎回前書きを書く必要もないような気がしてきました。

## 第十九話 幼少の頃の友人は、あらぬ誤解を撒き散らす

問 以下の問いに答えなさい

『日本の民法における結婚適齢は何歳か答えなさい』

姫路瑞希の答え

『男性は18歳、女性は16歳』

教師のコメント

正解です。2009年の法制審議会で、男女共に18歳に統一すべきたとの最終答申が報告されており、政府方針として改正する方向のようです。

改正されると、姫路さんの結婚できる日が先延ばしになってしまうかもしれませんね。

吉井明久の答え

『愛があれば歳の差は関係ありませんよ』

教師のコメント

夢と希望をありがとございます。

神代エリスの答え

『愛があれば、歳の差なんて関係ありません』

教師のコメント

何でこんな不思議なところで息が合うんでしょうか、あなたたちは。

さて、麗華にFクラスの場所を教えた後。一回戦の・・・なんて  
いったつけ。とにかくDクラスの二人をボコボコにした後、色々あ  
って屋根裏から教室に戻ってきた私が見たのは坊主とモヒカンの先  
輩だ。なんと言ったか・・・常・・・村だつけ？と、夏、何とか？  
駄目だ。覚えてない。とにかくその先輩が今、みかん箱に難癖つけ  
てる。

「おい、どういう事だよこれは！こんなゴミで誤魔化しやがって！」  
言ってることは正論なのだが、如何せん言葉が悪い。人相も悪い。  
これじゃ、抗議というよりは営業妨害のほうが正しいだろう。

と、秀吉が明久と雄二を伴って帰ってきた。私より早く終わった  
はずなのに、一体何してたんだか。

雄二はこの現状を見て、何事かを秀吉に耳打ちした。秀吉が頷い  
て教室を出て行くのを確認した後、『空間転移』テレポートで隣に移動する。

「遅いわよ」

「ああ、悪い」

若干非難の目で雄二を睨むと、素直に謝罪が返ってきた。バツの  
悪そうにしてるし、よっぽど下らない事情で遅れたのだろう。

「今からあのバカどもを始末してくるから、それで帳消しにしてく  
れ」

「・・・はあ。明久。あそこのチンピラの顔を覚えておきなさい」

「？よくわかんないけど、了解」

現状、あいつらを黙らせることができるのは雄二のみだ。こんな

公衆の面前で超能力なんて使おうものなら面倒臭い事になる。

「まったく、責任者はいないのか！このクラスの代表ゴペツ！」

「私が代表の坂本雄二です。何かご不満な点でもございましたか？」

礼儀正しい態度で相手に近づき、恭しく話しかける雄二。頭を下げる所作と言い、直前に殴り飛ばしてなければ模範的な生徒のようだ。

「不満も何も、今連れが殴り飛ばされたんだが・・・」

「それは私のモットーの『パンチから始まる交渉術』に対する冒涇ですか？」

血も涙もない交渉術があったものだ。

「ふ、ふぎけんなよこの野郎・・・！なにが交渉術ふぎゃあっ！」

「そして『キックでつなぐ交渉術』です。最後に『プロレス技で締める交渉術』が待ってますので」

「わ、わかった！こちらは夏川を交渉に出そう！俺は何もしないから交渉は不要だぞ！」

「ちょ、ちょっと待てや常村！お前、俺を売ろうと言うのか！？」

あわてた様子でモヒカンに抗議する坊主頭。ああそつだ。夏川と常村だった。

「それで常夏コンビとやら。まだ交渉を続けるのか？」

「い、いや、もう十分だ。退散させてもらっ」

仮面が外れ、剣呑な雰囲気漂わせる雄二に尻込みし、撤退を選ぶ常夏。賢明だ。

「そうか。なら」

それを見た雄二は、何を思ったのか腰を落としてモヒカンの腰を抱え……

「おいっ！俺もう何もしてないよな！？どうしてそんな大技をげぶるあっ！」

「これにて交渉は終了だ」

思い切りバックドロップをかました後、平然と立ち上がった。中々楽しい交渉術だったわ。

「お、覚えてるよっ！」

悪役のテンプレートみたいな台詞を吐いて逃げてゆく常夏……ふむ、一応『保険』を掛けところかしら。すれ違いざまに、ポケットの中のある物を背中に貼っつける。

さて、後の問題は、と。

『流石にこれじゃ、食っていく気はしないな』

『折角美味しそうだったんだけどね』

『食ったら腹壊しそうだからなあ』

あいつらが残して言ったこの空気ね。そんな中、大袈裟なほどに音を立てて席を立ったのは……竹原、か。こういう催し物に関してあまり関心がなさそうな癖に、余計な事をしてくれる。

『店、変えるか』

『そうしよっか』

「あ、お客さん！」

竹原が席を立つや否や、次々と他の人物までも席を立とうとする。集団心理ってヤツね・・・本当に、余計な事をしてくれたものだ。だがまあ、さっきの雄二の指示も間に合ったことだし、この場は誤魔化すしかない。

「失礼致しました。こちら側の手違いでテーブルの搬入が遅れ、暫定的とはいえこのような物を使ってしまっ事になりました。ですが、ただいまテーブルが到着しましたので、入れ替えの済むまでどうぞゆっくりと御寛ぎ下さるよう」

そういつて私の示す先には、秀吉を含む幾人かの男子生徒が運ぶ立派なテーブル。さっきの耳打ちはこういうことだったわけだ。ふむ、雄二も一応考えてたみたいね。

「それでは、他のテーブルが届き次第順次入れ替えますので、ご利用のお客様はひとまずこちらのテーブルにお移りくだされば。このような粗相のあった事、従業員一同心よりお詫び申し上げます」

そういつて優雅に一礼する。周りの人も空気を呼んで礼。明久だけは良く判んなかったみたいだけど、美波に頭を下げさせられてた。ああ、敬語は疲れる。というか慣れてない。

「お帰りなさい。瑞希、美波」

で、いつの間にか帰ってきていた瑞希たちにも挨拶をしておく。さっきはスルーしたけど、よく考えたら試合に行ってたはずだ。あの様子からして勝ったみたいだけど。

「ん。ちゃんと勝ってきたわ」

「エリスちゃんも、お疲れ様です」

ふむ、ということとは途中経過は順調、と。

「で、雄二。あれでよかったかしら？一応聞くけど、替えのテーブルの当てはあるんでしょうね」

「ああ、助かった。対応に問題はないし、替えのテーブルはこれから調達する」

しかし、と雄二は言葉を区切り。

「やはりお前がやると違うな。少なくとも外面だけなら、俺何かやりずっと洗練されてる」

「そりやまあね。あんた直前にクレマーを叩きのめしてるし」

それだけでなく、前世ではそれなりに良いトコで育ってきたからね。そういった礼節ならばそこの高校生よりも格段に優れてる。

「それにしても調達、ね？たまにはまともな方法で切り抜けなさい  
「よ」

雄二の事だから、どうせどっかからパクってくる気だろう。コイツ等たまには平和的に解決する気はないんだろうか。

「ふん。そんな余裕があればそうするさ」

「それって、ウチらは手伝わなくていいの？」

いつになく美波が優しいのは、やはり瑞希の転向が関わってるからだろう。この喫茶店で失敗することは基本的に避けたい。

「別に大丈夫でしょ。それよりも今は接客ね。失った客の分も頑張らないと。もちろん笑顔で愛想良く、よ？」

「はいっ！頑張りますっ！」

元気に返事する瑞希。その姿を見るだけでも癒されると言つものだ。この笑顔を失うことなど・・・今は、考えたくない。

「おい明久。行くぞ。そんなに時間もない。」

「あ、うん。でもどこに行くのさ？」

「さっきも言っただろう？」

部屋を出ようとしたところで明久に呼び止められ、口の端を吊り上げる雄二。

「テーブル調達だ」

そんな物騒な言葉を口にし、雄二たちは教室を後にした。

さて、あれから数十分。店内は閑散とし、客はそんなに多くない。ちょっと憂鬱になる。今接客に当たってるのは瑞希と秀吉の二人だけだ。美波は妹を迎えに行くとかで言ってしまった。

で、私といえば客として座り込み、お茶を啜りながら胡麻団子を頬張っていた。うん、美味しい。

「それにしても暇ねえ、こども客が来ないと」

「仕方ないですよ。あの風評もあるでしょうし」

「うむ。今は来ている客を大事にすることが大事じゃ」

うーむ、秀吉は前向きねえ。まさに美少女の鏡。

と、そんなことを話していると、新たな客がやってきた。秀吉の言う通り、評判が悪い以上今居る客を大事にしなければならぬだろう。

「いらつしゃいませ、Fクラス中華喫茶にようこそ！何名様ですか？」

さつき言ったように、瑞希が愛想う良く接客する。だが、その客はそんな瑞希をスルーして私の向かい　みかん箱を挟んだ向かい側へと座ってきた。あまりにも平然と腰掛けたので、瑞希が戸惑いの声を上げる。

「え、えつと・・・」

「相席、いいわよね？」

「・・・はあ」

やはりというか何というか・・・やってきたのは麗華だ。今まで居なかったのが不思議なのだが・・・どうせ、こいつの事だから何かやってたんだろう。妙なところでちゃっかりしてるし。

「あ、ああ！山田さん！」

「あ、覚えててくれたんだ？こっちは本当の意味で久しぶりね、姫路さん」

「？お主らの知り合いかのう？」

親しげに話す私たちを見て、秀吉が首を傾げる。ああ、そういえ

ば紹介してなかった。

「ええ。エリスと姫路さん、ついでに吉井の小学校のときの同級生で、山田麗華よ。よろしくね。えーっと・・・君が、木下秀吉クンでいいのかな？」

「丁寧な自己紹介、感謝するぞい。うむ、ワシが木下秀吉じゃ。それにしても、明久たちの同級生のう」

互いに頭を下げあう。あと麗華を知らないのは・・・美波と、雄二かな？翔子は知ってるはずだし・・・ああ、後優子か。

「ええ。明久たちの同級生で・・・」

ん？まだ何かいうことがあっただろうか。自己紹介なんてあんなものだと思うのだけど。

麗華は笑顔のまま口を開き

「 エリスの恋人よ」

「 違っわボケ」

即座に否定し、絡めてきた腕を神速で振り払う。秀吉と瑞希が目を丸くしている。ああ、そこを説明しなきゃならないのね・・・

中学の頃は慣れた物だった説明も、今ではすっかりご無沙汰だ。

面倒臭いなあ・・・

第十九話 幼少の頃の友人は、あらぬ誤解を撒き散らす（後書き）

別に麗華さんは百合ではありませんよ？多分。

それはさて置き、感想や評価など在了りましたらお願いいたします。

## 第二十話 帰国子女は皆英語が得意な訳じゃない（前書き）

ものすっごい遅れました。しかも本文は中途半端。本当に申し訳ない。

そしてPCが起動しなくなるという一大事に。一応修理には出す予定なのですが、暫くは携帯でせましくやっつくことになりそうです。

そんな有様ですが、これからもよろしくお願いします。

## 第二十話 帰国子女は皆英語が得意な訳じゃない

問 以下の問いに答えなさい

『PKOとは何か、説明しなさい』

姫路瑞希の答え

『Peace Keeping Operation（平和維持活動の略）の略。』

『国連の勧告の元に、加盟各国によって行われる平和維持活動』

教師のコメント

そうですね。豆知識ですが、United Nations Peacekeeping Operationsとも呼ばれたりします。余裕があれば覚えておくと良いでしょう。

329

土屋康太の答え

『Pants Koshi-ttsuki Oppaiの略。』  
世界中のスリーサイズを規定する下着メーカー団体の事』

教師のコメント

君は世界の平和を何だと思っているのですか。

吉井明久の答え

『パウエル・金本・岡田の略』

教師のコメント

それは世界の平和を守る人達です。

神代エリスの答え

『Plasmanight OMEGA model』

教師のコメント

何ですかその必殺技は。

それは、私たちがまだ中学二年生になったばかりの頃の話。

迷路の一件以来親しくなった私たちは、それなりに仲良くやってきた。うん、まあ、麗華の反応が楽しかったから事あるごとに弄ってたけど、結構仲は良かった、はずだ。

そんなある日、いつものように麗華を弄っている時の事だ。

「ああそうだ。何か仕返しになるようなことをすればいいのよ！」

「・・・何を藪から棒に」

しかも何か目が虚ろだ。怖い。こんな目を見るのは、二年前の瑞希の料理指導以来じゃないかしら。

「私は今まで、どうすればこの馬鹿から逃れられるかと考えてきたわ」

「本人を前に言う台詞じゃないわね」

「うるさいわね。そして今、名案を思いついたわ！」

「私を逆に弄り倒して、私から離れるように仕向けたって？」

「そう、エリスを逆に……って、先に言わないでよ!？」

だって、麗華の考えってすごぶる分かり易いんだもの。これくらい朝飯前よ。

「というか、それって最初に思い至るべき答えだと思っただけど……」

「だからうるさい」

いってること自体は正しいと思っけど……でもなあ。麗華如きに手玉にとられるとか一生ものの屈辱だと思っ。

「……今、何か失礼なこと考えたでしょう」

「ええ。流石の私も麗華に弄られるほど墮ちちやいないなあって」

「そこって普通は言葉を濁すところじゃないの!？」

「まあね? だけど、麗華なら多少失礼でも問題ないかなあって。寧ろ役得?」

「その発言が何より失礼だと思っただけどっ!」

やっぱり、麗華は弄られる立場の人間だよな。すぐムキになるあたり。

「みたいなことがあつたのよ」

「ああ、あつたねー。そんなことも」

「……何でそれが、山田殿の『恋人』宣言に繋がるのじゃ?」

「私にも良く分かりません……」

私たちの話を聞いて、首を傾げる秀吉と瑞希。あれ、わかんないかな？

「要はあれよ。麗華なりの仕返し、見たいな？」

「どういふことじゃ？」

「だから、私が回りに百合扱いされるのを嫌だっけ知っててわざとああいう言動を・・・」

「「「ええっ！！？」「」「」

驚かれた。なぜか麗華にまで。

「何で驚くのよ！？特に麗華！あんたはわかってるはずでしょ！？」

唯一話の通じそうなヤツに詰め寄る。コイツはこのネタで私を二年間苦労させたんだから、もちろん分かった上での発言だったはず・・・っ！

「あー、うん。モ、モチロンワカッテタヨ？」

「何故に片言！？」

「エリス いや、何も言うまい。それがお主の選択ならば、ワシはそれを見届けるだけなのじゃ」

「ちよつと待て！何で秀吉はそんなにシリアス入ってるの！？その哀愁に満ちた瞳を止めなさい！」

「え、あれって狙ってやってるんじゃないんですか！？？」

「それは前に聞いた！」

ちくしょう、私の周りにはこんなのはっかりかつ！そもそもなんで皆そんな認識？私なんか悪い事したの！？

「いや、エリスのそれは自業自得だと思うのじゃが」

「それも前に聞いたわよっ！」

「うん、ゴメンね、エリス。私、単純に照れ隠しかと・・・」

「何だよ！どこにそんな要素があつた!？」

「え、あれって狙って」

「瑞希しつこい！ああもう！私（召喚大会の会場に）帰る！もう（三十分くらいは）ガンダムウエイトレス何て乗やってやるもんか！」

「ああっ、待ってエリス！」

「そうじゃ！待つのじゃエリス！わしは信じておるぞ！」

「うっさい！秀吉なんか、近所の男子中学生に告白されてるくせにーっ！」

「何でそれを知っておるのじゃ!？」

そう言い捨てて教室から駆け出す。くっ、こんなときに不法駐車  
のバイクでもあれば、リアルに盗んだバイクで走り出せるのにつ！

さあ、二回戦だ。

「どうしよつかしら・・・」

「・・・どうしましょうか」

さて、二回戦目。対戦表を見た感じだとBクラスの二人がきそう  
だったんだけど・・・実際に勝ち上がってきたのはEクラスコンビ  
だった。好都合と言えば好都合なんだけど・・・うん、どうしよ  
うか。

『Fクラス

神代エリス

VS

Dクラス

清水

美春

英語W

12点

VS

112点

』

「………本当に、どうしようか……っ！」

「美春も予想外でした……苦手とは聞いていましたが、まさかここまで酷いとは」

「いやいや、二桁取れてるだけでも僥倖よ？いつもは一桁だし。」

「とりあえず清水さんは一人のほうを相手にしといて。あと一人は……まあ、奥の手使えば何とか」

『おい……あの金髪のほう、神代エリスだろ？』

『ああ。俺らの代表をオトしたやつだ』

『Fクラスほどじゃないにしても、数少ない女子を持っていきやがって……』

『野々村、お前はあのドリルを相手にしろ。神代は俺が倒す』

『寝言は寝て言え。神代の相手は俺に決まってるだろ？』

「何とか……なると、いいなあ」

「……とりあえず、一人倒すまでは持たせてください。幸い、点数自体は私のほうが高いので」

冷や汗が溢れ出てくる。別に故意にやったわけじゃないのに……何ゆえにそんな敵意ビンビンのさ。

「んじゃま、任せたわよ。清水さん」

「ええ。お姉様のためを思えばこのくらい、苦もありませんわ！」

勇ましいことをいいながら相手に突撃する清水さん……ん？

『いいから黙って任せてろ！あいつは俺の獲物だ！』

『うるせえ、引っ込んでろ！』

『んだと！？やんのか！』

あの二人、まだ言い争ってるんだけど……あ、召喚獣が戦い始めた。点数が見る見る減って……ダブルノックアウトね。うん、勝ったわ。

「……勝者は、神代さんと清水さんのペアです」

「……帰りましょうか」

「……そうですね」

どこか釈然としないまま、私たちはそれぞれの教室へと戻っていた。

「お兄さん、すいませんです」

「いや。気にするな、チビッ子」

「チビッ子じゃなくて葉月ですっ」

教室の前に行くと、そんな声が聞こえてきた。この声は雄二と……誰？人ばかりで見えない。仕方ないなあ。

「こんなときこそ空間<sup>テレポート</sup>転移、っと。どつたの、雄二……」  
「おう、神代か？いま、このチビッ子が……」

「・・・雄二。さすがに小学生は犯罪よ・・・？」  
「違うっ！別に誘拐したわけじゃないし、俺は断じてロリコンではない！」

いつまでも翔子になびかないと思ったらそういう・・・いや、私は雄二のことを誤解してたわ。そうよね。性癖は人それぞれ、よね。

「分かってる。でも翔子に見つからないようにね？後私の半径5m以内に近寄らないで」

「その目は分かってねえ！絶対に誤解してる！」

「まあ分かってるけどね。それで、葉月ちゃん。迷子？美波だったら中に居るけど」

「あ、エリスお姉ちゃん！違うんです、葉月は人を探してるんです」  
「」

「その扱いはひどくないか!？」

雄二と共にいたのは島田葉月ちゃんだった。美波の妹で、勝気な目とか元気なところが良く似てる。残念ながら胸の成長する見込みはなさそうだ。

涙目で叫んでる雄二は放って置いて教室に入る。男の涙目なんて気持ち悪いだけだ。

「まあいいがな・・・それで、探しているのはどんなヤツだ?」

「ああ、男共。それ以上近寄ったら吊るすわよ」

「あ、あの、葉月はお兄ちゃんを探してるんですっ」

入った瞬間取り囲もうとする男共を牽制しながら、葉月ちゃんの話聞く。このクラスは真性のロリコンも多そうだし。

「お兄ちゃん、って・・・名前はなんていうの?」

「あう……分からないです……」

ちよっと哀しそうに目を伏せる葉月ちゃん。何この子、抱きしめたい。

「？家族の兄じゃないのか？それなら、何か特徴は？」

「……はっ、いやいや、こんな事考えてる場合じゃない。それで葉月ちゃん、それってどんなお兄ちゃんだった？」

「えっと……」

尋ね、葉月ちゃんは数秒思索すると、

「バカなお兄ちゃんでした！」

満面の笑みと共に凄い特徴を挙げてくれた。

「そう……」

「……たくさん居るんだが？」

答えに窮していると、視線を巡らせた雄二が答えてくれた。とうかこのクラスの九割が『バカなお兄ちゃん』だ。ちなみに一割は『バカな』で引つかかる雄二と『お兄ちゃん』で引つかかる美波と秀吉に、両方で引つかかる私と瑞希ね。

「あ、あの、そうじゃなくて、その……」

「ん？他にも何か特徴があるの？」

「その……すっごくバカなお兄ちゃんだったんです！」

『『明久ね(だな)』』

小学生にそこまで言わしめる人物、そうは居ないだろう。

「全く失礼な！僕に小さな女の子の知り合いなんていないよ！絶対に人違い」

「あ、バカなお兄ちゃんだっ！」

途端、明久に飛びつく葉月ちゃん。

「絶対に人違い、が何よ」

「・・・人違い、だといいなあ・・・」

何かを諦めたように乾いた笑いを洩らす明久。目がどこか遠くを見てるような気がする。

第二十話 帰国子女は皆英語が得意な訳じゃない（後書き）

いかがでしたでしょうか。感想、評価などありましたらお願いします。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2606j/>

---

バカとテストと召喚獣～幼馴染は超能力者～

2010年10月13日13時52分発行